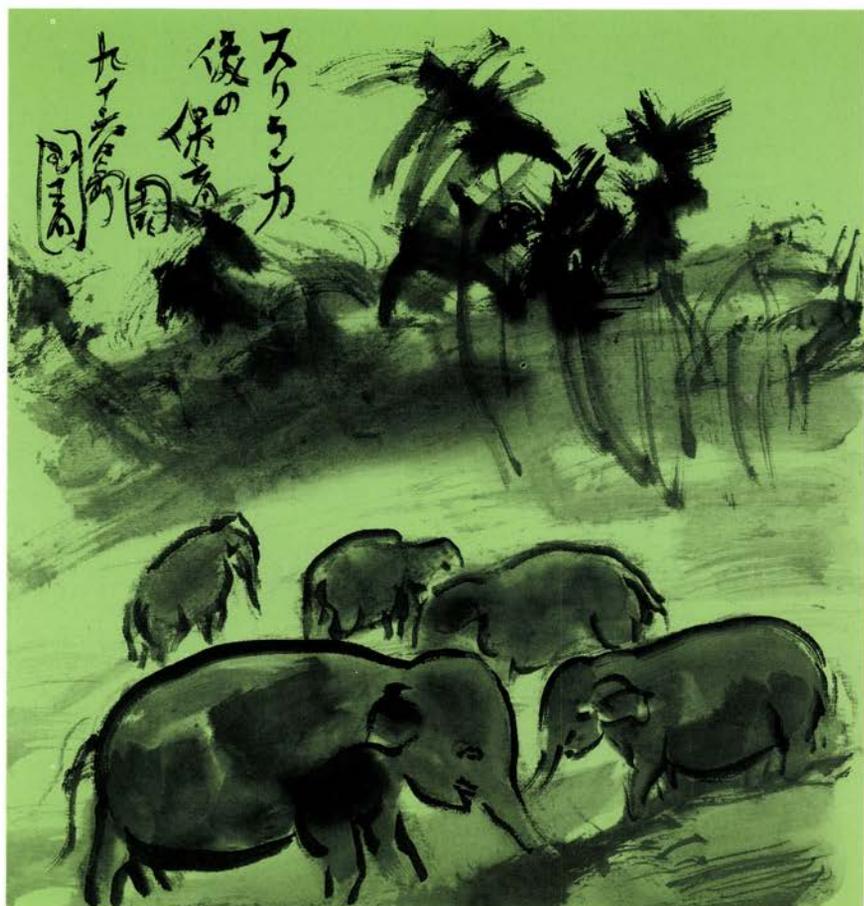


川柳塔



No. 864

創刊75周年記念大会特集

五月号

川柳句集

椿守

八木千代

序—橋 高 薫 風
B 6 判・160頁・上製本
定価 2500円 (送料別)

椿くわえて春を銜えて歩きたし
書きすぎぬように大事なひとに書く
夜明けまで山の向こうに行ってくる
若かりし日の母の手の匂いかな
箆に吊すあさきゆめみしゑひもすと
われは雁 月の真上を渡るなり
自らを傷つけて鳴る楽器たち
いざとなればうしろの薬に火をつける
枯野にも小さな弓は負うてゆく
椿もし振り袖着れば雪の紋

●川柳塔社事務所でも取扱います

発行所

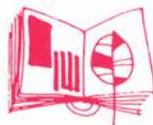
葉文館出版

〒556-0003

大阪市浪速区恵美須西二丁目一
TEL 〇六・六六三四・五五四八

自費出版

川柳・俳句・エッセイ・小説



新聞・チラシ・ポスター・伝票等

あらゆる印刷物の事なら、まずお電話を……。
あなたの思いをかたちにします

美研アート

〒530-0022 大阪市北区浪花町9番4号
TEL・FAX (06)6372-1178

路郎の精神

川柳の質的向上

橘高 薫風

川柳塔創刊75周年記念川柳大会を盛会裡に終ることが出来た。懇親宴から最後のお一人が退出されるまでテーブルの前に腰掛けたまま動かなかった私の胸は、感謝の念でいっぱいだった。ご参加の各位に心からお礼を申し上げます。今年は無可能な限り各地の句会に、そのお礼の意味を込めて出席したいと念願している。突然の上梓であった句集『師弟』は、麻生路郎先生のお作と私のを並べてみてその距りがよくよく分かった。先生のは生活の臭いが沁み込んでいるのに、私のはきれいな事と終っている脆弱さが顕著だ。今になって気付いても遅いのだが、この差は如何ともし難い。

それでは自分の目で見た自分の句の特徴はというと、一句に言わんとする一事を明白に述べていること、そして句のり

ズムが頑固なまでに私のリズムで通していることであろうか。前者は穿ちの徹底であり、後者は路郎語録の一つ

「句はその人のころである。十七音字はその人の姿である。リズムはその人の呼吸である」の遵守であると思ふ。

親しい友人が私の句に関しての発言で、「胃半分肺半分の湯呑だなあ」と作句して、後日下句を「湯呑かな」と推敲したと発言しているのを聞いたが、それは間違いで、語尾のあやふやな句は忌避することはあっても納得することはない。手術後ベッドに帰り、麻酔が覚めて意識を取り戻したとき、

胃半分肺半分のいのちかな

と句が出来、数日して使い慣れた湯呑で熱いお茶を飲んだとき、湯呑のいとおしさから、いのちが湯呑に転換したのだ。心境がいささか客観的に見られるようになったわけで、句集には後者を定着させたことになる。また、

菊活けて一ト時慾を忘れたり

という清水白柳さんの句がある。これを「忘れけり」と引用した人があったので

その間違いをすぐに指摘したことがあった。孫引きをされると間違いがどんどん広がるからである。

思のある人の娘をきらい抜き

一寸した血はなめて置く大工の手

というふうな剛直なリズム感を好む作者（もちろん例外もあるが）だから、けりではなく、たりを用いられるということ、その作者のスタイル（内容とリズム）を理解し、句を記憶することで正確を期することが出来ると私は思っている。

作句の道は主観客観の別はあっても、句の内容に文芸的把握を、句の綾にリズムを取り入れ、諷刺、ユーモア、抒情の硬軟、剛柔を引き立てる用語の能力を修得することにあると思ふ。

あとは真実、感動、出会いがあるばかりなのだ。

とは言え川柳が、ひちむずかしい言辞を弄する類のものばかりでは減んでしまふ。それぞれの人がそれぞれの色で句を成して隆盛を見るのだが、須崎豆秋さんのように、雨の題が出たら雨の日に街へ出て作句するような、真実の出会いを求める作者になりたいものである。



座右の句

人恋し人煩わし波の音

私の句

浄土まで電話かけたい用がある

(一葉)

山本 正光

川柳塔 五月号 目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

■巻頭言 路郎の精神 川柳の質的向上

書画柳一如

川柳塔(同人吟)

佳句感想

科学のたわごと アベコベガエル

自選集

川柳の群像 山田良行

誹風柳多留二四篇研究 5

水煙抄

大空のころろ (100)

秀句鑑賞 同人吟

水煙抄

渺湖抄

茴香の花

橘高薫風 … (1)

波多野五楽庵 … (2)

橘高薫風選 … (4)

橘高薫風 … (52)

阿萬萬的 … (51)

東野大八 … (56)

河内天笑選 … (62)

橘高薫風 … (87)

林 荒介 … (60)

芳地 狸村 … (91)

八木千代選 … (88)

西出楓楽選 … (92)

書画柳一如

波多野 五楽庵



句を鑑賞したり添削をして
いるうちに絵に例える事
がよくある。例えば句箋に
自分の句を描く時にどうし
たら選者の目に止まるだろ

うかと。独特な間を置いたり、個性の強い
字で描いてみたり、二行に分けたり、既に画
家であり書家の境地に居ると言つてよい。

句箋の書き方には特別にこうあらねばならぬ、
と言う規定はない。一枚の紙片を余ることなく
不足する事なく自分の句を書くだけである。
視覚効果も充分考えてバランスよく文字を
配置する。たとえ字は下手でも読みやすい
文字で書く事が要求され、すばらしい句で
あると自負をしても肝心の選者に判読してい
ただかなければ意味がない。視覚効果と言う
絵画的な要素と下手でもしっかりした書のた
しなみが要求されるのである。川柳もしかり。
光満つ五百羅漢の胸の線 杜的
ここには百花爛漫たるカラーの世界でなく、
あくまでも寂然としたモノクロの背光とし

「面」

一路集「備える」……………橋本多哥由選 …… (94)

「いよいよ」……………井齋一齋選 …… (94)

初歩教室「ゆっくり」……………石原靖巳選 …… (95)

吐田公一 …… (96)

川柳塔創刊75周年記念川柳大会特集…………… (98)

奥山晴生・牛尾緑良・土橋 螢・白根ふみ・山門幸夫
櫻庭順風・小玉満江・永田俊子・後藤早智……………

ネパールの旅を終えて……………藤田泰子 …… (124)

■句集鑑賞『椿 守』……………木本朱夏 …… (125)

各地柳壇(佳句地十選/岩本笑子)…………… (126)

四月本社句会……………春城武庫坊 …… (146)

水田民平さんを偲ぶ…………… (147)

柳界展望…………… (149)

五月各地句会案内……………田中正坊 …… (150)

閑人閑話 カタカナ語川柳……………みつ子・希久子 …… (151)

■編集後記……………

座右の句……………

減るものでない真心を出し惜しみ……………(柳宏子)

私の句……………

今聞いた陰口流す水の音……………津村 志華子



っかりしたデッサンが私の胸の線を絵のよう
に浮び上がらせている。

いい出会いありそ、春の芽を見つけ 太茂津
あたかも水彩画のようなくししの姿が浮ん
で来る。フォーカスされた春の淡さが薄みど
りとなって見えて来る。

赤なまこ地酒が欲しくなってくる 鬼遊
一〇〇ワットの電球の下でおでんの湯気が
立ちのぼる。旅の駅の裏にも海の匂いが満ち
ている、色鉛筆の絵葉書のような情景がうっ
し出されている。

雑木林から呼びかける千の種 千代
ここにはゴッホの太陽もダリの派手さもな
い。しっとりとしたセピア色があたかも霧で
描いたキャンパスのように立ち止まらせてく
れる。大先輩の自選句の中から沢山のすばら
しい絵を見る事が出来た。忘れたいのは路
郎先生の

雲の峯という手もありさらばさらばです
あたかも雲に上る竜のように厳しさとびく
ともしない太い字が見えます。

まなうらに一人の姿とどめて 秋 智子
そこには哀と愁の源氏物語の絵と一筆描き
のひらかな草子。

このように句の中にも絵があり書が見え
る。私はこれを書画柳一如とよんでいます。



橘 高 薫 風 選

竹原市 岩 本 笑 子

イチゴ買うきれいな皿を買ったから
発表会手抜き主婦には見えません

うどん呼ばれて昔話を聞いてあげ

赤い傘青い傘今日月曜日

過去を切るハサミを買いに行ったまま

地下足袋も軍手も夫の形して

鳥取県 新 家 完 司

波の音だけが聞こえるひとり酒

汚れたのはお金の味を知ってから

パチンコ屋どなたも脳波停止中

「崩壊」の文字がちらつく世紀末

ムーミンもトトロもない迷路なり

おにぎり持って春の小川を見に行こう

唐津市 久 保 正 剣

シナリオは胆管癌といういのち

鯨追う依怙地な夢を捨てきれず

ワープロに涙で濡れた文字がない

深夜料金イブはゆっくり更けてゆく

竹槍とバケツそれから平和呆け

SOSもう助けには来てくれぬ

ミサイルを防ぐ術ない空の青 唐津市 宗

無党派を当てるには情けない

贈賄は輪廻転生する如し

賛成と鶴の一声椅子温め

保母さんが夢であったと夜の蝶

志野焼きの彩に魅せられ小半日

弘前市 齊 藤 茄

地吹雪よいつまで続くジャッパ汁

子供らは雪合戦の名人や

父さんが帰り家中灯がともる

水 笑
(弘改め)

お日様が出て雪下ろししていった
寒風が作ってくれた干し餅よ

りんご樹の根から津軽は春になる

豊中市 田中正坊

百年の歴史が重い世紀末

泣き笑いペンシル抱いて五十年

カタカナ語ドクターとなる葱坊主(辞典出版)

一男と一女 四十路の坂を行く

若い娘と仕事のはなし珈琲館

一人ずつ等身大の穴を掘る

今治市 越智一水

スキップをするようあの世へ消えた友

手のひらへ春の光をのせて見る

雲無心 お前も無心になれと言う

ガイドライン日本守るとは神話

春の小川メダカが消えて子がいない

老妻としまなみ歩く春のうた

鳥取市 石上悦子

おかわりは駄目ですこれは飲み茶

お隣のレーンに飛んだボーリング

母妹娘くつは私と同サイズ

裏の樹に下品な声の鳥が来る

こだわりは若葉の頃に似合わない

投函後誤字はニンマリしはじめ

和歌山市 川上大輪

出る杭は打たれ出ないといじめられ

人文字の一人が泣いているようだ

お地藏さんと目が合うたから拝んどく

見るなど書いておけば誰かが見るだろう

牛歩でも良し逆転は考えぬ

霊安室の静けさだけは本物だ

海南省 三宅保州

見上げれば太陽もある星もある

遮断機が上がると迷うことはない

解凍をされてるように沁みる酒

息子から叱られたのが嬉しくて

コーヒーで乾杯をして笑い合い

動物園で産まれて怖いもの知らず

唐津市 樋口輝夫

蛍雪を知らぬ子どももの塾通い

匿名の恋文バレンタインデー

無口とは誰のことだろ長電話

先憂後楽 明治生まれの太い眉

一合で本心みんな曝け出し

正確に結婚した日覚えてる

弘前市 佐治千加子

雪の日はさくさくりんご噛んでいる

いちばん遠くいちばん近い亡夫ならん

どか雪で追伸は届かぬらしい
口封じの風をまとうて来た男
似た者同士 津軽毎日雪見酒
津軽風はるかな春を呼ぶように

青森県

西谷大吾

なあ亀よ今日ものんびり生きようよ

自画像の耳と口とは小さめに

春だからちよっと気取ってアデランス

路味噌を酒の肴に春を飲む

恐山 夕陽の彩の風車

恐山 婆の涙が石濡らす

米子市

白根ふみ

伯耆富士 裾野は露の臺で黄

老眼に香りが見える露の臺

匂の味骨の髓まで露の臺

探梅の車椅子にもやさしい陽

探梅の源流はまだ雪だろう

陽の沈むまでが門限美術館

香川県

池内 かおり

涼子ちゃんが行くから倍率高くなる

灰色に近い白などあるものか

はたらいてはたらいて汚い金に縁が無い

笑えない右も左も花紛症

梅干しの種とカークダグラスの顎と

茶髪ピアスついに男もマタニティー

寢屋川市

岸野 あやめ

週刊誌おんなはみんな痩せたがり

老妻と犬はやつぱり裏切らぬ

冷えた仲ぶらぶら釘見ないふり

一人死し四人を生かす大決意

ハードルがだんだん高くなる余生

傷ついたハートに貫い手が居ない

和歌山市

古久保 和子

禁煙の文字に夫のアレルギー

鼻めがね何か文句がありそうな

イエローカード三枚こづかいは減額に

空欄に抵抗力を溜めた紙

お屋敷は閉めたままなり沈丁花

身に降り懸るまでは唱える脳死論

鳥取県

石谷 美恵子

人相のやさしい縄にしばられる

さり気なくリストラ打診されている

誰からも良い人当てにならぬ人

いい勉強になったと勝負からおりる

好きだから会うと必らず眼を伏せる

子を産まぬ女優日本一の母

西宮市

秋元 てる

故郷遠くしてた北窓目貼り剥ぐ

うつらうつら老母教え魔のかけもない

平等に人は老いると信じていた

物言いの気障なグループやり過ごす

ウンばかり書くと鉛筆すぐちびる

セピア色の己が写真にうーんうん

東大阪市 谷口 義

生き方は変えず言い方を変える

初恋の人が隣で餅を焼き

誰もほしがらぬ私のドナーカード

税務署に行くのはいつもいのちがけ

ほしいからほしいと言える齡でない

正式な妻だと言ったことはない

大和高田市 岸本 豊平次

断りに歯医者の子約と言っておき

富士びたい消えた額を見る鏡

振り向けば蹟く程でない高さ

古稀すぎて故里で聞く友の訃を

電気器具毀れだしたらつづくのか

お葬式 離婚 結婚ワイドショー

大阪府 八十田 洞 庵

グラスいま妖しい色をかもしだす

縁を切る男へ胸の透く啖呵

三猿を捨てて御説に合わします

追い打ちをかける無情のカルテ書く

銀河鉄道駅弁買うて乗りたいな

写経百巻仏の膝に近く居る

熊本市 永田 俊子

死は必至軌道を外れぬ寒帛

石女が喉で止めてる育児論

テポドンの狼煙に平成の惰眠

少年とナイフを春が恐れてる

聖書がなぜかホテルにおいてある

熊本県 高野 宵草

せっかちな友がぼっくり訃の知らせ

散り果てて桜へやつと元の日々

後生大事に賞味期限が切れました

おでんならやはり今夜は日本酒で

臥す妻に不味いお粥が出来あがり

唐津市 山門 幸夫

啓蟄や爺が綿入れ脱ぎにけり

北帰行君たちいいなア故郷帰り

ステッキの代りの孫の手が温い

蕃たちおちよぼの唇に薄い紅

ピク一杯釣れて撤き餌の恐ろしさ

唐津市 山門 夕ミ

昇天に希望の生命引きつがれ

今着いた電話にほつと肩ゆるむ

振りかえりあきつかった峠まで

現代子国旗君が代五輪だけ

人生の別れ思うと泣けてくる

鳩バスの陳情団は燥ぎ過ぎ

唐津市 山口高明

息止めて見たけど死ぬ洗面器

化け学が専門でした逝った兄

女性から迫って悪いことは無い

外交と喧嘩恫喝するが勝ち

唐津市 仁部四郎

スピードは要らぬ地球儀回すのに

わがままなスピードで散る青い花

振り袖がよく飲みました謝恩会

法律をべらべら喋る夢の中

仲裁が早めにほしい老夫婦

唐津市 井上勝視

奥様の内緒は言わぬ膝の猫

信用出来ぬ奴が詳しい法律書

規制緩和倫理だけならとうに済み

一夫一婦だから週刊誌が売れる

縦割り是我が家にもある二人居て

唐津市 田口虹汀

この歳じゃ敵も皆無と靴を履く

忠臣がそろそろ顔を出す世紀

老梅の下に笑顔のクラス会

駆け足で春は海からやって来る

春や春川柳からつも二〇〇号

検査表だけで診断する名医

唐津市 市丸晴翠

生きてるかい保険庁から問合せ

天井のしみに会いたい里帰り

それぞれに衣裳こらして木の芽出る

接近の星を夫婦も添うて見る

北九州市 梅田宣司

ウーロン茶で手拍子打って粋な奴

十年は昔ばなしにして老いぬ

言いたかったのは追伸だなどと思う

スチュアーデスの指示に素直な空の旅

息抜きはトイレ便座があつたかい

高知市 北川竹萌

飽食の世に養生の飢餓守る

実父捨てることはできぬと離婚沙汰

クラブ毎米寿引退けじめして

武さんと故里の名呼びが懐かしい

拓本にや々と家紋を見つけたす

高知県 赤川菊野

都知事選春の嵐が吹き荒れる

春一番吹いて野山が動きだし

出身は落人の里超田舎

最初から未亡人だったわけじゃない

生きるとはこんなにも多忙一人でも

高知県 小澤幸泉

ひたすらに学ぶ三年のペダルふむ(Tさん(68歳)卒業を祝う)

安らぎと活気を詰めて市場かご

AVも知らぬ夫婦となりました

よく言うわあんたも同じ齡でっせ

血糖値などと相談せずに飲み

松山市 宮尾みのり

土地柄というしあわせな顔で古い

さみしがり屋の肩へ荷物をまた預け

旅の目に不気味なほどの無人駅

この人も道は半ばの物故録

書いてない思い余白に透けてくる

松山市 丹下美津子

春はそこ母は嬉しい移植ごて

髪染めてなにをそわそわしてる妻

婿と酌む一皿そえるゆずなます

気がつく息子も頭薄くなる

いい人でよかった示談軽くすみ

今治市 野村京子

鏡から魔女が時々抜けて行く

薦のはう窓がこだわり持っている

牛の目は別れの時を知っている

雑兵はいつも流れ矢に当たる

神さまの森が違って行く不安

今治市 矢野佳雲

一箱の雑魚は自分の値を知らぬ

ネジ緩めきつたらあくびばかりする

許し合う仲悪友と妻は呼ぶ

小の虫殺す話はすぐきまり

とって食いそうなオコゼが食われたり

香川県 神保坊太郎

孫味方にするにはやはり金が必要

合掌がほぐれて何を掴む手ぞ

マアイツカいかとかからない歯どめ

瓢箪から駒が出てきた縁結び

子育てをすまして妻が鳥になる

香川県 木村あきら

トンネルを抜けると碧い空がある

領空の侵犯もあり鯉のぼり

極楽の浄土を目指す遍路杖

進学の孫就職のキツイ坂

転作の田圃へ花の種を播く

香川県 成重放任

習い事暮しの中で身につける

良縁を早く呼んでよ出雲さん

手づくりのケーキで愛を誓い合い

心まで洗ってくれる旅の風呂

日本語か流行ことばにダッチューノ

香川県 工藤 吟笑

カップヌードルご先祖様は味知らぬ
飽食の口 山菜の味を賞め

かろうじて盗泉の味知らず済み

情報になおプラスして村雀

樹を伐って地球の水も涸れてゆく

香川県 山地 マツエ

ことわれぬ話は善処で逃げておく

言い負けて姑が仏間にまたこもる

冷やかしがマジになつてゐる植木市

桐の木を植えて初孫待っている

微笑する地蔵に野心くずれ出す

香川県 川崎 ひかり

遺す物ないから私の一句など

悟られてならぬ言葉を選んでる

急ぐのにまたド忘れが見つからぬ

雑草だつてやつときた春生きている

スポットが当たってほしい緑の下

下関市 石川 侃流洞

君が代 日の丸 日本を愛していてもめる

空くじなしの期待ヘティッシュ多すぎる

二〇〇〇年コンピュータが咬みつくぞ

おじいちゃんと他人に呼ばれ気にさわり

旗日に日の丸たまに出すから雨になる

宇部市 平田 実男

摺む藁さえも見つからない不況

お袋の味が切れない子に育て

僕は糸電話孫等はコードレス

餌をやる時だけ尻尾振つてくれ

宮司の子が滑り道真苦笑い

美祿市 安平次 弘道

無礼とは思ふがここは目をつむり

無位無冠年金だけが頼りです

毎日が休み本屋にでも行くか

腹芸のさすが年期が物を言い

天敵には天敵ドラマ面白い

柳井市 弘津 柳慶

おじいちゃんどうして名前二つある

風呂敷のよさを忘れて紙袋

電話中風呂の水を思い出し

賛成の拍手で会議締めくくり

国なまり心なごんで里の川

竹原市 小島 蘭幸

一冊の句集と旅に出る春よ

春が来ている鮫鱈の白い腹

カニツアアの最後はみんなカニを買う

いくら積んでも雑誌は塔になりません

和尚さんの書はだんだんと好きになる

竹原市 森井菁居

たまごつち日本人は飽き易し

理論武装を僕のフアツションにしとく

冬眠は終つたしやんとネジを巻く

欲捨てて生きると四季が素晴らしい

ポケモンのシャツを着込んで孫が来る

竹原市 三宅不朽

地下からも人溢れるもあふるるも

紫の花じゃがいもの身嗜み

花祭り唯我独尊濡れそぼつ

春愁の猫と向き合う落花生

招かれて迂闊は言えぬ元大工

竹原市 時広一路

ハイハイと前の患者と同じだな

不満無くなれば明日がつまるまい

近道を知らないままの靴である

友は今何してるだろ今日の雨

僕の目が可笑しいのかな黒に見え

竹原市 古谷節夫

陽が昇るラストシーンが描きたい

地に還るまではプライド持つ木の葉

勲章は妻に捧げるだけで足り

伝統も川の流れに負けそう

純白の色が出せずにとし重ね

呉市 榎田英詩

思い出は沖の白帆と遠ざかる

霞む目に女神と想うポランティア

湯呑二個夫婦つきりの夕の膳

チャップリンの靴はLサイズかな

風に向け畳むほかなしアンブレラ

広島県 藤解静風

国旗出す家が一軒また減つた

たつた百年ずれたらキミと会えなんだ

にんげんも竹も節目で伸びてゆく

背凭れのように目立たぬのが男

父の眼差し幼い僕のモノクロに

岡山市 井上柳五郎

今年への抱負へ傘寿苦笑い

神頼み控え目願う鈴を振り

容態に飲酒の可否も老父聞き

保険満期確定申告税加算

めでたさも孫が嫁いでさびしさも

倉敷市 小野克枝

爛漫の桜の下で和解する

象の目をした友達を信じよう

箱庭に善という名の樹を植える

現実を皿に盛りつけ老い二人

球根が笑う答が出たらしい

今日からはナースにまかす娘の病
岡山県 富坂志重

私の前ばかり走り去る月日
草餅二ツで私の内証きく地蔵
愛の二重帳簿が今も見抜けない
路のとう早春にあいたい人がいる

岡山県 福原辰江

裏口を知らぬ器でくらししてる
洗っても落ちない汚れつきまとい
流されるままに迷路を抜けてきた
大空と鳥とハミングする風車
待ちぼうけの私にほほえむ花時計

岡山県 山本玉恵

逃げ足の早さに夢は追いつけぬ
傘の雫切れても切れぬ物思い
さそいにはなかなか乗らぬかたつむり
肩書きを外してからの酔い心地
さよならを背で聞き流す負けいくさ

岡山県 矢内寿恵子

平成の風になじまぬ土ふまず
わくら葉の芽吹く未来を唯信じ
主題なきドラマ演じて明け昏れる
豆のつる約束事のある限り
答えてはくれぬ墓石を撫でてみる

岡山県 福原悦子

亡母の忌に灯明囲み顔がゆれ
跳ぶ日待つ雛にもあった羽づくろい
落成を祝う夫婦の汗のあと
人間で多情多恨をしています
新しい文化に思案する余生

岡山県 大石あすなろ

シナリオが途中で変る舞台裏
少年がキラキラ光る始発駅
翔んでいる子等に届かぬ母の鈴
エイエイオー雑魚が流れを変えました
終電車少し汚れた顔が乗る

岡山県 江口有一朗

誕生日よくぞ生きたり八十二
平坦と見える道にも吹く風
道路工事今日も茶髪の娘の警備
頭少し軽い感じと茶髪の娘
チベットの男涙は流さない

岡山県 荻野鮫虎狼

主語の無い話で妻と笑い合い
末筆で健康祈るのも他人
半分の女権を妻は大事がり
旨そうにテレビが映す食文化
テープから昔の声が戻り春

松江市 川本 畔

言いかけて止める笑われそうな夢

好きと書けず切手いっぱい貼っておく

快調な指先に春らしきもの

大根を半分切って耳すます

雪解けにまさかの秘密あらわれる

松江市 舟木 与根一

世紀末イエスとアラ―武器を執る

影法師 君もお芝居下手らしい

ドラマ競い役者出揃う都知事選

日の丸に君が代 巢立ち軋む春

悪友が一番力強い理由

松江市 浦辺 静江

雪遊び子供のよりに燥いでる

恙無くめおとで祝う五十の賀

晴間見て夕陽を拝む散歩道

親友のニツクネームが口に出ず

久しぶり晴間にゆっくり遊覧船

松江市 安食 友子

ど忘れてスターの名前出てこない

雑念を忘れたように香を聞く

テレビショッピングその気にさせている話術

核心をうまくいなしてるドンファン

雨光るひとつひとつの芽がまろい

松江市 佐野木 みえ

湯のたぎる音聞きながら独り住む

街中で逢えば息子は他人顔

あの辻を曲れば別れの刻がくる

快調な朝のリズムに春近し

傾いた廃船夕陽の色に染む

出雲市 富田 蘭水

如月に花嫁が来る里がわく

春一番ねむった胸に火をつける

ウインドがおしやれの虫を離さない

亡母の知恵よもぎの血止め生きている

薬より勝ると万歩計すすめ

出雲市 板垣 夢酔

酒が出るだから相談苦にならず

大金を積まれて城がグラリ落ち

よく喋るわりには出世せぬ男

子沢山育てて一人住む過疎地

残飯よ飢餓の怒りが聞こえぬか

出雲市 園山 多賀子

二ん月が逃げ小便小僧水温む

離壇の座位も変ってくる世相

福寿草咲いて曾孫と万歳し

露のとう女二人の鉢合わせ

意図しない年輪賞を掌に受ける

出雲市 小玉満江

曼陀羅をおがめば見える仏道
風まかせそして人間死んで行く
振興券一番先に酒を買い
マンネリになるといらいらする私
春の宴はまぐりご飯召し上がれ

出雲市 岸 桂子

豊かさを淋しく見てるゴミ袋
子に残す足跡そつと確かめる
陽が落ちる今日得たものは何だろう
人並でいけば素通りする風よ
農業のプロがだんだん減ってくる

出雲市 小白金 房子

おち椿川面静かな旅に出る
草餅の思い出探す春の土手
傷心を労る蝶々春を舞う
一人居を電話で誘う農のお茶
茜空もどる農婦の一輪車

出雲市 久谷 まこと

口開けたまま眠ってる募金箱
公約は絵に描いてある理想論
どなたでも拒みはしない自動ドア
生き甲斐にははじめた趣味に縛られる
自分史のどのページにもある未練

島根県 榎原 秀子

観劇のほどよい疲れたのしみぬ
古写真再生出来て嬉しがり
一票しかない一票をほしがられ
佗助を一枝おねだりしてしまふ
世の移りうちの屋号が通じない

島根県 伊藤 寿美

春一番吹いてわたしもするダツシユ
コントでもわたしも老夫にチョコを買う
竹人形の里で竹の数珠を買ひ
蘇峰読む亡祖父の背中を覚えてる
チョウ美味い孫のイビツな焼き餃子

島根県 松本文子

激流に飛びこむにんげん変えたくて
生きる気にさせる桜の花の下
亡母は何処に螢谷の雪も消え
寒い話ばかりみかんを剥きながら
失うものなし爪を切り爪を研ぐ

島根県 堀江 正朗

川柳も何時の日までの勝負かな
妻にだけ意地を通せる幸があり
さあ春だ睨閉ずれば花ざかり
酒うまし暮らしの苦勞妻のもの
大蛇出た川も文化の水流る

島根県 堀江芳子

春だなあ空の広さに独り言

飛んでくる噂に巻かれないうちに

春炬燵ゆとりの酒にはずむ顔

ほどばしる情熱そんな日もあつた

人生に山坂あつて生きられる

島根県 小砂白汀

石路は春を讃える金杯か

斜かいに春の日差しが伸びてくる

風光る卒寿迎えし誕生日

呆妻よ負けるな己をとり返せ

三人の子のうち一人はユダでした

島根県 西村早苗

きりきり舞いした今日はすぐに酔い

せっぱつまつて唯居眠りばかりする

とんびが空で咳しているダイオキシソ

娘になにかあつたか静かに本を読み

しきたりにがんじがらめとなる茶道

島根県 森茂美

独り言いつて出かける雪の中

雪像がくしゃみしながら溶けてゆく

冬の陽を掬う掌ガラス越し

丹頂の舞いに切ない愛が洩れ

夫婦びな無限の愛を秘めたかお

鳥取市 武田帆雀

声優のような留守電して遊ぶ

言い訳を替えた遅刻の常習者

武士の武だ竹の竹田であります

いい息子持つて立派な墓が建ち

ライトピカピカポリが張つてるありがとう

鳥取市 岸本孝子

巢立つ子がキラキラ光る風になる

器より椅子が似合いの顔にする

日本語が通じるハワイなら行ける

車座の真ん中に置く大太鼓

八等身さっぱりだめにした肥満

鳥取市 岸本宏章

貧乏をしばし忘れる春うらら

生き下手を叱ってくれる本を読む

散るときに夢を男は見続ける

しきたりに馴染めぬ犬が群を出る

売るほうの都合で決める五割引き

鳥取市 上田宣子

お布団をかぶっていたら春がきた

投函を終えた指から弾みだす

袖の奥おくへと蟻が入りこむ

わたくしに時々芽吹くフラメンコ

肌ざわりいよいよアンティークめいて

鳥取市 近藤佳子

四面楚歌言いすぎたことなかったか

出番なしせめて医者行きおしやれする

勇氣という言葉妥協におき替える

黄砂来る兄の遺骨が埋まる国

サヨナラは言わず最後の挙手の礼

鳥取市 倉益一瑤

アンコールワットああ天界の宮殿か

地雷の傷に我が無力さを嘆くのみ

一ドルに群がる子らの目が哀し

メコン河神があたえし生きる糧

飽食の我が足元を見直そう

鳥取市 両川洋々

死に装束の白は決意の色である

パンと愛どちら選ぶほう妻よ子よ

だまされぬ女になって来た顔だ

神様をなだめる銭をすこし撒く

銭がどうしたまだまだ心売りはせぬ

鳥取市 植田一京

相槌を打って味方にして貰う

嫉妬する割りには何もしてくれず

虚と実の五分五分人生こんなもの

大きな貌をする壁に絵を飾る

最高の舞台になって桜散る

鳥取市 西村黙光

あの頃の耳は大きく尖っていた

おでん屋へ日課となった逃避行

ネクタイを締めなきや行かぬ縄ノレン

不況とはとても思えぬコマーシヤル

馬耳東風倫理手玉に利を漁る

鳥取市 福田登美

菜の花に一声かけて春を生き

冬が去り心和らぐ旅の計

老いた身のもろさに触れず茶を注ぐ

定年を境に歩幅縮めてる

若者は怖さを知らぬ発条はなを持つ

鳥取市 徳田ひろこ

いい知らせが不意に訪れ楽になる

風そよぐ街に拗ね者たちの群

月刊誌ばかり積んでる無為な日々

食卓に歳時記めぐりする安堵

体温を少し残してゆく別れ

鳥取市 坂田和歌子

千羽の鶴と扇に十句棺に入れ

後れ毛のソフィアローレンまだ蒼

億の花うもれて逝くは重き罪

あつたかい歩兵が好きな城の外

思い切り欠伸をしたい披露宴

鳥取市 岩原喬水

精力剤変えても多分駄目だろう
同姓の犯人なかなかつかまらぬ
水槽に美人の人魚飼っている
今ならば主人が留守と電話来る
リストラで部長一緒に首になり

鳥取市 杉本孝男

運命の岐路は或る日にすれ違い
温情に凭れて自分見失う
転ぶ度目に見えたる処世術
さよならを言えば淋しさまた募り
煩惱の影が眼裏離れない

鳥取市 美田旋風

只酒で気焰上げてもいいのかな
老人が楽しく遊ぶ店がない
一票でうつぶん晴らす無党派層
乱雑な部屋でアイデア湧くらしい
妻離れすれば探りを入れられる

鳥取市 春木圭一郎

責任の重さ顔つきまで変える
顔のない政治それでも支持者増え
四度目も仏の顔はにこやかだ
ホテルから出れば他人の顔になる
顔見せるだけでその場が盛り上がる

米子市 澤田千春

欲望の貨車に又もやひきずられ
何思い人は渦潮のぞきこむ
再建を祈る杭打つ深く打つ
駅の椅子昨日が僕を待っていた
善人と悪人がひしめく地球

米子市 永井三津子

北風の吹雪く夜未だ亡夫を恋い
夜も眠れぬ恋など私夢かしら
逝く友と心で語る秒惜しみ
楽になつたね理性で凜と送る朝
雪しんしん寡婦の心に遠い春

米子市 青戸田鶴

早朝のおしゃべり鳥の恋だろう
花いっぱい買って私の春をよぶ
多摩陵へ玉砂利の道踏みしめる
終点まで急いで歩くことはない
生きているだけで有難いと思う

米子市 林瑞枝

ふる里は熱いなさけの湧くところ
お洒落してロマン革命したくなる
青春のスクリーン白い薔薇が笑む
マスコミに乗せられ何処までも飛天
世は移り髪を受難の此処かしこ

米子市 石垣 花子

絹糸をきしませ亡母の袖解く
母の言う通り縫うてる小町糸
浅くなつた井戸の話はもうしない
傾いたカカシに消えた神通力
ローン組み未来の夢の端を買う

米子市 茂理 高代

穏やかな流れが好きなの落椿
落椿踏んではならぬ仏道
落椿何処に流れて朽ちるやら
振り向くと悲しい話だけ残る
好かれたい気持ち色が淡い色で咲く

米子市 田 中 亜 弥

価値観の違う魚が迷いこむ
高低は問わずやさしい人が良い
少年期の港を今も捨てられぬ
赤い風車はミヨちゃんに持たせ
鉄打ちが下手でたけのこ半分

米子市 光 井 玲 子

母の日へふり積もるもの溢れでる
いい種を蒔いて欲しいと亡母の声
古里のみどりに逢うて鬱が逃げ
細胞が減り絆も細くなつてゆく
善人の椅子北窓を離れない

米子市 木村 春枝

行楽のたのしき描く春の画布
明日を読む本を一冊また増やし
やり直し白紙でなどとうそっばい
ひらひらと値札が回る試着室
単身に一つ憶えの台所

米子市 木村 富美子

大切な蕾で風に気を遣う
蕾とはしっかり語る明日のこと
君らしく咲くと信じている蕾
蕾とは一日何度でも笑う
ろう梅の蕾にとける雪の音

米子市 鷺 見 正 子

夫婦ぜんざい何も言えない塩加減
中折れの帽子で亡父の声がする
お子様ランチ季節を知らぬ子が育つ
乱はもう始まっている浮動票
いつだって春さ財布は膨れている

米子市 野 坂 な み

四十七士の役者はいつの世ももてる
鳥取砂丘歩いたことはありません
春の駅で一人の汽車に乗り換えた
砂嵐わたしの道を消している
脳死判定 役立つものはご自由に

倉吉市 山中康子

春蘭のおどけた顔にほだされる

詩に惚れあなたに惚れてひた走る

マイペース無駄なあがきに目もくれぬ

羨望が嫉妬にかわる紙一重

耳寄りな話に乗った玉手箱

倉吉市 淡路 ゆり子

百歳を目指す生活の花作り

老母の小言も達者な証聞いてやる

体内のエキスを絞り合格す

遠い日の小さな雛へ陽を当てる

白酒や独りになった雛まつり

倉吉市 野口 節子

ひたむきな愛が押させる車椅子

お色気はまだまだ確か落ち椿

何様のつもりか顎でこき使う

じいちゃんそわそわ孫の誕生日

とって置ききのワイン抜かせる春の風

倉吉市 最上和枝

乳房に固まり有りと言うカルテ

好調が続けば神を忘れさり

春風が冬眠中の僕を呼ぶ

まだ翔べる古希へ広がる水たまり

街に出てあれこれ化ける振興券

倉吉市 米田 幸子

浦島のその後を孫がききたがる

軍神になりそなたおじいさん

何の彼のいっても妻は味方する

荒稼ぎした感触を忘れない

八分咲きですとばあちゃん豪語する

倉吉市 松本 よしえ

燻っているからきつと燃え上がる

いろりの火足して民話を語りつぐ

よその子を叱る勇気が出て来ない

卒業をしたらこの家出ると言う

お多福を見付けた息子褒めてやる

倉吉市 山本 玲子

山野草植えたり枯らしたりドラマ

グランドゴルフああだこうだと外野席

上の脛と下の脛がわるだくみ

辻褄を合わす苦労に懲りた嘘

張りつめた空気ゆるがすハックシオン

鳥取県 土橋 螢

大往生できるお寺の門くぐる

春宵へ老いの匂いを消して出る

肉体も魂もまた待ちぼうけ

涙に脆い大和魂持ち腐れ

太陽は神さま風は東から

鳥取県 山本 正光

七人の敵に身内が見え隠れ
何も無い時に珍客ひよいと来る
丁重に返事されては手が出ない
誰よりも好きだったのは地下のひと
見栄張った寄附もお隣さんに負け

鳥取県 上田 俊路

うぬばれが不似合いの鼻高くする
兎小屋でも一坪の花が咲く
湯豆腐の湯気にかくしていた野心
記念日にまた感動が甦る
留年の予算は組んでいなかった

鳥取県 田村 きみ子

美学とは何ぞやさんま嘲笑う
花ことばに耳かたむけたかすみ草
日曜大工するとイキイキする息子
冬編んだかごで苮を取りに行く
春うらら翼を少し広げよう

鳥取県 岩崎 みさ江

苦虫の顔など見えぬ花の下
音に聞く吉野で人を見て帰る
エプロンの下にある手が荒れている
春だからわたしに許す朝寝坊
萼から零れて亡母は夢の中

鳥取県 塔 寛子

半世紀の空間埋めるジゲ言葉（在インドネシアの兄77歳を
姉82歳と訪れた73歳 5句）
止まっているかと思う常夏の刻
バラバラに裂けた葉陰にバナナ熟れ
四季なくて散りどきなくて常夏の花
犬つなぐ法則もなし飼手なし

鳥取県 幸家 單車

順序良く並ぶ笑顔の地藏様
念仏のリズムで仏慰める
順番を遠え末の子嫁に行き
リズム合う同士で踊る銭太鼓
失恋の味噛みしめる蔭のとう

鳥取県 権代 康女

幾つもの夢がふくらむ春日和
厚着などさせぬ母さんまだ若い
お喋りが好きで老いても惚けはせぬ
恋文を本に隠して気のまよい
孫囲む時は無邪気な顔になり

鳥取県 西川 和子

練ってねって少し固まりかけて来た
懐の奥に昔を畳み込む
人事のようにうわさの中にいる
ゆるやかに天に向かって行く煙
青い空蟻が一匹はっている

鳥取県 羽津川 公乃

バラ三本雪の加害は目に余る
ゴミ袋一番に出す変な癖
衣も食も予算無視する伸び盛り
記念日の植樹で庭が狭くなる
月末は集金塔誌回覧板

鳥取県 石尾 かつ乃

新芽吹く未来へ風の思いやり
ハードルを越えた証の力瘤
返信の便りは温いお人柄
少年の夢は拳の中で燃える
弥陀の掌の情けに縋る夢遙か

鳥取県 吉田 孔美子

春風に水の美術館がひらく
宍道湖が主役のような美術館
温泉と地酒に時も寝てしまふ
悪相と組んでわたしを光らせる
母逝って東は遠くとおくなる

鳥取県 国森 武子

誰だって待たれて此の世に生まれ出た
いつまでも卒業できぬわがまま病
嫁ぐ娘をもってる頃が花でした
わが嫁ぎテレビじつくり見ることに
稼げない年 価値観をかえました

鳥取県 西原 艶子

楽しみは回転寿司へ子と座る
雪の日もフル回転の洗濯機
もう少し賢しくなろうスクラップ
転んでも起きる力は生まれつき
追い越せぬ師が目の前におわします

鳥取県 黒田 くに子

子宝が釦の役目してくれる
かけちがいの釦夫婦に水がもれ
しきたりの柵をゆるめてする同居
口紅つけ少女脱皮をするかまえ
せせらぎの音も猷立山の宿

鳥取県 奥谷 彩子

明日の夢はんなりと溶く絵具皿
翔びたくてプランコを漕ぎ夜に溶ける
徳を積み輪廻にかける夢紡ぐ
悲しみを引きずる影は切り捨てる
娘と街に少し派手目な春を着る

鳥取県 津村 八重子

愛児のよう並んだ鉢に水をやる
初鳴きのウグイス一寸音痴かなあ
一直線のコースに生きたこの八十路
いい友の軽いジョークがあたたかい
枕辺にいつも忘れぬ大字典

鳥取県 村上 信子

妻がいて変人うまく世を渡る
子の自慢したくて少し喋りすぎ
こげくさい臭いに喋る声が消え
咲く花の色想像し水をやる
裸一貫出直す力貯めている

鳥取県 乾 隆風

ため息をついて二足のわらじはく
イロハニホ散りぬる桜待つたなし
杖ついてもう采配はふられない
愚痴こぼすまい春だから春だから
藤棚を仰のいてみる平等院

鳥取県 谷口 次男

神よ神お金と知恵のお恵みを
バイアグラピル解放とパチ当たり
わたくしの脳でよければ進呈す
預金利子拡大鏡でやっと思え
人類がいよいよよそへ移住する

鳥取県 乾 喜与志

裏窓で隣家と仲の好いはなし
健康な臓器だけど杖が要る
ご法話に鱗一枚ずつ剥がれ
白寿まで足跡ゆるやかに残す
次世紀の夢を小さく重く抱く

鳥取県 橋本 多哥由

平凡に暮らし楽しい影法師
原点に返り勇気を出してみる
肉だけを食べたられば気が重い
甲斐性のない身で日本旅に出る
カレンダーめくり明日を考える

鳥取県 さえき やえ

三月朔日 律義なヒバリ鳴きにくる
れんぎょうが咲いて鬼門が美しい
人情も味もまろやかそその汁(そそ＝海草)
君が代にまた忠誠を誓わせる
ネクタイはきりつとむすべ孫たちよ

鳥取県 土橋 睦子

甘え癖つけた蕾は何時開く
愛無限 母の涙に立ち尽す
寿と書いて卒寿の母祝う
のんびりとしよう白髪が増えるから
残り火に甘い誤算がつきまとう

鳥取県 土橋 はるお

父さんの痾癩玉も春うらら
トロッコに乗りうらかな旅をする
孫産んだ嫁の合格祝いする
花の名を知らない人に褒められる
俺よりもボロ雑巾は仕事する

鳥取県 林 露 杖

老骨の箍を緩めて温泉に浸す
返事して仲々立てぬ春炬燵
顧みて一生消極過ぎたかも
週刊誌 新子の句評冴え渡り
焼石に水だね地域振興券

鳥取県 太田 幸 枝

天と地のリズム狂わす温暖化
よく稼ぎよく笑う嫁よく食べる
せびられた貧しい頃が花だった
人生の卒業式はしっぽりと
草木の中で老後の趣味に生き

神戸市 中 村 ゆきをを

御名御璽 昭和絵巻も遠ざかり
海兵も陸士も今は金信じ
一瓶の酒の底なる句を探し
三月十日いまの男は優しけれ
オカリナや記憶の装の丘越えて

神戸市 山 口 美 穂

春風に押されて足どり軽うなり
人工レンズで世の中明るうなつて春(眼の手術)
青春の主張を茶髪やピアスして
老人力と老人力の果たし合い
春が来たのでみどりの財布買いました

神戸市 池 田 善 守

最後までそうあの人で話済み
日の当るガラス越し幸せ一人占め
寒風も窓開け放ちする掃除
現実にかなわぬことは夢に待つ
マネキンに着せればすぐに買うお客

芦屋市 黒 田 能 子

財布には相談しない無駄遣い
生きていたただそれだけのあの朝は
燃えつきた一日夕日赤あかと
突然の訃報電話は無口なり
逝き急ぐあなたの桜咲かぬまま

尼崎市 春 城 武庫坊

二人して祖母が遺愛の雛仕舞う
地久節 陸軍記念日皆死語に
国産のかぼちゃ探しに妻と出る
信楽のぐい飲み持つと指笑う
酒が好き大福も好き生きている

尼崎市 春 城 年 代

ともに学んだ歳月のいま重し(ローズ川柳金)
おそれるに足らぬ傘寿と思わねば
老夫婦「二十世紀」を立ち読みする
セットした髪逆立てた春一番
言いたいことを忘れ易くて救われる

尼崎市 長浜澄子

いいことの子感を春と言うだけで

分別の後 寡黙な亡夫が居る

記憶からすんなり消そうへッドホン

今にして思えば母は白い飯

忠告に濃い口薄味あり可笑し

伊丹市 山崎君子

花の名の和菓子ずらりと春を呼ぶ

陽のめぐみ宝のようなトマトなり

医者がえり道草気分よもぎ摘む

雨あがり昔と同じ萌える里

二浪という髭をおとした甥の顔

伊丹市 小熊江美

兄弟げんか両方立てて母裁く

観梅の席ふくよかな香にむせる

樂觀的なのか夫は解雇を気にしない

交通事故双方ゆずらず謝らず

老人力希望を捨てず夢捨てず

西宮市 山本義子

女七十きれいに生きる服を選ぶ

騙されて憎めぬ山の天気なり

黙殺にこれ幸いとわたしの日

雑木林一番さきに春のいろ

しんがりを歩くと倍の疲れあり

西宮市 門谷たず子

老いてなお響かせ合っている命

眠れぬ夜はすこしの狂気もてあそぶ

生き下手になってブレーキばかり踏む

無為無策庭のタヌキに雨が降る

野は暮色風の暦をめぐりつつ

西宮市 緒方美津子

蝶々は蕾の固さ見分けてる

母逝きて音をたてたる落ち椿

遺言に根雪も徐々にとけはじめ

こま草を下界に咲かす写真展

ダイオキシンの落葉焚きまで許さない

西宮市 奥田みつ子

前に行く友の背中がまぶしくて

夕陽までもいま悔恨の目を伏せる

知識欲知らぬが花ということも

花丸が頂けますか閻魔様

欠点も長所もさらし句集閉す

西宮市 西口いわゑ

子育てへれんげたんぼば萌えていた

書き順が少々違う孫と祖母

春雨へ夫婦それぞれ濡れてくる

沈黙の時も刻んで夫婦なり

毒くすり 酒は論議の外である

西宮市 亀岡哲子

たまに乗る通勤列車背を伸ばし
目覚めれば富士は雪なり光なり

富士山を見に来て富士に逢える幸
始まりは寂しがりやの彼のTEL

七年待った角膜ですと言う笑顔

西宮市 井上松煙

寒風に小犬とミニのお嬢さん

パーティーの主賓帰って酒追加

口下手の誠意がこもるプレゼント

携帯で居場所刻々監視され

ひと声をやさしく聞いて気が晴れる

西宮市 牧 淵 富喜子

よく読めばがんじがらめになるばかり

啓蟄や夫も地図を展げたり

望郷の叔母が電話をかけてくる

荒ぶる神の海からとどく春一番

川えびの一尾のいのちはねて昏れ

西宮市 菊 池 トミエ

絵手紙を書いて楽しい便り来る

嬉しい日オーパーに書く日記帳

月寒く早寝の訳を独り言

着ぶくれて母はくず湯を飲んでる

雛祭りせまい座敷が騒がしい

西宮市 刈田泰司

トップへの声を遮る太鼓持ち
悪友の呼び出しを待つ一人酒

ネクタイは妻の好みとさりげない
デパートで正装揃えた事もある

ひとり舞台わたしの全部さらけだす

宝塚市 嵯峨根 保子

試別火紙衣へ月も細るなり

三寒四温きのうと違うごあいさつ

いかなごの新子にむごい雛の月

はつ恋の人が品よく老けている

夕あかね命あずけてみたくなる

宝塚市 吉田笑女

起きぬけに走る選挙の宣伝カー

投票をたのまれ返事だけしとく

次男早任地へ帰る日がせまり

二週間あつと言う間に過ぎて行く

母も一人で朝夕祈る子の無事を

川西市 松本 ただし

ガッタンコよろけて停まる縄電車

人生のじゃんけんチョコキを押し通し

日本の春にワクワク来るつばめ

晩春の老後はポトリとなる滴

動いてるだけでニンベン置き忘れ

相生市 中塚礎石

剛と美の子孫を残す雄の舞い
改めて書く遺言へある命

テレビから一つ隠したプロの味
善良な男も妻にだけ威張る

有頂天花道に来てけつまずく

大阪市 西出楓楽

春愁へわさびちつとも効いてこぬ

ちよつと気取つてワインで食べる松花堂

身のうちの種がちつとも発芽せぬ

ひたすらに褒めてピンチを切り抜ける

捨て切れぬ過去でまだらなセピア色

大阪市 大塚節子

七賢人不況によい知恵おまへんか

三度目のバーゲンあの服まだあかん

お互いにえろう老けたな通夜の席

電話ベル テレビドラマにだまされて

或る夫婦薬の数は妻が上

大阪市 津村志華子

短気な父を母はいつでもなだめ役

忌は巡るやさしい母の風に逢う

嫁がせて私ひとりの雛まつり

上流も庶民も同じ陽の恵み

物忘れしても三食忘れない

大阪市 神夏磯典子

当り前のように陽は落ち陽は昇る
手応えが欲しくて山へノックする

台所光らせ留守は店屋もん

タカの爪たつぷり入れて仕返しす

孫でさえ敬遠をする風邪恐し

大阪市 川久保睦子

亡母の句に栞をはさむ老いた父

無位無趣味父には母の車椅子

大ジョッキ本音が泡になって消え

前略亡夫よ水金地火木見ましたか

マイペースで走る男は転ばない

大阪市 川端一步

いい汗を流せば風の爽やかさ

豊かさの中で言葉が枯れてゆく

散歩する夫婦ひとりには痴呆症

背を低くすれば楽しい二度の職

鉄道マンいまは点呼を受けてます

大阪市 榎本落児

赤鉛筆片手に今日はシャキッとす

旅途中「うさぎ」と名付く酒場あり

雪の中桃の出荷が慌ただし

ふるさとの柿の葉ずしの味のよさ

夕飯を相談してる夫婦なり

大阪市 板東倫子

脳死移植いのちのリレーは神の技

やんちゃくれ わが家のだんご三兄弟

つれづれに春の卵を立てている

人生いろいろ私ただいま赤信号

七重八重奈良は情緒に浸るとこ

大阪市 辻川慶子

水温む米を研ぐ手に花だより

見合いかも知れずロビーの訪問着

まんまるい部屋でいねむりばかりする

それなりの思惑があり春の紅

うたかたのロマンよさくらちりぢりに

大阪市 井上白峰

飛ばされた位置で芽生えた草の種

陽の恵み回る地球に雪月花

均等化されて個性が伸び悩む

夢に見た理想いまだに夢のまま

家計簿を宥めすかして旅支度

大阪市 本間満津子

おかしなことがおかしなことでない怖さ

カタカナで解らん怖いとこらしい

頷いて聴いたが何も出来ないで

贅沢をせよと地域振興券

嗽して植木水遣り思い立ち

大阪市 小林周信

春の野に孫の目線へしやがみ込む

むくつけき男にもある春のうつ

頭取の披露パーティー止めにする

ブライドも入れて女の化粧箱

いそいと妻が一人で行くパーティー

大阪市 渡部さと美

桜前線ひと月かけて染める旅

太い声自信がついて来たらしい

使い方識らないお金貯めてはる

虫這うてつばめが飛んで春うごく

友と来てコーヒー夫と出てビール

大阪市 杉澤汀

宵はよし暁もよし春のころ

抱いた孫も高いほう指す武者飾り

菖蒲湯に平成の童の弾む肌

杉花粉お前も雌花恋しいか

労働歌とぎれとぎれの昼下がり

大阪市 河井庸佑

理論より情理尽くして説き聞かす

厄介なこと背負い込むお人好し

災いは目先の欲と自省する

新茶入れ今年の味へ舌鼓

連休の後に楽しい旅プラン

片想い朝の七時の三輛目

大阪市 清水絹子

一段ごと仏の加護の立木山(約六百七十の石段)

散歩道ももうすぐ彼岸よもぎの芽

雨つづき家事はお預け新刊書

青い空さながら絵画 朱雀門

大阪市 町田達子

お雛さま次のお越しは新世紀

青春にピリオドやっとお腰をあげた孫

涅槃像に逢いたい花の頃壺坂を

アンテナが伸びるあちこち春の景

花の道で仲よしだった亡姉おもう

大阪市 宮本欣史子

夫から名前呼ばれた事がない

どうせなら明るい方を見て生きる

錆ついた高いブライドだけ残る

両天秤 世間体など気にしない

計略に嵌った友の幸せ度

大阪市 鈴木トヨ子

老父母に心残して踏む任地

団子鼻チャームポイント母ゆずり

人生ツアー エンストばかりおこすなり

惚れこんだ人柄文字ににじみ出る

政治不信川の流れば美しい

絵ろうそく遠い記憶の中に居る

友去んで夜の静寂を持って余す

行灯に川柳点し愉快かな

忘却の砂丘に影がついてくる

花だより心動いて旅に出る

大阪市 玉置英子

雛の日は蕾であった桃の花

花便り長い返事を孫に書く

先立たれ生きられないと十三年

失敗を知らないふりでいてくれる

丸木舟昔むかしも熱い恋

大阪市 津守柳伸

ダイオキシン開発熱へ水を差す

プラスマイナス鳴り物入りの振興券

効能書確かめ合うてお湯めぐり

お日柄もよく菜の花のお吸物

郷愁はイカソーメンに明太子

大阪市 松尾柳右子

学校のテストまだ夢に出る

机までゆすらないでよ消しゴムさん

貯金なしでもテレビ見て笑ってる

道化にも知的にもなるめがねかけ

留守の孫テレビ見ると電話切り

大阪府 小糸昭子
白菜をざっくり割ってストレス飛ば
友が来て輪廻転生説いてくれ

春風に乗って異国へ来た黄砂
耳よりな話に乗った早合点
いかめしい医者で血圧下がらない

大阪府 清水利武

五月晴れ子供喜ぶ潮干狩

鯉の背に乗りたや青空スイスイと

不景気でメーデー何故か拍子抜け

幸福は夫婦健康八十祝う

殺人鬼増えているのに軽い刑

大阪府 川原章久

まんさくの源聖寺坂試歩の杖

ヤキモチが溜まると焦げる鍋の底

短冊なししのさび抜き通り抜け

幸福になれよと孫に銀の匙

人生の底大勢のホームレス

大阪府 川内叭笑

夢じやない臓器移植で二百歳

移植後も宿借りながら生き続け

雨のたび薄着へ誘う春の風

馴れ初めは心こもった花言葉

高らかに理想の五輪大阪へ

胸奥に蕾を宿し閻伽の水

揚雲雀歌に酔うては巢を忘れ

揚雲雀雛を思うて舞い降りる

残高を確かめ何もはじまらず

席空けて遅れる人を待っている

堺市 志田千代

お札よりカードの重い財布持ち

イヤと言えばイヤと受けとる男なり

気がねなくヌードの本も買ってくる

泣きボクロ男心がゆれまする

男先生 女先生恋してる

堺市 宮本かりん

さくら草伸びきれぬまま花をつけ

ゆっくりとしても早い一日だ

なるようになるさとのんき者夫婦

妄想を払って米を研いでいる

広告とわたしを乗せて路線バス

堺市 黒田真砂

風の日の風に押されて沈丁花

心の中風と話して受診の日

つきる事ない母からの花便り

癌告知案外冷静落椿

好きになり持てあましてる心うち

高石市 浅野房子
中流の顔でハワイへ行つてくる
クラス会時効話に花が咲く

子には子の親には親のおつきあい
菜種梅雨逢いたい人は皆あの世
くじ買うか馬券にするか検討中

和泉市 西岡洛醉

七十年よくぞ此処まで日向ぼこ
酔い少し満足感に五体満つ
さよならの指先温い陽がさして
宝くじ当れば半分なんて嘘
一年に一度リングの便り来る

泉佐野市 山本蛙城

留守番と言えば訪販二の句なく
日の丸に教育現場血の匂い
通販にネクタイ、バーゲンされたとて
都知事選金太郎餽思い出す
首縮め公的資金受ける亀

岸和田市 田中文時

まなうらに母賃縫いの座り胼胝
超不況さえ何のその家が建ち
爺ちゃんが年甲斐もなく梯子酒
主婦の座はあれど亭主の居場所なし
古希過ぎて未だ勤めててキリギリス

岸和田市 原苑子
譲り合う慣習知らぬ自動ドア
あこがれの道にしばらく待っている
お肉好き父さん喜ぶ野菜高
おばちゃん的笑顔で保っている八百屋
面影が母似て苦勞まで同じ

岸和田市 原 さよ子

思う事同じと愚痴を笑い合い
出不精へ追い打ちかける朝の雨
真ん中を避ける私の座り癖
ブランドをあさる気ままな女旅
満点の眺め梅林咲き揃う

岸和田市 寺田甚一

ひな祭りに生れた妻は果報者
家事分担して濡れ落葉にはならず
かやく飯あと一口がほしくなり
なしくずし既成事実ができてくる
ダイオキシンの地球の涙かも知れぬ

岸和田市 岩佐ダン吉

核の橋渡つてあれからのヒト科
新緑にむせる私は生きている
星条旗力余っているらしい
いからせた肩にさみしくなってくる
通勤車私がワッと叫びそう

岸和田市 高須賀 金 太
春の陽よがっかりなんかしてられぬ
腕のいい職人さんがよく喋り
年金へまだ宅り取る介護法

知らん間に妻に調教されていた
やさしさの行き着く果てに妻がいる

岸和田市 古野 ひで

終焉の心構えがまだ出来ず

雛の日にいろあざやかなちらしげし
疲れたと今日も日記に書きとめる

仲よしがりひとりふたりとへる八十路
亡き夫の心の広さなつかしみ

岸和田市 井 齋 一 齋

転んでも起きる勇気の無い景気

煤煙と花粉で泣かす鯉のぼり

医学書の通りで熱が下がらない

台本の違う所で金儲け

大物になるのか此の子高軒

岸和田市 藪 野 けい子

老木に白梅ちらり咲かせてる

欲満たす刺繡の布とレース編み

白い手に茶のマニキュアが映えている

新年会ワイン一杯で頬を染め

腕前はまぐろの皮を残すだけ

具塚市 池 田 寿美子
生と死の狭間に生きるドナーカード
出合い旅かくれた過去がなつかしい
雛の瞳輝かせたい二十一世紀

生かされて亀のリズムに春うらら
日日の風二つの顔が物を言う

八尾市 内 海 幸 生

どちらにも理がありマスク外せない
死ぬものか極楽ありと分かるまで
寒中に桜の旅の案内書

平日と旅に出る日の値の違い
あっちへ揺れこっちへ靡く本を読む

八尾市 吉 村 一 風

出目金が私と猫を見比べる

かたくなに生きぐつすりとはば枕

カラオケの音痴活き活き歌ってる

未来図を描こう描こうとまだかけぬ
ジパンで老妻若いとこを見せ

八尾市 高 橋 夕 花

風みどりオレンジいろのくちびるに

籠の鳥それはそれなり幸せだ

一病の夫婦が歩く桜満開

またおはぎ買うたらしい血糖値

生かされて五月の風をもろに受け

一病に一喜一憂五月間

八尾市 高杉 千歩

乗客ふたり大和路の塔のどか

喋らない夫と過ごすまる二日

黄金週間一日おきにスケジュール

振興券慌てて使うこともない

八尾市 宮崎 シマ子

明日も通るだろう双子の乳母車

絶好のコンビ夫と私です

親友は好き奥さんもっと好き

夫は風邪 妻友達とこうとんスキ

碁敵はもう分身のようなもの

八尾市 村上 剛 治

金と酒人を苦しめ楽しませ

大葛籠背負い身動きとれぬ欲

新調のスーツまぶしい息子の門出

がんばれとは言わずひたすら聴いてやる

不自由は不幸ではない寒牡丹

八尾市 村上 ミツ子

一面の菜の花春をひとりじめ

理屈など知らぬ心経ありがたし

まんまるの月を電線真つ二つ

夕べまだ咲いてなかったのに桜

白い杖枝引き寄せてみる桜

万物が夏の装いして五月

八尾市 大内 朝子

お茶好きがダイオキシンをふと思う

原色がタンス翺びだす更衣

草笛にむかし恋しいひとがいる

路地ぬける風もみどりに三輪車

八尾市 生 嶋 ますみ

膝小僧わたし支えていとおしい

父ゆずりの眉描き足して鏡見る

耐える事老いを背負って多くなり

ねむってる孫の鼓動が移りくる

馬よなぜ夢中になって走るのか

八尾市 神 原 まさと

戦前も今も変らぬ玉子好き

花嫁の顔は墓から見たくない

パパ夜勤 子供と食べる残りもの

小さな土地一つで迷う遺言書

根性の無い子育てた羽根布団

松原市 玉 置 重 人

聞き耳を立てているのは淋しがり

キュッキュッキュッ春の音するべピー靴

ターミナルみな票に見え選挙戦

金婚の記念ピンクの対茶碗

入れ歯とも知らずにガムをくれる孫

松原市 小池 しげお

根負けをしたのかお月様が出る
お雛さまおとなにならぬ方がよい
大根の値に親しさが消えてゆく
真つ先に春が来ている大鳥居
ではございませんが養子です

羽曳野市 福田 満州

筍飯ほほえむ顔が見えるよう
ひと言を曲げて取られたとは知らず
休憩の駅で初心を取り戻そ
しんどさもしつかり生きている証
張り替える前に障子の破りっこ

羽曳野市 吉川 寿美

わたしでもお役に立てるアイバンク
老いてゆく母がとつても哀しいな
生きている証にまたも躓いて
昨日より広くて跳べぬ水溜り
飯の世の移ろいやすし冬いちご

羽曳野市 徳山 みつこ

だんごやの暖簾に吹いた春一番
ガイドラインへ身をふるわせる兵の墓
山かげに古いパソコン オートバイ
草ひきの仕上げに箒目わすれない
あれこれと欲張っていて元氣です

羽曳野市 三好 専平

試し切りされないうちに逃げてくる
終盤になるとついつい出る弱気
じつとしておられないのが焼け跡派
ゴキブリと言われ重宝されている
どっこいしょと登った道がまだ続き

藤井寺市 高田 美代子

拝啓と書いて三日も置いてある
御破算に出来ぬきのうが重すぎる
昏れかかる今日へ未練がまだ少し
近づけばさほどでもない花の彩
記録的な暑さにはだけはならぬよう

藤井寺市 鴨谷 瑠美子

咲く前に春一番は避けられず
全力で泳ぐことなし池の鯉
服脱いできつちり畳む羞恥心
愛だろう呪文ですべて聞きわけ
黄から赤静止画となる夜の街

藤井寺市 楠 昭子

ひたむきな情熱他人不思議がり
思いやり支え合ってる過疎の屋根
情報の波に溺れているわたし
立ち直る兆しだそつと見守ろう
限界と思う私も祖母の道

藤井寺市 中島志洋

知り合いに有名人がいる自慢

酔うと直ぐ眠る貴方で頼りない

試験場母の祈りもついて行く

試験さえなければ学生いい身分

夜遊びの味を覚えたハイヒール

富田林市 藤田泰子

無神論の目には眩しい神の山

サリンにも杉花粉にも色が無い

世紀末夢から色が消えてゆく

芳香と意志ある如しヒヤシンス

仏壇にバレンタインのチョコレート

富田林市 片岡智恵子

自分史の半ばまぶしい行がある

孫とする内緒話は筒抜けに

ラッピングしておく悪女めくわたし

いい電話に春の一日足止め

冷凍魚脳死のことをふと想う

富田林市 松本今日子

良し悪し貴女はやっぱり親友だ

あきらめた話咲かせる春のせい

人間を恋しくさせてばたん雪

チョコレート貰わぬ孫に貰う孫

旅先も相手も決まった日々長し

河内長野市 植村喜代

赤ちゃんが子供の顔になって来た

初節句孫に会えない用が出来

百ヶ日 母の部屋には何もなく

寒いねえ外より心の寒さかも

お婿さん二人にセーターよっている

河内長野市 加島由一

駆け足で桜近付く気配する

釣れ具合にしてカモメ離れない

キオスクの訛り地酒を買わされる

春一番舟は出さない決まりなり

心ここにはない約束の午後六時

河内長野市 井上喜醉

逸話よりダンゴブームの城下町

携帯へ秘密を詰めて居る娘

悪友の電話を横で妻笑う

悲話だけが語りつがれる壇の浦

母のない民話の里の鯉のぼり

東大阪市 指宿千枝子

古いぬれば寂し嬉しの誕生日

若い空気アメリカ村に吸いに行き

大阪弁まあるくやさし好きになる

女ふたり車両の隅へ届く声

ばあさんがじいさんだった勘違い

東大阪市 森下愛論

来年に構え散る花いさぎよし

年歳々悲喜交々の盃を上げ

杯上げて杯に染めたる彩を飲む

僕の樹を揺すれば発酵酒になろう

自画自賛酒に溺れることはない

東大阪市 安永春

色っぽくお待ちしてますコマージュ

あの人の恋のサインは出たけれど

冬眠を忘れたうちの金魚たち

いたずらが過ぎるよ象の水鉄砲

春一番待ちかねている桜の芽

吹田市 古川喜美子

春風に胸豊かなる観世音

人生のこれもひととき待ちぼうけ

パーティーの真ん中へんで出る欠伸

記念切手貼ってお金の無心状

億の桁見慣れて朝のお味噌汁

吹田市 山本希久子

喜びは去り哀しみの彩ひきずりぬ

竹の子の掘られた痕に恋の穴

なたね梅雨脳死のその後気がかりな

春や春小さな城に小さな花

味方いっぱい隠しています春の海

吹田市 瀬戸まさよ

一年のバランス春はよく眠る

暖かい風ポケットにしまい込む

深くひらめ大皿薄造り

現代の心理衝くムンクの叫び

これからも平和を祈る鯉のぼり

吹田市 石原靖巳

雛祭りおしゃまな孫に乗せられる

老人力張り切ったのはおぼあちゃん

善人で用意の嘘が切り出せぬ

いのちとは凄いと五体不満足

お粗末な大臣のいる国に住む

茨木市 藤井正雄

一生を川に例えたい祝辞

つくりものかと思う樹氷の写真集

陽炎の中をよちよち孫の守り

近道は呑み屋が並ぶ裏通り

一合で愉快二合で眠る父

茨木市 堀良江

雪が降る春一色のデパートに

行方見えず黄砂包んだ都知事選

雛さまもいつか独りになりますか

母さんのしぐさで弟たしなめる

忘れられた薯思い切り芽を伸ばす

旅立ちの合図はいつも露の臺

茨木市 井上森生

自画像を置いて娘は彼の国

母いとし対話はスプーンのお粥さん

度忘れとヨイシヨが多い老いの日々

松明の焰に祈る脱不況

高槻市 川島諷云児

五十年添うた女房は日本一

安楽死するには罪が多過ぎる

伴せの真ん中辺で逝きたいな

ご愛嬌でもう済ませぬ物忘れ

胸奥に勿忘草が咲いている

高槻市 傍島克治

リストラのお陰で息子家業継ぐ

菖蒲湯の謂れを語り子と湯浴み

釘煮着く律義な友の春便り

リストラが追討ちかける五月病

合格も運がよかった所為にされ

高槻市 井上照子

明日生きる道を探して靴が減る

とも角も口に押し込む朝のパン

寝たきりは困るよ万歩計が言う

タイトルが老いのつく字の書が並ぶ

潮干狩受難の貝の砂はらう

わらびの里守って義母は独り住む
啓蟄に蛙の見ない畑掘る

パーティーは高く付くわとうれしそう

百薬の長のお陰か風邪引かず

花粉情報ありがたすぎる世の中に

枚方市 鈴木政子

人間もメダカも学校崩壊か

孫ほどに曾孫可愛くないらしい

平和ボケ総ての備え忘れてる

木蓮も芽吹いてエンジの春を待つ

ママパート パパは育児で男です

枚方市 海老池洋

中入りの幕と定年受け止める

ご両家の写真 遺伝子疑えぬ

居酒屋の隅に出城を持つ私

自問自答止みそうもない菜種梅雨

年波に減る酒の量酒の友

枚方市 寺川弘一

過去未来振りわけながら渡る橋

逆風に襟は立てずに首すくめ

恋未満終わり友達にはなれぬ

手を握る男と女違う意味

ていねいに梅干し食べる戦中派

枚方市 森 本 節 子

糊代のような余生を有効に

対岸の葦焼くけむり春を待つ

女学生黒のマニキュア塗る車中

また来ます病室を出たのが別れ(兄森川まさお逝く 2句)

棺には白百合一輪祈りこめ

守口市 結 城 君 子

指の先まで如月の冷え心地よし

病室の温さ背筋を寒くする

亡き妻と再会喜ぶ兄想う

数々の教えが遺産ありがとう

忙しさ過ぎて淋しさだけ残り

寝屋川市 森 茜

雨止んで猫が出て行くぼたん雪

蕪ごろん絵手紙元気になった姉

ママ怒るピカソの顔になつてくる

慢性と言うお友だち二つ持ち

天辺で烏睥睨しているよ

寝屋川市 平 松 かすみ

うれしいなバりにスペイン兄の旅

古本を売って手袋買いました

香焚いて少しリッチに雨の午後

後押しはきつと亡母だよ一歩二歩

健康で軽いお財布気にならず

寝屋川市 角 野 仁 清

三杯目までは機嫌のよいお酒

女性みな天女に見えた酔い心地

名前よりゲジゲジ眉を覚えられ

十円の玉子へ鶏の命がけ

虫達の残り戴く無農薬

寝屋川市 江 口 度

待っていた合格通知どさり着く

春の香をグウンと吸いこむ象の鼻

路地抜ける冷えまんなを言いかわし

菜の花が咲くと目覚める万歩計

黄信号点滅走れ走れというように

寝屋川市 富 山 ルイ子

ドナーカード署名をすまし手術台

十八の孫も関心持つ脳死

弱虫と自分を叱りながら寝る

手術前独り耐えてる夜のしじま

進む医学老人医療ありがとう

寝屋川市 堀 江 光 子

石庭の一人一人の顔になり

知ることに胸の高鳴りあった頃

今日退院号砲鳴らしたい気持

ボキヤ貧の精一ばいのプロポーズ

葉陰からこちら見詰める紅椿

しあわせだった去年だったね春帽子
寝屋川市 籠島恵子

包容力ありそうですな男傘

法要とは知らず失礼した電話

注意力散漫字足らずのわたし

さくらさくらさくらの下で探す幸

寝屋川市 柴田英壬子

沢水の出合いそろそろ鮎の候

ひとがんばりせねばならない五六月

ほろ苦き菜を和えている春の宵

海の青別れた春は戻らない

落ち込んでばかりおられぬ腫れまぶた

寝屋川市 坂上高栄

ジェラシーをきれいに包む祝賀会

面食いのオールドミスの守銭奴

試着室二度とは見たくない鏡

北鮮のミサイル不安拭えない

脇役で走っていますかたつむり

寝屋川市 太田とし子

梅咲いた今年は至極ごきげんさん

敗北に撫でたデスクに叱られる

番犬のゆったり人を食う目つき

慎重に尺取虫の大急ぎ

一日に一度はおこすハプニング

裏の裏 手品以外は見たくない
寝屋川市 酒井勇太郎

彷徨える脳死の御霊釈迦の手に

流感が一家を襲う妻避けて

不義理して余生樂しむ生き上手

車間距離上手に取って嫁姑

寝屋川市 北岡波留吉

大物を盾に避けてる風当り

山紫水明これぞ僕等の宝物

見る度に反省してる従軍記

騒音規制ないので困る妻の口

上役が扇子で招くいい話

豊中市 安藤寿美子

楽しみの一つは余生の設計図

仏さんと分け合って飲む朝のお茶

スランプのまんま一生終りそう

道路工事会う人毎にばやき合う

春や春ピンクのセーターを探す

豊中市 吉田あずき

ジョークでしょあまりにあつけない別れ(柳友田実子さんの死)

白菜を洗いやさしさとりもどす

夫の忌二月の風は今日も荒れ

ひねり方次第南京玉すだれ

帰ったら自分の顔になっている

豊中市 井上直次

手土産の菓子の来歴ひとくさり

世紀末時代の流れにはぐれそう

偏差値が奮の未来ねじ曲げる

老いゆけど時代の動きにさとい耳

パーティーで参謀票を数えてる

豊中市 湯浅馬洗

命から命へバトン臓器植え

君が代に殉じた命口嚙み(樟石川校長先生)

志を立てたら自信手に戻り

家系図に女の涙透かし見る

バイト生高をくくれぬ授業料

豊中市 滝北博史

いま一つ心弾まぬ建国日

志ん朝の芝居咄で開けた春

隣接の竹林静か梅まつり

ひなの家娘も桃もまだ奮

ほとんどが来世も女望むけど

池田市 栗田久子

問題になれば大臣試食する

祖国無きクルドの怒りこだまする

CDのおこぼれだんご弾んでる

飛んで来て止まる鳥は美しい

穂の長い麦に手招きされている

池田市 藤井計光

マッチ箱ほどの家でも夢はある

松坂とノムラが競うスポーツ紙

リストラの重圧まさに加速する

列島を網羅しつくす移植劇

情念の果て燃え尽きる寒椿

池田市 岡本吉太郎

しくじりをにっこり笑って苦勞人

凶星ですさえた返事に押し黙り

金金で情け無用の人が出来

ゴミ捨てた地球がそろそろ仕返しを

厳冬でも冷えたビールの旨い事

箕面市 椎江清芳

猫よりもましと夫の手を借りる

水中花蝶を知らないまま果てる

舌打ちが続いて闇が深くなる

握手する相手貧乏神だった

歯車が野心を抱くと軋み出す

箕面市 出口セツ子

割り切れぬ想い脳死を子と対話

軽重は無い命だと信じたい

マニユアル通りいかぬから子が面白い

愛憎も心も透ける花吹雪

マスコミが世論操作をする恐さ

大阪府 榎山隆盛

さくら咲くまでに使った振興券

さくらんぼつく頃母の忌がめぐる

地球発火星ツアーに応募する

泉州に太る水茄子ジェット音

わたくしに仕事下さい絵馬の山

大阪府 米澤俣子

妻母女その場の顔で切り抜ける

使い捨ての時代去っても増えるゴミ

見込みないと知っても母は願かける

ひたすらに走って息切れしてる貨車

歯の浮いたようなお世辞でたぶらかす

和歌山市 垂井千寿子

父の癖も真似て後継ぎらしい業

友達がストレスという置きみやげ

忘れ物探す誇りを捨てた顔

外国で日本何と良いお国

梅の下亡友の思い出葬の列

和歌山市 楠見章子

いい朝だ目玉の黄身が盛り上がる

骨董屋の眼鏡の玉がよく光る

畳みかけの夫のスボン穿いてみる

日向ぼこ亡母さんの座に來た蝶ちよう

タンポポが咲いて元気になった庭

和歌山市 青枝鉄治

肩書きの裏に潜んでいた汚職

風雪に耐えた男の太い眉

再審へ晴ればれと出すVサイン

浮世絵の前で歩幅が狂いだす

いわし焼く匂いに嘘のない暮らし

和歌山市 山田高夫

亡骸になっても太い父の骨

低金利いうほど金に縁がない

偽善者の画く絵は嘘を塗り重ね

鼻先で君が代歌う巣立ちの日

脳髓に電気が走る初心な恋

安芸の旅 和歌山市 木本朱夏

海に立つ大鳥居にも春兆す

逢曼陀羅おんなの髪で縫う梵字

琵琶の弦一本切れて有為転変

公達の影過るなり水回廊

願文に清盛公も親なれば

和歌山市 福本英子

アリの土産梅田で見つからぬ

信用を失う富山の置きぐすり

的を射る言葉短に刺してくる

白髪一本気にした頃の子育て記

腹立ちも手遅れ亡夫の日記帳

和歌山市 堀端三男

嫌なことあると出かける土いじり

セピア色の亡妻の写真が喋り出す

舶来のブランド揃え病んでいる

意気投合飯を食うのも忘れてる

般若心経 傘寿迎えてころおぼえ

和歌山市 牛尾緑良

冬眠が終ると春で眠くなる

聖書なら持っていますよ本棚に

出囃子が上手になってから出馬

帰巢性信じて灯りつけている

ヒゲ剃られながら子のこと嫁のこと

和歌山市 川上富湖

こめかみの辺りを走る活断層

運命線の所々にある地雷

セロリ噛む駆け引きなどは考えぬ

翼拾って住所不定に慣れる

また明日あれから来ない紙芝居

和歌山市 福井桂香

水仙がつんつん芽吹くやわき胸

デカンターにとろりと春を移し替え

半分は自惚れでした胡蝶蘭

雛鳥が痛いところを衝いてくる

絵本の森で遊び疲れて眠るまで

和歌山市 桜井千秀

誘導尋問わたしあつまり引っかけ

急いだら回る余裕が出て来ない

類を呼ぶおっちょこちよいで寂しが

ビリヤード球人の温みに飢えている

ああつばめ季節ばかりが先走る

和歌山市 田中みね

出るわ出るわあの人この人都知事選

三姉妹と言っても末は五十八

身勝手な話に出会う一時間

外見はいいもののん気な二重顎

暗証番号忘れ金庫を持って余す

和歌山市 玉置当代

今だんご三兄弟に世は踊る

第一步踏み出す孫の初節句

末席がわたしの好きな指定席

七転八倒 夫婦揃っていればよし

申告を済ませば空の青いこと

和歌山市 岩本美智子

医者腕の腕神と信じて手術台

俎板の鯉にはならぬ手術台

網膜に積った雪が消えてきた

はつきりと見えて嬉しい夢の中

春の掌に一輪匂う梅の花

和歌山市 木村 初子

ひっそりと歩む人生無位無冠

桃色の夢はすっかりセピア色

望まれて継いだ家系も三世代

絵画展梯子して見る車椅子

八十路きて生命線が気にかかり

和歌山市 堀 畑 靖 子

人生はなぞなぞだらけ二月尽

ええかつこしいは返上五十六

コンピュータによる判定を待っている

春一番母が骨折したという

名医とは貧乏だったのは昔

和歌山市 細 川 稚 代

新聞をうす高く積む春の風邪

隅っこ美人はっかり気にしてる

愛憎をつつむ袱紗を選っている

妄想をたくましくして真の闇

神様のいたずらならば醒めてほし

和歌山市 榎 原 公 子

春の陽に飢えが雪崩れてジュンク堂

愚かさを恥じればぼつと桃の花

黒猫のタンゴを孫よ知ってるかい

何色の花にも譬えられぬ年齢

冗談だったような私の六十年

和歌山市 山 口 三千子

息子との接点がない設計図

これからが正念場かも親として

郵便受けの子等の名前はまだ消せず

気紛れの風としぶしぶ妥協する

雑用でとびすぎ風邪でダウンする

海南市 谷 口 義 男

担がれて齢も忘れて舞い始め

知らぬ間に核弾頭が此方向く

当り前の事が嬉しい子の配慮

子に尽くし子に背かれた老いの坂

戦中派 須臾も忘れぬ父母の恩

和歌山県 中 後 清 史

今だから言える話を酌み交わす

やぶさかでないと言わない返事

真ん中を歩くと袖を引きに来る

二人三脚やっぱり妻と馬が合う

着せ掛けがうつらうつらへ柔らかい

奈良市 米 田 恭 昌

親友もライバルとなるラブレース

シエルトーの中をサロンにして平和

近くまで来た孫見に頑固者

無礼講調子にのってとばされる

臓器移植父散り散りに生きている (臓器移植)

奈良市 天正千梢

京都市 都倉求芽

美しい言葉のひとつ遍路みち

雑木ばかりの山が一番よく笑う

毛糸玉ひざに遊ばせ孫を待つ

春霞白さで違う山と空

流汗坂越えれば目ざす清滝寺

ティールーム夢ふくらますひとと居る

小さな春酒の力で盛り上げる

春うららこんなに眠い世紀末

春愁や桜咲けど鳥啼けど

おはようさんいつか消えてた白い息

生駒市 北山悟郎

京都市 山海友照

嬉しいね頬に優しく春の風

梅漬ける白い指から春になる

男には泣く場所が無い春の月

引出しに五月の風を入れてやり

決意の男真正面を向く

五月晴れ風がやさしく手を握る

手応えがあるから肝を据えている

水ぬるむやさしくなった手洗鉢

医者笑顔に病安堵する

長生きをしてから来いと言われても

生駒市 麻生アート

京都市 小西未佐子

寝ていても義理チョコ届くありがたさ

対人形みんな並べて緋毛氈

ほんに喜寿どっち向いてもお世話さま

太鼓集団ぞくぞく迫る男意気

インターネットさわらぬ神にたたりなし

人前で言えぬがそつと褒め言葉

偉いせんせがお話しになる結果論

齢だけどじれつたい恋いりません

誰も来てくれそうもない雨憎し

潮時を互いに知って音もなし

大和郡山市 坊農柳弘

京都府 稲葉冬葉

新緑を背に四万十の鮎はねる

千円の笹でえびすの知らん顔

みそ汁の香りで朝が動き出す

水温を見守られてる熱帯魚

ひな壇に座を譲られて武者人形

家族みな達者で筆不精ばかり

ふる里の母の便りの新茶着く

動けない喋れないから眼が走る

ダイオキシントばめも迷う軒の下

ライバルは女形のような手で握手

昨日他人となった男とすれ違う
富山 舟渡杏花

わたくしをおちよくりながら逝った人

古希のり越える 先ず手はじめの赤い靴

火宅の雛と向き合う 久し振り

たいがい悲劇を喜劇に特技です

富山 酒井輝

ミサイルで熱いお粥を届けたい

ジグソーが欠けて崩れるビルの窓

メダカの学級も崩れて行く小川

寝たきりになると叱る瞳が綺麗

宇宙行き切符片道でも欲しい

富山 島ひかる

春や春 鳥もわたしも恋をする

春の陽へ心がはずむペアルック

誕生日まつ 赤な服が届けられ

幸せに浸る深層水の青

山菜の宝庫へブルの音がひびく

富山 増田紗弓

要職を解かれて冬がすり抜ける

まだ蓄などとライバル油断させ

髪切っておんな無言の非難かも

壁の笠まだまだ語る一周忌

春の山わたしを誘う風らしい

目移りし決めかねているツアー旅
可児市 板山まみ子

メモのぞき父が作ったオムライス

他人事のような話の大手術

回復へジョーク飛んでる四人部屋

カラオケへおだてに乗って持つマイク

犬山市 早川盛夫

足音はかなり怒っているらしい

割り勘でいつも得する呑みっ振り

幸先のいい百円玉を拾う

扱無い用事とはパチンコ屋

梅の木に梅の花しか咲かぬなり

静岡市 安本晃授

遮断機が上がって明日の道が開く

平凡な暮らしにもあるでかい夢

毎日を本音で暮らす阿呆のもの

苦も楽も両手に提げて八十路越す

合格の覇気高らかな孫の声

富士宮市 渥美弧秀

「生きるための死に方」を読み身を委ね

病室の涙と笑い富士へ生き

武器にする老妻の小言も慣れました

野仏の鼻欠けてても親しまれ

来世もまた暮そうよ凡夫婦

静岡県 菌 田 漠 杏

町田市 竹 内 紫 鏡

電車待つ無人駅での日向ぼこ

老木も嬉し生きてる新芽出す

子育てが終り隣も静かなり

紙コップ ストロロー二本が可愛らし

途中下車してみたい駅山の旅

横浜市 菱 田 満 秋

花贈る春に生れし人ありて

雨降りの確認をする掌を拵げ

挨拶をして良い人ときめられる

指しゃぶる間は脛を齧らない

眠れない夜はあちこち痒くなる

横浜市 清 水 潮 華

出来ること出来ないことを仕訳する

春の香を味わう桜餅二つ

不覚にも大事なときに風邪を引く

てにをはを間違え仲がきしみ出す

満開の梅に気合をかけられる

横浜市 後 藤 早 智

色褪せている不況下のバレンタイン

代償を払って自由手に入れる

新しい生命で春の嶺に向き

深海魚静寂の中色を増し

とまどいも埋もれてしまう砂時計

私語を叱られた図書館生きがい

わが家系継ぐ子守唄にも時代

口許を写され国歌反対か

社員食堂 知人はまれとなる月日

新鉄道唱歌ふさわし金婚に(昭和12年の曲)

大宮市 八 田 敏

節税と力んでみるが知れた額

妻の世話 家来みたいと孫が言う

妻の杖たらんと老いの万歩計

古雛も壇に並べば春の風

暇だけは年金貴族にふさわしい

仙台市 川 村 映 輝

日本の敵は日本に居る日本人

地震あるうちは地球が生きている

国旗立て君が代歌えば不景気去る

定年退職上下の無い夫婦なり

無利子時代酒も煙草も止めにする

弘前市 一 戸 ツ ネ

修整の効かぬ素顔でとぼとぼと

星空に揺れる棒鱈寂の貌

年金の耳に平和な下駄の音

生きてます春の衣の鯨尺

目覚めれば鳥獣戯画の春の舞

平凡な男の顔が友の価値
ぬいぐるみ母よりうまく子と寝付き
使うことない生真面目な針供養
雪とともにまだまだとけていられない
私も地球の塵のひとかけら(祝 紫香先生川柳集)

弘前市 蒔苗果林

種子を播くまでの迷いの茄子キユウリ
売ると買うこんなに違うほうれん草
スタートの靱に秋への湧く祈り
消雪の汗は農夫の無言劇
白鳥が帰り水面は風ばかり

弘前市 相馬銀波

満月が欠けて寄り添う影も消え
嘘を吐く部屋で酸素が薄くなる
禁煙車両増やして煙草値上げする
うつむいた影もやっぱり俺のもの
デカンショの唄が弾ける青春賦

弘前市 浅田隆樹

干し柿に奈良の都の恋心
高僧のせき払いまでありがたい
妻の言うことウンウンと風邪の床
氷点下あるかもしれぬ父の星
いたずらが過ぎてもおおめ春の風

サクラサク 絵馬の魂抜けてゆく
なんとなくもらった名刺靴べらに
無縁墓地にもお岩木山がくつきりと
不況でも春爛漫とさくら咲く
はな吹雪 浄土の旅は花筏

弘前市 今愁女

盃の花びらも酔い即興詩
晩鐘の余韻が誘うさくら闇
ヨウと来て壺心得た烏鷺敵
新茶点でしづくしづくに聞く噂
三木の男慈悲乞う紙衣佛

弘前市 岡本花匠

遅い遅い出発でしたでも歩く
酒こぼす亡父に似てきたなと思う
喧嘩する二人はちよつと擦りきれる
ちやぶ台で読み書きをしたよき時代
商人の無駄にはならぬ無駄話

弘前市 須郷井蛙

買い物は上手 店品主婦の知恵
年金が貯まると備品が故障する
風よ雲よみな自由化で日本に来
安いもの知ってはいるが交通費
新聞を二つも読めぬ齢になり

十和田市 小笠原 敏 人

密やかに綻ぶ万作僕は好き
身ごもった猫がゆったり通り過ぎ
娘に送る荷物の箱が綻びる
庭の雪消えて横着また目立ち

八戸市 島 田 昭 治

風が好き亡妻の噂を運ぶよう
嘘でいい風よ亡妻のこと伝えてよ
雨降れば余計亡妻が恋しくて
佳子さん日課にテープ聴いてます
お迎いが来たらすすんなり行くつもり

青森県 諏 訪 柳 々

平たんの脳波に生きる生命かな
生命とや脳死の重さ国揺する
師匠逝く妻の掌に書く「アリガトウ」
還暦や足らざる知恵を今思ふ
権利証の一ミりに揺れ両隣

砂川市 大 橋 政 良

バランスを崩した酒と二十五時
もやもやを発散させる長電話
一徹というネジ錆びたまま折れる
人間の臭みが薄い街となる
生年月日死ぬ日の目安かもしれぬ

広島市 森 田 文

老いるとは厄介なものまた忘れ
気が合うて老後のはなしまで決まる
廃屋の里で山鳩泣いている
ブラボーの嵐かあさん共に泣き

竹原市 石 原 淑 子

還暦の万年青年温い風
夫からのホワイトデーのプレゼント
菜の花に染まる倅せいろになる
生きていた芽の膨らみのまぶしさよ

岡山県 小 林 妻 子

買物に行くばあさんの軽い足
路わらび春の野山が呼んでいる
山盛りの白菜漬と昼ごはん
アマゴ釣り孫とはしゃいで出ていった

岡山県 二 宗 吟 平

置き忘れまた置き忘れする名人
デーサービスサービス受けて短い日
ラジウムの温泉があり町自慢
手の震えワープロという秘書が居る

出雲市 石 倉 芙 佐 子

朝毎に一二三と桜守
行くも帰るも母を泣かせる姫小袖
人恋しい朝は前髪立てて結う
長男と十日も会わぬ春の雪

出雲市 吉岡 きみえ
春だなあ波とあそんでたわむれて
山鳩が死んだ溜息ばかりつく
ゆらゆらと面影ゆれる橋がある
米背負い野菜背負うて孫抱きに

出雲市 竹治 ちかし
波風はたてぬが底にあるうねり
欠勤の届けを出してから元氣
母さんが倒れてからの人模様
頑張った分だけ神に貰う幸

鳥取市 富山 檳榔樹
花吹雪古木の精が意地見せる
凡人の良き自然の道をうららかに
肩書きが名刺の裏へ欲を盛る
老いの身に夢の怖さが染みてくる

鳥取市 前田 一枝
流行に追われてバッグ軽くする
ワラ屋根に一輪野菊根をおろす
甚六の嫁とり村中大さわざ
たまに逢う今宵時雨にぬれて待つ

米子市 中井 ゆき
桜咲く身辺整理気にかかる
仏壇に泣いておこつてスツとする
砂にかく私の踏絵すぐ消える
善行と思うやさしい一言は

鳥取県 原 みさを
昭和史の反省ばかりさせられる
平和ボケして日本を忘れそう
日本の隅でラーメン食べている
雑念を払う仏説阿弥陀経

鳥取県 近藤 春恵
桜咲き過疎にも甘い風が吹く
そばがらの枕に春の夢托す
病床の寝息に心すくわれる
親切に席をゆずったのは茶髪

宝塚市 黒台 伊佐武
物差しの違い恐れずマイペース
口だけが達者同士の老い二人
取り柄無いそれが私の取り柄です
落語会最前列で眠る奴

尼崎市 的場 十四郎
四捨五入味方に入れて春の風
似た背中いたわり合っている茶の間
裁かれて仮面外すかカレー皿
池の鯉大河で泳ぐ夢すてぬ

姫路市 古川 奮 水
友禪の古都立春に雪化粧
鶴 幸せをくれそつな春
海峽の春を歩いたパール橋
焼肉の屋台が靴の向きを変え

鳥取県 近藤 春恵
桜咲き過疎にも甘い風が吹く
そばがらの枕に春の夢托す
病床の寝息に心すくわれる
親切に席をゆずったのは茶髪

大阪市 中田 あい子

この乱世メスをふるってほしい医者
ハンサムな子よりやんちゃに人気あり
姑に耐え嫁にがまんの大正女

ありすぎた自信が方針あやまらせ

大阪市 北 勝美

黄昏れて引きずる足に明日がある

米寿生き今の世の中わからない

全面広告新聞受けがバンクする

諦めか浪花淋しい知事選挙

大阪市 寺井 東雲

印鑑を見てから顔を見直した

すばる遠望 宇宙の星が鮮明に

大樹に耳昔の話聞いている

神父さん赤いちゃんちゃこ好きになり

大阪市 岡本 久峰

コーヒー一杯出前さすとは横着な

儲けさしておくんなはれと鈴を振る

ドナーカード人間愛の極致なり

ベレー帽お若いですなと煽てられ

堺市 近藤 豊子

パーティーのまんなか花のようなひと

パーティーをひらくご苦労おっしゃらず

えんぴつのでんでんばらばら春休み

えんぴつのようにシンプルライフです

岸和田市 芳地 狸村

大学にバスした孫のいい笑顔
マスコミのペンが騒がす移植メス
メンバーに美女がまじってもめている

裏街に情けがつまる赤のれん

岸和田市 長谷川 呂万

地下駅の出口で迷う西東

除虫剤撒くと決まって雨になる

たこ焼になにわの文化詰めてある

偉い人ほどルール守らない

岸和田市 井伊 東吉

年よりの顔が生き生き春日和

外交は口出しすなと知事を責め

無党派の行方気になる都知事選

ノムさんの効果で不景気吹きとばせ

八尾市 長谷川 春蘭

人一人通らぬ墓地に桜咲く

摘草の子等の親しみわかれ行く

春眠の子に合格の安堵あり

検診結果恙なかりて水温む

羽曳野市 酒井 一壺

川岸へ流されながらたどり着く

初恋の人になんにもしてやれず

初恋へ今も賀状でおめでと

片思い初恋でした十二歳

春風が団子兄弟波に乗せ

日本初知恵しぼつてる振興券

古墳から魔よけの鏡奈良の里

はるばると里帰りして路のとう

交野市 山川 日出子

吹田市 野下之男

しおらしく着物羽織つた犬の顔

懐かしい母校の並木凜と立ち

なにやねん愚痴と思えば惚気てる

カラオケはいつもの自信顔に出ず

枚方市 二宮山久

今できる事は元気なボランテイヤ

父母に似ておいら元気な趣味多忙

雪どけの便りが届く宅急便

南部路の梅林なごむ夫婦旅

寝屋川市 高田博泉

茶髪でも家に戻れば甘えてる

倒産の噂へはずしてきたバツジ

缶ビール選り放題の顔ならべ

赤い花咲かせ黄色を待ちこがれ

寝屋川市 後藤黎之助

日溜まりで育てていきます生きる欲

振興券もらえぬ人が横を向く

踏みなれた道は空みる余裕あり

新会長部屋の扉は開けたまま

積年の誤解もとけた囲炉裏ばた

忙しく喧嘩もできぬうちのパパ

美しく理想が高く老いてゆく

好奇心あいてる窓をのぞかせる

豊中市 松岡久留美

和歌山市 山根めぐみ

森の精眠って白いセレナーデ

アルマゲドンみな一緒なら諦める

真実を直視しているはぐれ雲

迷う子に父の背中では司令塔

和歌山市 池永正圃

山頂は長々居れる場所でない

最果ての駅も上りの夢がある

福の神一べんお目に掛りたい

銀翼も今はアロハでお出迎え

横浜市 菊地政勝

あした吹く風を待てない失業者

親のすね当てに二浪を続ける気

染め上げて落ちる夕日に妻を呼び

不景気の風は気ままに吹いている

八王子市 播本充子

妬く訳じゃないが男の審美眼

増え過ぎた鳩が平和を脅かす

後輩の勝ちへ拍手を惜しまない

段取りを理路整然と間違える

弘前市 櫻庭順風
ペンギンパレードご帰宅のセレモニ―
そろいぶみ揃い踏みして上陸す
呼ぶ声に父母の慈愛が乗ってくる
はぐれじゃないの みよちゃんにいたいの

弘前市 中山雅城

五合目で決心をする登山靴
五寸釘今も家訓を下げている

五体満足で生まれた宝物
五穀豊穰乳穂ヶ滝氷る年

弘前市 福士慕情

ヘルシーとおからが威張るドーナッツ
生かされて激しい咳と熱にあう

快気祝い酒が病気を自慢する
裏切りと思う突然散る椿

弘前市 小枝ふさゑ

不況風素通りして往く百円店

挨拶の次に出るのは雪の愚痴
雪降らぬ朝はゆっくりお茶を飲む

十和田市 阿部進

嬉しいな今年もできる野良仕事

美辞麗句裏に仕かけた落し穴
倅せを急ぎ足にて追いかける

のんびりと夜の居酒屋独り酒

黒石市 相馬一花
通夜の席時計は見ないことにする
厚化粧した女房に会釈する
自画像は少し美人に描く絵筆
汗をかくことを知らない七光り

水煙抄 (追加)

小春日にスマレ見つけた目が丸い
島根県 槻谷伸子
法要に寄附もして来る夫の見栄

科学のたわごと アベコベガエル 阿萬 萬的

「成長する程小さくなるもの、ナアーンだ」と問われたら、コンピュータとか半導体だと答えるでしょ。ところが生物の仲間にもいるのです。南米の奥地のインディオが食用にしているオタマジャクシで、アベコベガエルというのだぞつです。このアベコベガエルはオタマジャクシの時は体長二十五センチ前後で、次第に成長してカエルになると、なんと四〜五センチになってしまうと言ふ。これを人間に置き換えてみると、子供の時百八十センチのものが、成人すると四十センチ前後になるわけです。

普通の考え方だけでは測り知れない事がたくさんあるので、科学を学ぼうとするとき一方的に決めては駄目ということらしい。これは川柳にも言えることでは……ねえ。

アベコベもあって世の中また楽し

萬的

佳句感想

橋高薫風

句のリズム

酒とろりとろり大空のころかも

麻生 路郎

しんとろりとした美酒の滴りを凝し、黒田武士の大杯を呑み取る気概を大空につないで文語体で締めくくる。おおらかなリズム。

のみに来た友に家賃をきかれて居、
輕みにふさわしく連用形の居止めにして、

意表当惑の思いをにじませる。先生のはこの
ような輕みの句にも生活の臭いが色濃く出る。

ムザ／＼と使える金が少し欲し 同

つぶやくよつなリズムでありながら切実で
ある。庶民の本性に迫る上句の力に注目する。

似た者同士 津軽毎日雪見酒 佐治千加子

この句七・七・五型である。上句、中句、
下句がポツンポツンと切れている。これは指
を折りながら作句する初心者にありがちな手
法だ。しかし、この句はまだその上に中句が
三音と四音に切れる。この中七のリズム感が
殊の他深い味を出している。日本の言葉の連

繋の味、リズムとアクセントの相互作用の複
雑な抑揚はその内容を効果的に高めてくれる。

津軽風はるかな春を呼ぶように 同

「はるかな春」、はるの繰り返しは春の明
るさ輕快さをうながす。この感覚も偶然のよ
うで偶然ではない。作者の体内に備わるリス
ム感のしからしめるもの、伝統美なのだ。

春風に水の美術館がひらく 吉田孔美子

内容まことにすばらしい。春の到来と水の
美術館は想像力をそそられてたのしい限りだ。

この句の構成は五・九・三の十七音字だ。
今、一字を取って十六音字にしたらリズム感
はどうだろう。「が」という重い一字の有る
無しは三度続けて声を出して読むと明らかに
なる。定型より破調の方がリズムのよいとき
もあるのだからリズムの研究は奥深い。

春風へ開幕水的美術館

この形が一番スタンダードだが魅力はない。

ガイドライン日本守るとは神話

越智 一水

北朝鮮の工作船二隻の逃走事件がクローズ

アップされる昨今、当然出てくる句であらう。

この日本はニッポンと発音すべきかニホン
の方がよいか、これは明白だ。六・九・三の
句で、ガイドライン(字余り)に九・三と続
けると口調が良い。「ニホン」としても音
数のつじつまは合うが力強さに劣る。

快調な朝のリズムに春近し 佐野木みえ

快調な指先に春らしきもの 川本 晔

二句ともに快調と春の語が用いられていて、
お二人ともに松江市の方である。

前者はすらりと素直な詠みぶり、後者は指
先という具体的な指示と春らしきものという
微妙な表現を試みられている。快調と春以外
の用語もリズム感のある語を選んで、「が」
などの重い言葉のないのも共通して良い。

赤い傘青い傘今日月曜日 岩本 笑子

五・五・二・五型の定型十七音字の句だ。
赤と青の傘は0Lの世界を表現するのだから
が、句のリズムは弾むのがよいのか。ここで
検討が必要なのである。弾むムードならこの
ままの形で畳み込むリズムでよい。

赤い傘、青い傘と休止の節を重ねたのだか
ら「今日は月曜日」とする手法もある。中八
という忌避すべき形を取ってとつても、リス
ムの点で変化があり、思い入れという面の味
も出る。一考して比較する価値ありである。

自選集

西田柳宏子

ツーカーの呼吸そつなし夫婦舟
怒るのは止そう傘寿が笑われる
早いのはよいがすかたん許りする
人生は重荷担いだ根比べ
お人好し甘い話は皆とられ

野田素身郎

水虫と共にめでたく古希迎え
情けなや閃いた句をまた忘れ
一周忌意外な側面聞かされる
春が来て後遺症の足軽くなり
春一番捨てられた恋思い出す

高杉鬼遊

不景気な流れを泳ぐ鯉のぼり
在るところにあって落ちつく他人の金
首まわるでいどに借りて生きのびる
低金利元本までも莫迦にされ
孫かこむ振興券でする宴

月原宵明

人間に花粉贈って山は春
悪友と握手終つてから渾名
生き残る船しまなみの波を蹴る
ひっそりと合格発表見る一人
悔し涙見せなかつたのが恐ろしい

辻白溪子

愚痴こぼす仲間が増えたクラス会
寿司でもと言うお誘いに野心見え
つないどく言葉が急に見つからず
無理を言いやすい相手にされた愚痴
そう無理を言うなどなだめながら注ぐ

波多野五楽庵

よく笑う子でした西瓜好きでした
悔しくて石を砕いた事がある
思い出はレールの継ぎほどの音
面影を忘れはしない風の町
いくつもの縫れ話をポケットに

廃墟の月 石垣の石詩を綴る
鉄の錆匂う運河に音がな
残月にもの言いたげな藁の屋根
北の浜鴉早くも春を知る

阿 萬 萬 的
小 林 由 多 香

祝福をされて定年無職なり
跳ね返すチャンスへ力溜めておく
寒さとは関係ないが芽が出ない
最下位でみごと当選おめでとう
温室の花芽お先にこんにちは

宮 口 笛 生

噛み合わせぬ歯車ひとつ離婚沙汰
潮時を逃がしてからの苦労性
0（ぜろ）となる税金申告して帰る
三月の夜明けに春が見えてくる
幸せを買いにスーパーまで走る

藤 井 明 朗

感謝感動むらくも五十年の春
親友も歳とつたなと花の酒
新婚旅行宇宙では楽しめず
ささやかな祝宴楽し友に逢う
珍客の早い別れを惜しむ駅

小 西 雄 々

靛郁というには遠い沈丁花
水ぬるむ鯉生き生きと城下町
花言葉一句を添えて夢二の絵
指しろし少年空へハーモニカ
シクラメン実篤の絵にある温み

松 川 杜 的
遠 山 可 住

老人力どうだどうだと胸を張り
食うだけでよしばらいことおまへんか
風邪ひいたらしい新聞まだ来ない
橋架けて島のロマンが戻らない
水子塚一円玉よ何処へ行く

正 本 水 客

平凡に平凡にと私は生きてきた
言い訳を仕舞まで聞いているのも忍耐
九分通り成功ですと靴をはく
箒目をけすほどの雪降ってやむ
行間の一言深くむねにしむ

新世紀の粋を信ずる写楽の目
立読みの知識で世相切る男
仙人の声を霞の中で聞く
本日も嘘も嗅ぎ分け芽を伸ばす
弥陀の掌の中に傾く命抱く

金井文秋

鍵かけたかいなと家に引き返す
孤独に慣れたとこの人も負け惜しみ
離婚のニュースなんや結婚してたんか
禁酒の傍でことさら旨そうに
わくわくさせといて何でもない話

恒松町紅

五感まだ達者で越える喜寿の坂
褒めるのが難しいから嫌われる
プライドが高くて夢中にはなれぬ
ど忘れを笑われている靴の底
戦友の分まで生きる二合瓶

板尾岳人

手品師の男大事にする五月
手品師の鳩に人間懺悔する
手品師に逢いたくなくてハトを飼う
手品師の鞆の中に住む五月
手品師になりたくなくて来た五月

野村太茂津

君ヶ代合唱何故か涙が湧いてくる
君ヶ代合唱老兵音痴声高く
君ヶ代合唱微動もしない膝頭
君ヶ代合唱腹の底から湧く命
君ヶ代合唱生命拾った命拾った

黒川紫香

風に乗るおやじのシャツが赤すぎる
ストロベリーケーキで一刻曾孫と居る
降り立てば花粉とやらに巻きこまれ
親同士の話が進む向かい風
言いたいこと言うおぼはんのたこ焼き屋

藤村メ女

我が家にも武者一人あり鯉のぼり
街五月 女はすなり鮎となり
生きざまの一つ地を這う花もあり
みな天について麦の穂たくましい
君が代も日の丸も好き日本晴れ

八木千代

往きつ戻りつソメイヨシノの道中記
戻り寒とどいた春をたいせつに
天に地に師に恵まれて椿咲く
そのあとも蓄ひしめく椿谷
咲き切ったからは性根を据えている

河内天笑

死にたいわそないしなはれやめとくわ
年金がみな香典に化ける月
もう卒寿としを訊かれてうれしそう
どこにでもあるような名の夫婦なり
差別語にセクハラがんじがらめなり

山田良行

東野 大八

「私が川柳をはじめたころは、雅号はふざけたものはいけない。坊というのもしけないと言ふことを言っていた先輩が多かった。

私は山田だから『案山子』(かかし)と名付けていた。山田の中の一本足のかかしという童謡から採ったものだが、よくやめなさい、と言われた。雅号は自分が考えるものだと思っていたので、亜砂朗(アスナロウ)に変えた。ところが皆さんはアスナロウと読んで下さらない。亜砂ロウさんになっていたので、アスナロウというのは無理と思いつつも、私自身はアスナロウのつもりでいた。

そのころ福井市に川崎銀甲(番傘本社同人)さんという先生がいらしゃって、川柳のことをいろいろと教えて頂いた。川柳に至極熱心な方で、この銀甲先生が考えて下さった雅号

が後甲(りようこう)だった。本名の良行を音読みにして字を変えて下さったというわけで、それから随分とこの雅号が通した。

しかし、そのうちこの雅号が銀甲を凌ぐという意味だとわかって気にしたせいもあり、本名の良行を音読みにすることにした(『きたぐに』誌『耳心庵雑記』山田良行)

大陸川柳作家同窓会は、昭和40年4月の結成だが、その第三回目の昭和43年は日本ライオン下り明治村が会場だった。この折がこの人と筆者との初対面だった。

「貴方と大陸との御縁はどこからです」と訊ねたところ、丸いアゴをなでながら

「私は大正11年10月8日中国は東北地区の遼寧省營口の生れてして、現瀋陽すなわち奉天市の一中卒業後、地元高校を経て満洲医大

を卒業し医師になり、軍隊復員後、奉天医大の結核病棟付になった折、患者の一人が川柳を嗜み、俳句よりずっとこの方が面白いと一冊の柳誌が縁で、川柳なんて俳句よりずっとうわてだと思つたのが病みつきです」

と、ノホンとしたその自己紹介ぶりに、こちらも同じ古川柳かぶれが昂じた川柳人だけに忽ち握手を交わしたのが御縁となった。

だが、大陸川柳同窓会は、年毎に大陸出身者の老化により死亡・病臥者が相つき激減一途のところから、結成以来十九年目の昭和59年夏、高山野の集会で解散と決つた。

「良行さん、大陸同窓会も生き残つた新選組よりひどい、もう解消しましょう」と持ちかけたなら、良行医博は危篤の病人の脈でもとるような面持ちで

「いや、会長あんたがそんな弱氣でどうする、五、六人でも続けましょう。大陸同窓会も名を変えて中国随一の長大な黄河の名をとつて長江会と名付け再発足しましょうよ」という熱心さだ。その長江会結成集會を岐阜市のウ飼の舟の上で実現したものの、集るものたつた十二名という有様で、これっきり二度と開くことはなかったのである。

「惜しいことですけど没法子ですな」とガツカリしたその貌を今も忘れない。

川柳えんぴつの同人だった金沢番傘の山田良行が番傘本社同人を辞退し、金沢で北国川柳社を興し、機関誌『きたぐに』を月刊で発足したのは昭和44年だった。時にこの人47歳の働き盛りだった。

何をおいてもオメデトウト、われら同志は挙つてその発足に祝意を表し、ここらからの支援の手をさしのべたものだが、まさかこの良行主幹が全日本川柳協合理事長に選ばれるとは予想もしなかった。

平成元年一月の同協会常任幹事会で、故中島生々庵理事長の後任として文句なく選任されたのである。そして仲川たけし会長を支援し、同協会の社団法人化に尽力した。

こうした理事長職務の中で特に意を用いたのは日本現代詩歌文学館（岩手県北上市）の詩、短歌、俳句の三部門に川柳も参加させることで、日川協通信にもその呼びかけに熱心だった。また個人的には、大陸の營口市出身であるところから、懇意の中国人に呼びかけ漢俳グループの結成にも力をそそいでいた。

しかし平成11年3月15日滞京中の上野駅で脳梗塞で倒れ逝去した。76歳であった。医学博士、労働衛生コンサルタントの生涯にとつてはまさに不慮の死という他はない。

思えば大陸川柳同窓会では、世話人の大井

正夫が倒れた折、うまく居合わせた良行医博が入念に診察して

「死神で奴は、時とところを選ばない。決してこれしきのコトと油断は禁物です」と申されている言葉を思い浮かべ、筆者は素然たる想いでこの人の死を悼んだものだ。

「私は昨年、高松と湯布院の大会で良行氏と同席しましたが、アルコールを一滴も口にされないのに感銘した」

とは石原伯峯ひろしま誌主幹の私信だが、思えばこの頃から自らの身体の現状を推察して慎重自愛を続けていられたらしい。

「先頭に立つと真ともな風当り 良行

過失致死の前科も秘めた聴診器

錆びついたように手足が謀反する 〃

『きたぐに』誌三月号の良行作品を見たとき、なぜこんな弱気になったのか嫌な予感がした。いま遺作として読み返すと佻びしさはひとしおである。

良行氏が番傘同人になったのは昭和三十年の秋だった。同期に西田自然人、桜井六葉、右近志秋の北陸陣と安井久子、上野山東照ら二十六人居たが今は上田佳風ひとりになった。

箸紙の揃う平和な世に戻り 良行

御破算で願いましたは機械編み 〃

昭和三十一年、六葉、自然人らと良行氏は

金沢番傘川柳会を設立。一月十四日に加賀山代温泉「万惣」で福井、敦賀番傘会と合同の新年句会を催し、岸本水府、木幡村雲、西村左久良他十余名が大阪より参加、新発足を祝福した。

昭和三十年代に誌上、番傘同人近詠の巻頭頁を占めた作品も軽妙、ユーモアが話題になった。番傘同人には、川村伊呂呂、太田佳凡の医師作家が居て、知識人ならではのムードをもつ中へ食いこんで行った。

群馬県太田市に平成六年建つた句は

疲れたと言わぬお日様お月様 良行

の句であった」（『川柳番傘』四月号巻頭・磯野いさむ・悼文抄録）

「良行博士、これは奉天医大での学長室の話ですがね、学長の部屋へ門下の医師の一人が開院挨拶に来た。その人へ学長のいわく、開業医おめでとくと共に君に言いたい。開業の院長になったらまずヒゲをたてることだ。あなたも医博、ゼヒ共ヒゲをたてなさい」

然し一笑に付して頭からとりあわないこの人だった。もしヒゲがあったらもっと長生きされたかもしれない。山田良行とヒゲ：これは筆者のひそやかな哀悼の想いだ。

▼前号の予告を変更して、山田良行氏の急逝を悼む。次号が「片岡つとむ」

誹風柳多留二四篇研究 5

橋本秀信・粕谷長生
山田昭夫・伊吹和男
大野秀二・小栗清吾
高橋啓之

清 博美・佐藤 要人

26 丈ヶ長の鉢巻とんだげひたもの 狸声

橋本 鉢巻は短くきりりと締めてこそ勇ましく、威勢のいい雰囲気も出るというもの。丈長で結んだ余りがぞろりと垂れ下がっている姿はだらしなく見えるという句。

丈ヶ長ではち巻をして肌を脱キ 一七二

丈長の鉢巻殿をやり込める 三八三

小栗 賛。ただ、当時の女性の風俗として、丈長奉書で鉢巻状に髪を束ねることがなかったか気になる。例句もそうだとすつきり解釈できる。

主題句も「鉢巻はいなせなものだが、丈長の鉢巻じゃ下卑たものだ」というだけの句で、すつきりするのだが。

清 庚申の丈長ではないですか。

佐藤 小生は清説に左祖する。庚申の夜、丈長奉書で髪を束ねる。これを鉢巻と表現した。男の感覚では、下卑た真似をしやがる、ということになろう。

27 も一ツへん廻るかどうかだにへきりやな 梅玉

橋本 煮え切らにやは、煮え切らない（決心がつかない、優柔不断である）という慣用句を、肯定的にして、決心せよ、決断しろと促す会話と解釈した。

話体の句。二人連れの遊客が、一通り張見世を回り敵娼を探す。一人はお目当てが決まったが、もう一人は迷ってなかなか決まらない。「じやもう一遍廻るかどうかどうする?ここらで決めなよ。売れちやうぜ」という一こま。

目うつりかすると三百けんあるき 二二五
見たてるに十町あるくよくどしき

安五智 1

引きぞわづらつて引ヶ四ツ迄あるき 二二二
清・佐藤 賛。

28 福原の後チわたつみへつれ申 狐声

橋本 寿永二年（一一八三）木曾義仲に攻められて都落ちした平家は、安徳天皇を奉じて兵庫福原に新都を設けた。

わたつみは、海の神、海神。（海神のいる所の意から転じて）海、海原。

平家一門は福原遷都の後、安徳天皇を戴いて一ノ谷、屋島、壇ノ浦ともっぱら海上を転々とし、ついに壇ノ浦で滅亡。幼帝は二位の尼とともに入水した。

一門はどふりくゝとそうもんし 初17

おぶさつて出よふと須磨のみことのもり 明八桜 1

みくずにならせ給ふとハやすいとく 安九宮 2

清・佐藤 賛。

29 かん病にしよくせうをするまづいやつ 玉章

玉章

橋本 療養中の病人が、病気がなかなか快方に向かわないので、養生専一にしなければならぬ生活に飽きがきて乱れるというのは、自分でわが身を減らすことになり大変よくないことだ、という解釈をした。

普通の語釈にしたがえば、病人の看病をしている人が、その病気が長く続くのでいやになるというのはけしからん奴だ、と言う意味になる。しかしこれでは当たり前、教訓的でありすぎるので。

かん病にはり合イの有ル事が出来

一三三〇乙

高橋 後説のように考えた。看病しているのは女房で、亭主の病気は腎虚のように思ったのですが……。

粕谷 礎稿贊、ただし高橋兄のいわれる腎虚ではなく、妊娠などのお目出たい方の看病ではないか。

小栗 「食傷」は「②食べすぎていやになること」(『江戸語の辞典』)。物を食べられない(あるいは、食べてはいけない)病人の看病人が病の人の側で食べ過ぎていやになる程食べるとは、とんでもない奴、という意味だと思ふ。

清 看病にあきるを食傷と表現したまでの句と思つていましたが……。

佐藤 高橋説の腎虚をとりたい。病人はうずうずしているのに看病ばかりしている。

30 おと、いのやうに又いふぞめものや 中業

橋本 あてにならぬ賢え「紺屋の明後日」の結果は？言葉信じて、二日目に染物屋を訪ねたら、やはり一昨日と同じように、また「明後日」と延ばされた。

むだあしを一日置にこんやさせ 一四一九

清・佐藤 贊。

31 はらをせにかへて山猫かへるなり 一口

清 この句、山猫を私娼とするか、大道芸の山猫廻しとするかが問題であるが、ここでは、私娼と判断して話を進める。

本所回向院や牛込赤坂神社などの社寺地内で密かに春をひさぐ私娼が居り、これを山猫と称した。本来ならば、この山猫の生態を詳しく調べて記述しなければならぬのだが、今回はご容赦頂きたい。例句と思われる句に、山ねこハ娘のころろへたのなり 明二二四とあって、この山猫は意外に女人然としたところがなく、地女を装っていた気味がある。

「はらをせにかへ」は、勿論「背に腹は替

えられぬ」のもじり、この語が何を指し示すのかを考えなければならぬのだが、ここでは帯として見た。

つまり私娼として就業中は、女人としての前帯だが、仕事を終えて帰宅するときは地女らしく後帯にする、というのである。

小栗 山猫廻しの句だと思ふ。腹の前の箱で人形を使って商売をした後、この箱を背負って帰るのである。

山猫廻しについては、人形まわしの大道芸人。傀儡師。略して山猫とのみもいう。小袖櫃のような箱に人形を入れて背負い、腰鼓を叩いて小童を集め、指人形をあやつって見せる。(『江戸語の辞典』)

橋本 同右。右の出典は『塵塚談』(燕石十種)の中に、

傀儡師を江戸の方言に山猫といふ、人形まはし也、一人して、小袖櫃のやうの箱に人形を入、背負て、手に腰鼓をた、きながら歩行也(中略)語りながら人形を舞し、段々好みも終り、是切といふ所に至りて、山猫といふ颯の如き物を出してチ、クワイく〜とわめきて仕廻也

とあり、ほぼ同文が『画証録』にも見える。

佐藤 同。

秀句鑑賞

同人吟林 荒介

— 4月号から

何時もは、ばらばらと目を通すだけの同人雑詠だが、通読して主幹は大変だと思った。

投句される方は川柳とは、と、自問自答しながら作句してほしい。各自が自分の川柳観を確立してほしい。通読して特に思ったことは説明のしすぎの句が多かった。言いたいことを十七音字の中に全て盛り込めば、読み手に鑑賞の余地がなくなる。ヒントが一つあれば読み手もその句の中で、作者と想いを共有することが出来る、句ができたら口のなかで何回となく句を転ばせて、川柳に成っているかどうか自問してほしいし、省略は、比喩は適切かどうか確認しなければならぬ。比喩、暗喩が適切なら句に広がりが出るし、読者との共有の場ができる。自分の句いのある川柳をと思っているが、なかなか自分の川柳ができない。これは常々自分に言い聞かせている事だが、言うのは簡単だが今一人の自分が納得してくれぬ。自分を突き放して客観的に裸の自分を何処まで詠めるか、問題はその一点に掛かっていると思っている。

掌はお血過去も未来も盛ってある

藤田泰子

沢山の人に詠まれた「たなごころ」だがお血は言いて妙。現在までの全てを共に過ごしてきた掌だから、手のひらを見つめていると走馬灯にも影絵にも成る。未来もまた過去の延長線で無視することは出来ない。

掌を「たなごころ」と読ませるのが「てのひら」か「て」だろうか。「て」は手で掌と手では意味する事柄が違う。川柳作品のなかに亡母と書いて「はは」と読ませているが、これは「ぼうぼ」で、亡くなった母は「妣」で、これなら「はは」と読める。私事になるが「亡母」は「ぼうぼ」と読むことにしているが、生きている父母と亡くなった父母は句の内容で判読できる。無理な読ませ方はしないで欲しいと思っている。大事なことは、その句で自分の中の何を言いたいのだ。

飛ばされぬように重たい靴を履く

古川喜美子

重い靴は後悔や懺悔に繋がる人が多いが

此処では保身に使われている。これも一つの発見。人は弱いもので、時流に流されやすいのを意識して「重たい靴」で大地にしっかりと立ってしようとする現れ。不用意な風に飛ばされないよう、私は私であらねばならぬ。

頂上で一息ついただけの事

山本玉恵

軽く詠まれているが内容は重い。「一息ついただけの事」とあっさり言えるから川柳は凄いい。生きている限り峠は続くし、終わりの見えない旅だが、視点を変えれば、だから面白いとも言える。登り詰めた頂に腰を下ろしても、次の頂がすぐ目の前にある。幾たびとなく上り下りを繰り返して、生きつづけなければならぬが、この句のように深刻ぶらずさりと生きたいものだ。

向こうから乗りかえ駅がやってくる

山根めぐみ

意図しないことが色々と起こるし、意思に反して乗換の駅も勝手にやってくる。生老病死すべて向こうからの仰せ。運不運どうにも仕様の無いことで、落石注意の標識には考え込んでしまふ。注意して上ばかり仰いで歩く道を踏み外してしまふ。喜びも悲しみもある乗換駅だが、善意に解釈して悪いことも此れくらいで良かった、で、過ぎたい。

怯まない位置で手紙を書いている

佐治 千加子

怯まない位置に立ち止まってしまった。怯まないで書く手紙とは何か、解釈は読み手に投げ出されている。手紙の内容が気になる、無論、恋文や依頼状では無い。直言だろうか苦言か、相手との間柄も気になるが、通り一遍の間柄では無さそう。こう言う川柳は色々想像できて面白い。単身赴任の父だろうか、友達同士か、兄弟か、ベンに衣着せぬ正論を書きつけている手紙ではなからうか。パーゲンの熱気の中にいるわたし

辻川 慶子

近所に新聞より折り込みのチラシを真っ先に開く人がいらっしやる。あの熱気にストレスが発散するとか、私には耐えられぬ人いされ。女の人は逞しい。

石橋を渡ってからの綱渡り

小池 しげお

生きて行くとはこんな事かも知れぬ。石橋と綱渡りの繰り返し、冷静に対処する時もある、向きになってしまふ時もある。完璧な人は居ないからの「綱渡り」で、人間の脆さを的確に捕らえての一句。不確かな人間だから旨い酒も飲めるが、石橋ばかりの人生には息が詰まってしまふ。

海岸はもともと誰のものですか

三好 専平

と聞かれると国家の物です、と、答えるしかないのだが、作者の意図は別のところにある。作者は国民みんなの物だと言いたいのだと思う。傍若無人に自動車を乗り回したり、花火を上げたり、ビールの空き缶やベツトボトルの飲み捨て。自分の家では考えられない公共の場の乱雑さ、車の窓から平気で煙草の吸殻を捨てたり、ジュースの空き缶を投げ出す大人たち。困った日本人が多くなつたが何故だろう。大人は子供の鏡なのに。目くじらを立てて鏡を見てごらん

福田 満州

鏡に映すのはいい顔をだが「目くじら」の顔が面白い。いがみ合っている顔は自分では判らないからの鏡。鏡に映った怒った顔は嫌な顔だと思ふ。鏡に向かつて百面相をしてやろう、目くじらを立てないのが一番。

大雨洪水警報発令体育館

桑原 道夫

漢字だけの川柳だが、体育館のざわめきが余すところ無く詠まれている。雨は未だやまないか、家は、土石流は、田畑は、不安な体育館の避難者。毎年のことだが、日本の何処かで何回か避難騒ぎが報道される。字余りの

川柳だが、警報発令と体育館に間を空けて読めばすんなりと口に馴染む。

一つ屋根軽いドラマをくり返す

宮本 かりん

独り暮らしにも一人のドラマがあるが、親子兄弟の生活には様々のお話がある。いさかいいもあれば歓談もあり、話題は尽きることがない、明るい家族の姿が浮かんでくる。美しい花ですみんな素顔です

時 広 一路

あるがままに詠まれていて、気取りも銜いも無く素直な表現に賛。素顔の大切さを改めて教えられた。お化粧でも誤魔化しの効かない内面からの輝き、美しく老いるためにも善根を積まねばならぬ。素顔の花に負けないように。これから野に山に花が咲き乱れる。忘れなければわたしの部屋が濡れてくる

茂理 高代

部屋が濡れるほどの念、何時までも悲しいでいては解決の出来ない、忘れられない一大事だが、その場に座つたままでは部屋ばかりでなく着物までびしょ濡れになってしまう。他人がどうこう出来ることでは無いが、部屋には楽しい思い出が沢山あるはずだ。嬉しかったこと、楽しかったことを部屋に並べて濡れた部屋を早く乾かさねばならぬ。

水煙抄

河内天笑選

綾部市 藤田芳郎

朝の水が言わんことではないという
裸婦像の前で他意などありませぬ
空いているレジに並べば無愛想

五体寂滅五臓は神の手に渡る
五体満足ドナーカードへ踏み切れぬ

羽曳野市 川口信子

生と死へ末期医療のむつかしさ
ためるくせ私も押入れも太る
石ひとつ投げて答を待っている

えこひいきごめんさいよ草と花
よく笑う男に油断してしまふ

豊中市 みきわきみ

ひとはひと私は信号を守る
情報の渦を横目に傘寿なり
のど飴が手離せぬのも年かいな

耳遠く喧嘩に近い老い二人
また空港 狭い日本にいくつ要る

岸和田市 徳庄美智子

流しびなどれも悲しい顔に見え
七十の口紅赤すぎないかしら
団子よりもっと嬉しい花見酒

甘えなかつた女が今日を築いてる
春が来た私の目に来た鼻に来た

和歌山県 中村君枝

寺参り兼ねて花月を観て帰る
正面の敵より隅の矢が恐れ
腹割って見せた事ないミニトマト

愚痴捨てに行つて勇気をくれた海
よく笑う友は長寿の血筋かも

兵庫県 安達厚

十年目森はますます深くなる
評論家ばかりでビール空けている
何かあるみんなが優し過ぎるから

見え張った顔がみにくささらけ出す
初恋を温めたまま七十路

尼崎市 清水 久美子

酸欠の脳を洗いに寄席へ行く
寅さんに憧れ当てのない鈍行
ゴミの日に必ず烏やつて来る
お迎えの計算してる父と母
いい汗をかくいい風が吹いて来る

八尾市 與田 明

結論を焦るとろくなことはない
ひっそりと妬心を秘めている敗者
満開の桜が似合う甲子園
妻の言う事が正しいから憎い
花粉症朝からの風気にかかる

鳥取市 有沢 せつ子

イヤリングした福耳も悩み持ち
いい話心の隅に書き留める
また逢えるさよならだからざらり言う
煮る時の気分で豆が柔らかい
神様は欲の無い人好きらしい

兵庫県 倉垣 恵美

モーニングサービス窓辺で小鳥鳴く
ふる里の池でメダカに逢いました
笑えないこと二つ三つ抱いて過ぎ
森深く別のわたしを置いてくる
知らず知らず古い教えを身につけて

愛媛県 中居 善信

心の底をひとりの人に見せている
明日食う米があるから笑ってる
良い人と言われたいから笑ってる
百姓の知恵をカラスに試される
葱の花一所懸命咲いている

横浜市 三村 八重子

梅を見た余韻女はもんじゃ焼
太陽を布団に詰めたい寝息
入学式ですのと親の頭が高い
国訛り添えて物産展は売り
険悪な空気を払うほらを吹く

横浜市 川島 良子

ドナーカード一枚家族呼び集め
ガツンと言えないボクは日本人
死亡欄キミの出世を知りました
レンタカー花見温泉墓参り
お綺麗で年相応に老けている

横浜市 北沢 街湖

追い越して赤信号で追いつかれ
サービスのティッシュ鼻炎の手がのびる
美人にはレディーファーストしたくなり
ルビ付けてほしい子供の名が流行り
赴任地に慣れ挨拶も訛り出す

大阪市 中 澤 伽 羅

このごろは重い約束できません
五年前やっぱり五歳若う写り
皺あつて何の不思議か紅を引く
好かんけど取り替えきかぬ顔を剃る
熱下がるすぐゴチャゴチャと言いとなり

大阪市 安 達 はじめ

親しさを保ちながらも車間距離
ふる里の駅で別れた人を恋う
赴任地へ妻が電話で指図する
とじぶたの合わないままに共白髪
しきたりが父の背中でききている

大阪市 中 村 叡 子

やつとこさ一浪の孫弾む春
親の恩子に返すとかうまいこと
あれこれと首つつこんで日々せわし
バスツアー夫厭いや連れに成り
捨て置いた洋蘭けなげ花芽つけ

大阪市 大 川 道 子

大気汚染匂のかおりも狂い出す
果樹園で値踏みしているレジャー客
ふる里の訛りなつかし通う店
肩すぼめ春を待ってたお水取り
平やけど社長に似てる太鼓腹

大阪市 三 浦 千 津 子

啓蟄や小川もきらり水走る
酔うている口不躑をさらけ出し
一笑に付し痛むもの胸にあり
失敗をバネにするほど若くない
親のエゴ子のエゴ進む曲り角

尼崎市 田 辺 鹿 太

栄転のたびに遠のく子との距離
毒のあるアンタ毒消しや要らんかね
春愁や自分の壁が破れない
子や孫の世紀へ残すごみの山
最悪のシナリオ妻が風邪で寝る

大阪市 平 井 露 芳

こも脱いで松も迎えた春一番
銀行も必死小とも仲良うし
バイアグラあんた呑んだら死にまつせ
学校も閉鎖の危機にあるメダカ
老人力ボランティアでもやりまっか

大阪市 立 蔵 信 子

忙しいときに散歩をしたくなる
すなおな歌にすぐに伴奏したくなる
連休に予定がないと落着かぬ
首筋の太い男に父がいる
揃わない顔を待つてるピヤホール

大阪市 一本 勇 太

男とはみんな可愛い修羅の果て
表情を崩せばきつと負けになる
背伸びした疲れがどつと来る夕日
春の絵にそのまま溶けたカタツムリ
遍歴に同じタイプの人を恋う

大阪市 尾 崎 黄 紅

値千金ありがとうすみません
もうそんな歳でしたのか女優逝く
姉恨むいもうと憎む恋ひとつ
宿題の母の答えが違つてた
校長自殺 日の丸と君が代に

堺市 村 上 靖 雄

定年の土日土日に攻められる
不景気で街のネオンも伏し目がち
年金も神輿も担ぐ若手減り
転勤のたびに覚えた土地訛り
耳掃除して良い話聞きに行く

堺市 矢 倉 五 月

役割はピエロだったと気づいた夜
家計には響かぬ程に買う馬券
雑踏に紛れ孤独が心地良い
面構えよしよし俺に似てきたぞ
こんな時亡母なら何と言うだろう

堺市 和 田 つづや

春風の誘いにのつた半ズボン
掌で包む梅昆布茶の温もりを
井の中で空見るような思いつき
夕焼にかざせば僕の血も朱い
西方の旅で見送りお断わり

堺市 見 本 ちや子

負け惜しみあつけらかんの顔を見せ
娘の安産ただ手を合せ祈るのみ
心の隅に夢見る乙女まだ抱き
良妻の日も悪妻の日もあつた愛
挫けると愛のお叱りくれる友

岸和田市 村 垣 鹿太郎

新調の背広が照れる新社員
本心を一つ吐きたいのど仏
再会の想い出話歳感じ
負け犬が決つたセリフ吠えている
ランドセルギッシリ詰る親の夢

岸和田市 木 村 正 剛

肩書がとれて幼き友の顔
年寄りの冷や水がまた一つ増え
お茶よりもまだ酒の友恋しがる
ぼちぼちと本音の出だす梯子酒
この先はタライ回しが見えている

岸和田市 宮野 みつ江

ひとり旅供は駆弁ワンカッパ
亡夫へと流れつきたい舟に乗る
番犬と見込んだ犬の優しすぎ
いのちとも友とも思う介助犬
寝ましたかこちらは月がきれいです

河内長野市 大西 文次

後で酒出ると解って湧く勇氣
まぐれ当りにしては奥さん美人過ぎ
ばあちゃん風邪に出番の置き薬
もう長くないか大事にされ過ぎる
県警が県庁捜査するニュース

河内長野市 印藤 智子

外出は決まって医者と鍼灸院
入浴も声かけ合って老いの坂
胃薬を飲んではおいしい物を食べ
インフルエンザ老人力で堪えている
外国のビデオで旅行したつもり

河内長野市 妹背 尽呂久

次の手に思案巡らす総会屋
金婚式やつと目的地に着いた
ごますりは所詮上司のロボットだ
トンネルの奥照らす耳鼻咽喉科
へそくりを太らすことにご熱中

羽曳野市 西村 りつえ

腹立ちを優しい笑みではぐらかす
磨かれて金にも勝る石のつや
枯れてゆく脳細胞に活を入れ
ブランドのロゴマーク背にコマーシャル
新世紀へ風も唸りを秘めて待ち

羽曳野市 森田 四三郎

銀行援助 介護援助はしませんと
生き残りゲームのようなOB会
さりげないお洒落も妻に苦笑され
発車ベル猫舌うどん食べ残し
譲り合う心何時かは実を結ぶ

富田林市 山原 昭水

ハーモニカ亡父の匂いが残ってる
バーゲンの服で呑み代浮かしてる
演歌うたい夫婦仲良く竹を踏む
振興券家族みんなで寿司を食う
元旦の計はぼつぼつ枯れかかり

富田林市 中井 アキ

気まぐれに入った店の旨い蕎麦
再会に七彩の風連れてゆく
橋のない川を渡った白昼夢
絵手紙にひと足早い桜咲く
味噌汁と目刺しで足りる母が来る

藤井寺市 太田 扶美代

ブレゼント焼け棒杭に火がついた
飾らない心を形見にしておこう

忘れる努力寝返りばかりしています
後めたい日です握手は避けておく

カニツアー本場の雪見て帰る

藤井寺市 岸 本 寿 代

意識ない夫に頼ずりああ無情

お人好しお馬鹿さんねと言われても

好き好きは何度聞いても心地よい

なみなみと注いだコップの別れ酒

慄然と夫なき余生考える

松原市 和 気 慶 一

すばるから宇宙のドラマ垣間見る

ふれ太鼓響き浪花に春がくる

はとバスの江戸っ子弁に酔わされる

ダイオキシシっかり埋まる副都心

春雨も濡れれば恐い酸性雨

八尾市 山 本 宏

たくさんの情けもらって生かさされる

ドック入り結果がこわい不摂生

さわぐ波も人生のあや苦しめない

若ごぼう今年も春を先取りす

鍋のふた幸せの湯気やかましい

和泉市 横 山 捷 也

同窓会また年金の話題なり
生あくび嫁が話題に入れない
表札はそのまま父の三回忌

しなやかに指が舞うてる手話を聞く
転職のたびに初心に戻ってる

勝った日も日記反省こめて書く

大阪府 澤 田 和 重

馬鹿になれと自分を叱る二度の職

げんの良いポスト誰にも教えない

仕事の鬼の父を憎んだことがある

相談に乗って責任持たされる

吹田市 三 浦 憩

三兄弟にお礼言いたいだんご店

お抹茶が欲しいな梅の花を見る

甘いキス何度もされる缶ジュース

春風のいたずらに泣く花粉症

和やかな春の光にいる油断

高槻市 乙 倉 武 史

無党派を頼り強気の立候補

失策をすれば大臣名を知られ

人生の裏技を説く辞書がない

趣味自慢地区文化展花ざかり

無理強いはいしない何時もの事ながら

箕面市 釣部 高希

連弾に夢追うピアノ古稀の坂
年金で可愛い恋もするつもり
人恋しく独りコーヒー飲んでる
ファンですと言うているのも恋ごころ
乳房切除忘れて恋をしてみたい

和歌山市 水田 秀男

チャレンジ精神消えたら僕は死んでいる
大切な鍵を持たせてくれぬ妻
物忘れ歳のせいだと思ふまい
自然保護県が率先して壊し
血税をドブに捨てててる金バツジ

和歌山市 福重 美子

背伸びなどしない暮して軽い足
半世紀まだまだ続け夫婦箸
仏式葬神様一寸目隠しを
公害を忘れさせてる青い空
タバコ片手ハンドル握る娘を呪む

和歌山市 上地 忍

野菜高漬物石が欠伸する
良寛が現われそうな梅が咲き
お早うが言えておいしいお味噌汁
よく笑う嫁が長寿の薬風呂
シュラシユシユシユパスで金毘羅詣でする

和歌山市 森口 美羽

背伸びして冷たい風を受けている
前向きの姿勢へきつい風に会い
触れ合えば心の鈴が鳴りやまぬ
嘘のない暮らしふくらごはんだけ
斬られてもよいまっすぐに生きている

和歌山市 土屋 起世子

停年は医者が決めます小商い
平凡に歩いた靴の紐結ぶ
胸の奥メダカが今も泳いでる
春の風明日は素直になるつもり
土筆ん坊疲れた帽子取り替える

和歌山県 杉山 精子

どの席も隅を選んで福逃がす
正道へ無冠の友と歩が揃う
結び目をひとつ解いて良いお酒
柔らかい手よ愛されている掌だ
沈んでも空の青さを信じよう

和歌山県 村中 悦男

バーゲンの元値疑う値引率
訃報欄の齢を見ながら薬飲む
流感に欲得捨てる一週間
肉よりも野菜うまいと言う二人
建前のいらぬ妻の酌を受け

和歌山県 坂東和代

二人三脚時どき紐を締め直す
古希の娘を安じてくれる母がいる
お茶入れてくれる夫に逆らえぬ
虎の子が大きくなれぬこの金利
旅ざらい家のトイレが気に入って

兵庫県 浦野雄一

(植村雄太郎改め)

チャンバラをする郵便局と宅配と
ダイオキシンのいう化物が出る世相
まんが読む子はゲームより素直
宿題と部活ミネラル瓶の数
木簡に何百年の時差がホケ

兵庫県 円増純子

思いやる心が埋めた深い溝
昭和一桁古いつもりはないけれど
節くれることも厭わぬ土いじり
忠告へお礼を述べる齢となる
人間不信などと弱気をはくでない

兵庫県 高見末野

とぼけ方上手になったお留守番
彼岸待ち世に出た団子三兄弟
ぬるま湯の中で唄って上機嫌
赤福の語る歴史も買ってきて
味噌汁の温さ嬉しいもどり寒

兵庫県 谷田多美子

生き下手を悔やみながらの終い風呂
無駄遣いせよと俄に言われても
白梅を見上げながらの姉の試歩
招き猫バンザイしてる不況風
念入りに薬数えて朝の水

兵庫県 山本泰子

わがままもここまでにしよう付けが来る
コーヒーのおいしい時は良い仲間
しばらくは一人で居たい今日の月
朝風呂ではじまる旅の第二日
友人に敬語使って距離が出来

伊丹市 檜谷郁子

古代には温みも持った富本銭
花言葉信じ明日の夢をみる
椰子の実も密航者をも運ぶ波
ほどほどに近いがいいと嫁姑
目覚めても夢の続きか亡夫の声

三田市 北野哲男

おじいさん言われ始めは他人ごと
ホーウホーウと明石大橋五分だけ
旨そうな牛が居るとは怖いこと
煽てられ螺旋階段昇って来
大阪城ウソカの仲間花を見に

宝塚市 飯 西 ミサヲ

京都市 勝 山 美千代

カット失敗伸びろ伸びろと髪洗う
出して入れ提げても見てる旅仕度
ハミングで信号無視の子を案じ
八十路とて暦の丸ははでやかに
誤解とく手紙一通夜が白み

尼崎市 内 田 美也子

踏入れば人恋しさの椿道
散歩道花の笑顔にふれながら
子の所帯案じる母の痩せ財布
手作りのくぎ煮によせた母便り
夜空染め春を呼び込む二月堂

尼崎市 河 津 正 治

新雪に春の陽を待つ福寿草
お祝の言葉を探す指名打者
祝いごとなのに涙が先に出る
千円の時計狂わず二十四時
うすれゆく過去は幸せだけ残り

西宮市 長谷川 淳

今もなお勇氣と照れが同居する
評論家ばかりで不況救われず
人生の道違えたか隠し芸
自動改札キンコンと鳴る恥ずかしさ
価値のないものを蒐めて悦に入る

古着でも亡母の愛沁み捨てられぬ
痴呆でも昔ばなしはいきいきと
若菜らの春の声する散歩道
春ですとうおの目までが騒ぎだし
出不精にお誘い多く風ゆるむ

京都市 本 莊 福 子

三寒四温 三寒の日ににやならず
下らない男が天下取りに来る
子供から満点もろた事がない
私の子ですが私のものでない
脚長くなって息子は宇宙人

奈良県 出 井 澄 子

あなたにはかないませんと値切らせる
長生きをしようと似顔絵孫がくれ
盆栽のじまんを聞かすカモが来る
褒章を祝うパーティー奈良ホテル
パーティーの中で竹馬の友と遇う

橿原市 西 本 保 夫

妻にある勇氣をわたしだけたたえ
本当にある体験の村八分
書きとめる実家どん底貧乏記
杖ついて月当番は雨の日も
空想は楽し次次女替え

三重県 佐々木 森 哉

六畳の海がしだいに荒れる酒
致死量を越さずに呑んで夢中
熟爛でほろほろほろと過去へゆく
昨日風今日は時化てる僕の海
雪が舞う托鉢僧の素足にも

鳥取県 西 垣 美知子

春うらら嘘のない顔陽にさらす
平和な世しっかり掴む手がほしい
お天気を買って行きたい旅支度
怒らずにせかさず論す父のむち
一杯の晩酌喜寿の灯を守る

鳥取県 高 尾 京

うまそうにいちごを食べて逝き給う
温泉での退院祝夢となり
好物を偲び供える春の朝
汝が妻に与えし気力失せる日も
若き日の夫に似たる子と生きる

鳥取市 谷 岡 清 子

から元気続けば良いと発破かけ
食卓に一人で座るすきま風
好好爺昔は怖い人でした
耳遠き夫いるだけで良しとする
さっぱりと忘れ八起きの陽をあおぐ

鳥取市 録 沢 風 花

SLの汽笛が胸の底にある
風の子の声が月より遠くなる
初恋の思い出小さく折りたたむ
正直な老いを鏡は知っている
残照の道遠回りしてゆこう

鳥取県 平 井 栄 翁

八十の坂を越させた妻の杖
リストラがスリッパさせた出世坂
妻病んで隠れて読んだ医学本
網棚の漫画の本が旅をする
木枯しが鳴いて買わせた鍋料理

鳥取市 山 本 益 子

不況でも花見の宴は太っ腹
目札を交わして名前浮かばない
遣伝子の組立て野菜まっぴらだ
世紀末の意義ある花見美酒を酌む
ライバルの名前は永久に忘れない

鳥取市 森 本 和 子

ユーターンの子に父は黙って酒を注ぐ
休耕田春には春の草息吹く
匂に熱中夕げの鍋が怒り出す
ゴザのご馳走花びら添えて春うらら
オアシスを求め茶髪のアス揺れ

鳥取市 中村金祥

冷や汗をかきっぱなしの地球です
行革へ機智のパンチが出てこない
核実験地球をつぶすテストです
単身赴任ひと雨毎に慣れてくる
ガン告知夢であつたが気にかかる

鳥取市 夏目健一

桜さくら国歌にすれば愛される
もの言うと損するような人がいる
敵わない人には意地が突っかかる
囲まれていても好意が見当たらぬ
くよくよするななるよさうにしかならぬ

米子市 門脇晶子

風止んで無口になった風ぐるま
雨だれのタクトわたしが振っている
私のメガネいくら拭いても老眼だ
終着駅で善女の面になりきろう
約束をした小指には夢がある

米子市 足立由美子

あちこちに三日坊主の跡がある
目覚しを二ツ並べてよく眠る
ジャンプする気持捨てずにいるカバン
太陽に昨日の殻を干しておく
はね返す根性竹に学ばねば

米子市 猪森スミエ

極楽凶白紙に書こう思いいきり
もやもやを麗らかな陽に干している
行楽のプランが跨ぐ瀬戸の海
鳴き砂はきつと誰かと喋りたい
南無大師 行き交う杖は皆仏

倉吉市 牧野芳光

原点に戻れば土の温かさ
雑踏の中にゆらりと月が出る
早咲きの桜とつても誇らしく
桜咲くまでは静かな桜土手
こんなにも寒い日に死ぬ何の罪

岡山市 清水金太郎

執刀医家では魚がさばけるの
振興券 孫も権利を主張する
墓参り車で行ける場所さがす
妻に感謝 妻に感謝の日がつづく
長かった短かったと想う過去

岡山県 国米きくゑ

桜まつり城の石垣風の私語
自動扉貧富の差なく開いてくれ
招かれた茶席茶筌にみる乱れ
綻びる心縫いぬい生きている
リストラに男の城がきしみだす

露の臺疎遠の人が顔を見せ

新しい畳の上で深呼吸

嫌なこと組板に乗せみじん切り

球根の約束春を忘れない

目で合図酒の支度の事だろう

島根県 福岡 博利

シベリヤで死にそこなって生きてます

焦らずに待てども果報やってこず

肝心な用事忘れた長電話

でこぼこの路ゆっくりと古い二人

雪が降る父母の想い出木炭の窯

島根県 松本 聖子

逢いたい夢にも出ない亡夫です(夫逝く2句)

彼岸桜ひとりて賞でる悲しさよ

春一番良いお報せを下さいな

今朝も晴れポランティアでもしてみたい

嫌なポケベルだけど時には便利です

島根県 菅田 かつ子

古箏笛開ければ亡母の香が匂う

ひよっこりと頭もたげた土筆んぼ

おみやげの横で財布も旅疲れ

触れられてびくともしない現代娘

だんご三兄弟がすきひとりっ子

出雲市 岡 あきら

しゃあしゃあ時が解決すると言う

争いを忘れふたりのウォーキング

旅立ちを笑顔で送り過疎進む

テポドンでないから我慢する黄砂

気象予報粹なおまけの花だより

出雲市 川島 和歌子

ティータイム家族を繋ぐ日曜日

曇降る女の急ぐ日暮れ道

啓蟄の鼓動を覚え水ぬるむ

日本中カード氾濫流行風邪

掛け声も口ぐせになり苦笑する

宇部市 高山 清子

澄んだ目で詫びられ怒り消えていき

強がりも言っても孤独ごまかせず

一周忌悪夢のように逝った嫁

片言で口答えする三歳児

呆け進む友の後ろに我を見る

北九州市 岡田 幸生

一病を抱く晩年のテリトリ

母さんにもんべの恋の物語

さよならの出来ぬ昭和に指を折る

善処するなどと役所のそれっ切り

香水の騙し上手にほだされる

福岡県 岩崎和女

道問えば曲り角まである情け
傷口に触れるナースの温かさ
団体の一人が待たすバス時間
想い出を辿れば語り出す故郷
一杯の酒でパワーが出る艶歌

今治市 加川はく文

止り木で骨を抜かれてみたくなる
青春に悔いなしと大嘘をつく
私の中で消息絶った人
私の血を凍らせた電話口
向い風背骨一本あれば足る

今治市 渡邊伊津志

教わったものでないから忘れない
待つ礼儀とうに忘れている日本
どうしても小舟はもろに波を受け
雑魚の性小回りばかりしてしま
い
ほどほどの濁りへ雑魚が寄って来る

今治市 村上久美子

へびも蛙も死んだふりして待った春
ひと休みせよと地藏が呼び止める
赤い糸切れて前よりな其他人
野次馬の耳がアンテナ張って待つ
満腹の二分が寿命を脅かす

今治市 野村清美

電話する子に元氣だと言っておく
セールの猫なで声が気に入らぬ
昼寝して夜の長さを持って余す
仮住居金魚を放す洗面器
過疎へ住みすくす育つ母子家庭

今治市 中村好恵

花柄のスカートひとあし早い春
心の中もおぼろ月夜の卵酒
信じられぬ日のコーヒの苦いこと
熱が出るような話で不眠症
春雨へ律儀に伸びる犬ふぐり

今治市 塩路よしみ

愚痴言わぬ紙人形のいとしい目
CTがわたしの脳をなで切りに
人ごとのようにいつしか古希を越え
洗濯機のブザーわたしを呼びつける
幸せ芝居演じて今日を突っ走る

松山市 山之内八重美

信頼を受けて人徳誇らしい
港町潮の香りに沸く慕情
久びさの大漁に港活気づく
七十五日耐えて優しい風に逢う
早春の香り届ける露のとう

愛媛県 安野 案山子

お遍路の鈴が四国を春にする
新緑に元気を貰う山登り

泣き言を言うなど僕の影法師

そうつと乗る体重計のタイエツト

腹べこのカラスが狙うゴミ捨て場

香川県 辻 上 よしみ

ゆっくりと夢ふくります古いの春

知らぬ間に身についている黙秘権

出しゃばれば話の種にすぐされる

余所ゆきの服で鏡にVサイン

後悔を承知で渡る橋もある

香川県 向山 治 延

旅にさそわれマスク持参の花粉症

論吉さん不況のせいかしんどそう

茶目な娘も今日は澄まして花茶会

三世代生きて八十路の道険し

老い二人共に杖とも柱とも

香川県 原 賢

定年後義理チョコのないバレンタイン

田舎味作る皺の手老母ゆずり

吉日の退院千羽鶴もつれ

政争の振興券に矛盾見る

貸しビルの空洞進む不況風

鳴門市 八木 芳 水

天下取るようにどっかと始発駅
盃洗に喜怒哀楽の滓が浮き

人情をこぼして歩く隣組

カタカナ語大手を振って行く日本

たっぷりのおはぎ夢見る糖尿氣

高知県 桑 名 孝 雄

三分でうちの子算は可決する

テポドンは来る筈ないとのたまわく

隣から見れば日本は丸裸

七難八苦まだまだ増える皺の数

ごゆっくりしてネとママは席を立ち

横浜市 平 達 也

邪魔だけど居なきや寂しくさせる人

やつときたチャンス夢かと語にならず

ついに来たおしどり夫婦のサバイバル

無理するな少し頑張れりハビリー

病床で始めて気付く家族愛

横浜市 福 島 かつ子

日やけ止め塗って小春の街に出る

都合など聞かずに孫を置いて行き

飽食になれて体験古代食

有りすぎる余白がなぜか焦らせる

アイドルの名前老母から教えられ

横浜市 生坂 サト子

日焼止め塗り重ねても無駄になり

落日にほほ染められてランニング

残酷とグリム童話に難がつき

和菓子店季節に合わせ腕を見せ

話題呼ぶ食の健康溢れ出す

横浜市 近藤 道子

言いたいと言えない愚痴が溜まって

ほめられて登った木には刺があり

風吹いて忘れ上手な齢となる

好奇心紙とエンピツ離せない

腕立て伏せの夫妊娠八ヶ月

横浜市 山梨 雅子

病窓の景観褒める見舞客

リハビリにマジックの趣味役に立ち

お見舞いを断る言葉難しい

いそがしくなりそう試歩の杖用意

出前寿司届いたとこへ一人増え

横浜市 秋元 和可

新しい名刺を持った紺スーツ

春が来て忙しくなるのし袋

幼子へ特効薬はチチンパイ

菜の花を泳いで蝶を追う童

爪弾きが聞えてきそう伊豆の宿

横浜市 田中 笑子

レトルトをメニューに加え妻も古い

受験期が終わってもとの子に戻る

計算に入れてなかった入院費

句読点入れぬ話に時が経つ

貶すより褒めておくのも処世術

横浜市 山下 省子

意のままになって自慢の妻にされ

定年後家事半半は駄目かなあ

核心に触れると夫石になる

いただきます ごちそうさまで読み終る

三回も食事のヒトは不便だね

横浜市 巖田 かず枝

幸せを呼ぶと黄色を身につける

ストーブも熱く感じて春の音

携帯の向こうで妻が指令する

合格と聞いてスキップしてしまふ

スニーカー少し遠出がしたくなる

横浜市 豊田 羊子

乳癌の検査で乳を揉まれてる

保健所が転ばぬ先の杖を貸し

尿コップ互いに持って立ち話

自然死を望む 病院大きらい

串だんご意地で四個のままにいる

横浜市 金森徳三

東京都 井上つよし

関白もいま厨房で米を研ぎ

一割の還元セーブル無駄も買ひ

平成だ箸の持ち方気にすまい

すぐかかるインターネット欲の虫

胃が痛む仕事の夢がまだ続き

横浜市 長島亜希子

富士見える日の立ち話長くなる

春色にしても薄着はまだ出来ぬ

忘れてた歳腰痛で思い出す

染めようかどうか貴方に聞いてから

足ることを教える「五体不満足」

横浜市 伊藤ふみ

古い二人いぬふぐり咲く散歩道

新調の制服の下弾けそう

閉店へ残りの福を買いに行く

風船に花の種入れ飛ばしてみ

春一番思いきり吹け脚線美

川崎市 和泉あかり
(見早子改め)

灯を消すと厨の浅蜷はなしだす

自転車わたしを風が抜いていく

橋渡るたびに男が替つてる

流されぬように心へ杭を打つ
春一番洗濯物をもつれさす

一病を抱いて踏ん張る徳儀
春一番此方へ来るぞ救急車

マフラーとマスクが歌う早春賦

涙と汗を煎じた色の老母の肌

職終えて六十路の重み噛みしめる

静岡市 大村正雄

どの線で妥協するのか知恵くらべ

一言の裏汲んでやる思い遣り

捻子巻いてまだ動いてる喜寿時計

母の日の予算組んでる里の母

ハミングで新緑の街歩いてる

静岡市 中西雅

老人席マンガ読んでる長い足

冬鳥の渚 餌をまく温い人

辞書にない言葉がかっぱ町を切る

普段着の楚々と目立って七五三

湿原を永久に守ろう鶴の舞

逆風に男炎となる仁王立ち

ラマタンの折り通じぬペンタゴン

檜山へ行く地図子から渡される

宇宙から見れば国境線はない

ぼろぼろの辞書に馴染んだ老いの趣味

札幌市 三浦強一

秋田県 湊 修水
置き薬インフルエンザにや菌がたたず
卒業を失業と呼ぶ四月バカ
合格の風を待つてる絵馬の数
安定所に薬一本が見つからず

大阪市 小泉 ひさ乃

遠い日の家族にあつた男の絵
肩書きが消えてやさしい目に戻る
義理チョコの数で上司も上機嫌
突然死はかなさを知る通夜の席

大阪市 榎本 舞夢

診断の結果廊下で覚悟決め
物忘れ近頃手帳離せない
欲ばって上手に生きるおばあちゃん
約束は破られている待っている

大阪市 松岡 千恵子

目はかがみ心の綾を写し出す
神童と親の欲目が邪魔をする
かわいーらしい言葉にむかつくー
買い控えデパートの袋見かけない

河内長野市 木太久 正一

春一番うれししい姪の披露宴
この冬も無事に過して初音待つ
観光コース外れたところにある旅情
オーブン戦 球音運ぶ南風

河内長野市 水谷 正子
クラス会返事出さぬと殺される
善人を止めたら勇気わいて来た
空っぽの財布が痛みかみしめる
テンションを上げて開幕プロ野球

河内長野市 杉谷 カズエ

左箸特技に見えてしょうがない
気にしてる事ずばずばと背が丸い
飼い主を知らない猫で追払う
返事ない人にも言葉かけている

河内長野市 柏本 靖子

言い訳は聞く耳持たぬ父である
姿見が背中伸ばせと言うている
みちのくで温い情けに触れてくる
亡父に似た入道雲よ消えないで

羽曳野市 安芸田 泰子

一人居に春の日脚が長過ぎる
聞こえないふりで即答避けている
団子つくる当てはないのに蓬摘む
片言が痛いところを突いてくる

羽曳野市 川田 晋

宴会を無芸で凌ぐのも特技
国民は金持 国は大赤字
汗を拭く振りして隠す涙顔
リストラで残れなかつたかくし芸

羽曳野市 山本 たけし
春の香を胡麻和えにして夕の膳

花見頃心して吹け春嵐

新しいスーツに名刺孫菓立つ

眼帯の鼻先に嗅ぐ沈丁花

岸和田市 亀井 皎月

大正と昭和の絆時に揺れ(夫唱婦隨)

故里へ行けば古希など青二歳

落日の日の準備する七十路坂

地球よりあの世開発すればよい

岸和田市 不破 仁緑

野次馬は府知事選より都知事選

釈明をする度愛が逃げてゆく

純真な孫の眼を見て本音吐く

退職をしてから余計忙しい

八尾市 高橋 明子

趣味ですと人には軽く言うけれど

野良仕事 雨は休日寺詣り

肥満体一夜でなった身ではなし

飛び起きて見ても職場のない悲哀

八尾市 井尻 民子

戦いを多く語らぬ夫の老い

シクラメン色づき蕾空を指す

青竹の切り口白く春浅い

うぐいすの生のリズムの冴えわたり

高槻市 執行 稲子
甘党に我慢のサイン出す数値

ブライドを傷つけられて修羅となる

冷えびえにウルマークの温い文字

親孝行にそろそろ見合でも言う

高槻市 左右田 泰雄

拍子木が心の鍵を締めに来る

カレンダーへブリクラシル貼るデイト

ブライドが眼鏡の奥でツンとする

着ぶくれの襟から風邪がしのびこむ

貝塚市 吉道 時子

あいまいな中間色も生きる知恵

税金の戻りで妻とフルコース

数日後痛み出て来る登山靴

一目惚れには理屈などありません

泉佐野市 稲葉 洋

夜が明けてまた自分史の一頁

一献の酒に浮いたり沈んだり

本心をおさえ一度は辞退する

春雷は父の一喝浴びたよう

堺市 梶本 哲平

ドンファンが男のメダルだったころ

東京の友また京を訪うという

失せものを探し一日損をして

気にかかる美人と視線合わせない

富田林市 大橋鐘造

ポケットの中で拳を凍らせる
有頂天壁の厚さをまだ知らず

捨てて来たはずの未練が糸をひく
譲られた席が頭痛の種になる

枚方市 大昇隆 広

いくじなしも恋の思い出青春譜
やり直しきかない過去へ誘う酒

官庁の闇の世界で保つ国
産声を自信の持てぬ世に迎え

箕面市 唐住 実

一升酒一合になる五十年

激動の年と毎年しめくくる
どっちもが手頃できめた相手とか

へそくりを財布に移す妻の留守

寝屋川市 井上 すみれ

鈍なのがなおドンになり生きている

眠らしてもらえぬラジオ深夜便
梅酒大好き注いでもらってお夕食

たまの和服に雨風さんのいじわるさ

和歌山市 吉村 さち子

病んで見て思う自由に動く四肢

母病んで一人の膳に音がない

あの日から愚痴を封印した看護
プラトニックラブなら楽に付き合える

和歌山市 和田 美寿子

生きてきたあかしが顔のしわに出る
カラオケで恋を拾った事もある

出る杭も打たれる度に強くなる
幸せな人だけ集うクラス会

和歌山市 岡本 八重子

川柳を勧めてくれた人が逝き
菜の花の蕾つめておひたしに

雛まつり桃もほどよく咲きました
雛流し落ち行く平家にさも似たり(加太深島神社)

尼崎市 軸丸 勝 巳

忘れては嫌よと街に雪が舞う

犯人は寒波と睨む葬二つ
中吊りに不況も乗ってくる電車

盆栽師 松の都合は聞かず曲げ

尼崎市 森 安 夢之助

チャンス逃した言訳は派手にする

忘れものちよこんと棚に乗っている
子離れをした気軽さによく喋る

不機嫌の母さん飯に芯がある

伊丹市 延寿庵 野 鶴

参道に神籤の白い花が咲き

Eメール写真と届く里の梅

フロの栓抜いて紅拭く母の指
よかったね占いどおり娘は嫁ぎ

血圧の乱れに冬が居座りぬ

兵庫県 西山 八重子

鬼一匹飼いならしている胸の内

言いそびれ聴きそびれする冬木立

舞い落ちるまでの命か雪の性

兵庫県 徳平 穂子

還暦を過ぎてても嬉しい春の宵

肩こりを押して今宵もセーター編む

雛祭り母を偲んでちらし寿司

アルバムに旅の仲間とVサイン

京都市 高島 啓子

命乞いしているような鯉の口

いのち生むいのちたくさんたべながら

初恋はなしイモ弁当のせいだ

価値観の違う男に叱られる

京都府 前上 英一

聞いて来た話と何処か違ってる

面倒な話水虫かゆくなる

ビル陰のお地藏さんの吐息聞く

景観を時代の波が呑みにくる

滋賀県 中 宗明

夫婦でも意見分れる子の躰け

嫁ぐ娘に別れる辛さひたかす

記念日を幾つも作る愛飲家

金賞のくじ引き当てておらが春

ガサガサといい物出そう紙袋

三重県 尾崎 勤

言い切った意見に名前ついている

汚れた手みんなに見せてから洗う

右ひだり電池入れ替え絞り出す

横浜市 保田 絹子

呆けてない証に挑む模様編み

一日を癒やす手のつば足のつば

血圧が医師の拳動にびびってる

人垣に驚いているドラクロワ

横浜市 小野 匂多留

銀行に一矢報いる牙を研ぐ

都知事選 右往左往のマスメディア

春うらら風ひとつだけ空に舞い

脈拍の数値を上げる女に会い

横浜市 福田 由美子

合格で家族みんなに春が来る

贅沢の尺度が違う三世代

義務教育終えこづかいがはね上がる

卒業のスーツへそくりはたかせる

横浜市 芦田 鈴美

雑踏で一人ぼっちを忘れてる

禁煙と書いて一服欲しくなり

寿し折が食卓に有る朝帰り

お揃いのパジャマで過す日曜日

横浜市 布山嘉信

古賀メロデー我が青春を占めている

自慢して見せるオートでないカメラ

リストラが資格取得に走らせる

焼魚頭の方を妻がくれ

東京都 清原悦子

豊かさに慣らされた子は個人主義

子育てを終えて政治に目を向けた

松坂の笑顔まわりもみな笑顔

パレットに私の色を載せている

八王子市 井上京一郎

湯の町の銀座に寒い風が抜け

モノクロを観る名画座のいいムード

指折って字画数えて漢和辞書

分からないなりにチラリと見るカルテ

日立市 加藤権悟

ふとこころが温いと風になる男

父さんのメモ家中においてある

車座の熱気に花もどつと酔い

定年のスタート妻と手をつなぐ

新潟県 高野不二

振興券ちよつぱり子供の機嫌とる

数えでは言いたくはない古稀祝い

面白いとは不謹慎都知事選

年金でぜいたくしないから元氣

鳥取市 西尾敬之介

外で派手家では敵しけち強い

咳払いしてから孫娘の部屋覗く

調子良い声に乗せられ終電車

女房の尻に敷かれて長い冬

鳥取市 田賀八千代

リストラの影におびえる足重い

甘い目で見ないで私狂いそう

脱皮などまっぴら今のままでいい

うらかな日差し心の刺を抜く

鳥取市 近藤秋星

雪はもう結構春よ早く来い

老梅も咲かねばならぬように咲き

しよせんおとこがおんなになかうはずがない

亡母ならば解ってくれるのに姉は

鳥取市 宮脇道子

愚かしい傷跡痛む朧月

冬の夜は過去がガタガタ追いかける

髪なでてやさしく諭す親心

初孫は跳ねただけでもよろこばれ

鳥取市 松本つね子

ジャイアント馬場のチャンチャコあの笑顔

補聴器が内緒の話ききたがり

三婆で先の不安をしゃべり合い

幸せが逃げて行くから愚痴言わぬ

鳥取県 加藤 公子
金婚を過ぎた指輪が鍍にぎる
トロトロとバイク走らせ春を吸う
デフォルメをされて人相親しまれ
春霞グランドゴルフ河川敷

米子市 小塩 智加恵

梅去って桃が咲いたら桜待つ
孫とゆく和洋折衷レストラン
狭庭に椿が十種咲き競う
陽のあたる廊下陣取るランの鉢

岡山県 土居 ひでの

ダイオキシンの侵されている世紀末
軸足が萎えてか元へ戻らない
記念樹の「さくら」の苗木夢を盛る
もつれ糸はぐしてからは春の味

倉吉市 大下 智子

合格は望めぬ父ののど自慢
不合格同士の二人仲がいい
本物と違うダイヤがよく光る
大胆に着飾って出る同級会

松江市 小川 注湖

かまくらに新たな絆生れかけ
孫の絵にピカソタッチの祖母の顔
直感が密入国を追いつめる
猪が人を追い出す過疎の村

出雲市 加藤 スズコ

風邪の床悪夢をさます寒雀
同じ姓多い門札島の路地
膨らむ芽草笛響く通学路
音もせず今夜はきつと積る雪

唐津市 岩崎 實

今回は君が主役と押し出され
無口でも伝わってくるものを持ち
予定通り仕事がすすむおはからい
職人の技をほれば見えて楽し

愛媛県 宮本 末子

白魚を御飯にまぶす一人膳
こまやかに湯気を逃さぬ落し蓋
山鳥の鳴き声あわき過疎の村
聞き役になってあくびをかみころす

愛媛県 黒田 茂代

六ヶ月欠かさず記す闘病記
洋式の暮らしを強いる娘の義足
退院の笑顔は永遠のものであれ
祈るのみ癌の呪縛の解けるまで

徳島県 安宅 美代子

子が継がぬ田畑大事に子に残す
夫婦茶碗替えても元の柄がいい
七転び息子の明日を信じよう
百点の内助を逃げる釣天狗

香川県 松村輝夫

雑草に汗かく土地は良く実る
夏が来て秋を先取る種を蒔く
野良の汗も机の汗も塩辛い

大阪市 伊藤博仁

野良猫よ食わして行けるの子五匹
阿弥陀はん高うおまつせ渡し賃
構図決め鳥を待つ人息を止め

大阪市 星野ひさ

ネクタイを外したそこは別天地
日本中ここ掘れクンクンダイオキシン
声を出し笑って泣いてひとり居る

大阪市 亀井円女

妥協にヨイシヨ昔も今も大嫌い
方便の嘘を夫に見透かされ
夢一つ見る度まああるくなる心

八尾市 平川幸枝

病歴とくすりを書いた手帳持ち
無造作にバラ一輪のコップ映え
あやとりの心は手から手へ通う

八尾市 鷺見章

リハビリの体操今朝はカルメンの曲
見なれても夕立の空更によし
晴れ渡る金剛を見て夕食を

青い空ちぎり絵に似た雲一つ

スカーフで女ごころを演出し

三連休したら干ばしになる農家

八尾市 田中トシエ

ゆっくりと思ひ出深い駅に着く

時がほしそして故郷を歩きたい

ぬいぐるみ介護にいいと持ってくる

枚方市 二宮紫鳳

不況とも仲良くなつて来た黒字

父ゆずりまめな男の友多し

ストップといわれてつる酒の量

高槻市 江原秀夫

住宅ローンもご破算にするハルマゲドン

念のためのCT医者を目をのぞく

百円シヨップ景気が戻る夢を乗せ

和歌山市 上地登美代

宇宙から見れば地球はまだ青い

指切りの軽さ孫から叱られる

鍵の向こうで人それぞれの灯を点す

姫路市 服部一典

万歩計町の匂いに季節感

万歩計車のための道になり

病妻の食べぬを見越し二合炊く

兵庫縣 仲井素水

貸し借りを言えば吾が子も水くさい

残り火と言うのか九十燃えつづけ

りハビリと思ひ炭焼き止められず

兵庫縣 広瀬房江

如雨露の水ザーザー掛けてウサ晴らす

地藏堂拜めば解けて来る痛み

わだかまり解けて美味しいレモンティー

尼崎市 河津正治

病名を伏せてわがまま聞いてやる

代筆の賀状も寂し里の母

答弁を選ぶヒナ壇の渋い顔

京都市 高村吉之助

耳遠くパントマイムがうまくなり

偶然の出逢いは神のいたずらか

母の読経すむまで朝めし待たされる

横浜市 岡田芳江

梅が咲きそして我が家に春がくる

春一番心の糸がゆれ動く

雨ぞらを口実にして誘いTEL

横浜市 鈴江純子

口笛を吹いて動悸が隠される

バンザイが発車のベルを待っている

定年が来てパスポート飛びまわる

倉敷市 家守政子

肝っ玉の母さん味で店守る

大蔵省がっちり握り姑元氣

永久の別れ三年経っても痛む胸

倉敷市 森本文子

五十年店と戦の走馬灯

親の思だんだん深く古希を生き

煩惱の種が芽吹いて来る不安

鳥取市 福島庸二

二人きり寒さ知らずのペアリフト

アルバムに記念の日々を手繰り寄せ

辛口の批評が味を引き締める

鳥取県 藤山弘子

厚着でもフアッションセンス忘れない

春霞シャッターチャンス待っている

読書から明日の道が見えて来る

出雲市 梶ミツエ

今の夢昔の夢もポケットに

タンス開け亡母の匂いをたしかめる

夫に言う自由な時間有難う

高知県 百田幸

台風禍今日の出発気が乗らず

お見舞に優しい嘘も添えました

働ける幸せ思っ一休み

鳥取県 竹 森 富久江
北の風やさしく吹いた宮参り
七変化できる命を生かしきる

大阪市 榎 本 日の出
平和主義騙されたまま目をつむり
にせの歯で本物の味確かめる

大阪市 中 井 正 秀
耳鳴りは電話の音を遠ざける
野良猫も信号分かるか左右見る

東大阪市 今 岡 貞 人
二度の職やっぱり尻尾振っている
鏡よ鏡人って恐いものです

泉佐野市 大 工 静 子
不意に臥す身のあわれさに吐息つく
病院も嬉しい事が一つ出来

和歌山市 武 本 碧
回覧板里の土産もついでくる
不況でも寒さ知らずのハングリ―

和歌山市 木 村 親 路
孫の手もいらぬこまめな妻がいる
更生の彼にうれしい鯉のぼり

兵庫県 北 川 とみ子
宝石のすべて裏目に出る離婚
精いっぱい生きてにらみの効くおんな

尼崎市 尾 宮 弘 治
厨からハミング妻はまだ若い
靴底のカイロに頼る二度の職

横浜市 荒 井 広 和
宗門も悩む戒名にある差別
ひと言に感謝する人怒る人

静岡市 増 田 扶 美
残り火を燃え立たせてるクラス会
歳月が私の余生追いかける

千葉県 大 川 晚 翠
何時の間につきはぎだらけの人生だ
お化粧に無垢なおんなの白い粉

安来市 原 煩 悩 児
老僧に障子を開けて見送られ
夢を追いつきに青汁飲んでる

鳥取市 山 宮 愛 恵
キッチンをかけ込み寺にして巣立ち
病床へ春盛りつけて口に入れ

鳥取県 橋 谷 静 江
振興券子供の夢が飛んでいる
春風が吹けば朝寝がしたくなる

松江市 松 浦 登志子
好きなだけ食べていいよとふかし芋
母のエゴわたしの内に種をまく

(榎谷仲子氏の句は51ページに掲載してあります)

麻生路郎の作品とその周辺

大空のこころ

(100)

橋 高 薫 風

仏蘭西俳諧の鑑賞と題して鈴木小寒郎氏のエッセーが二ヶ月に亘り掲載されている。

フランスで我國の俳諧精神を輸入して、三行詩に構成し相当なる流行を遂げた一時代があった事は、つい最近の事であり、俳諧の特殊研究をされた方にはすでに御承知の事である。との文章に始まり、日仏の文化交流の歴史の概要に触れ、多分後藤末雄氏訳のフランス俳諧詩が提示鑑賞されている。以下その作品に簡単な鑑賞文を添えて列記する。

片手で洗濯物を叩きながら

ほかの手で

額の上の髪をなであげる

これには、はつきりと川柳の感情が躍っている。髪的美しさをもてあましている。

塹壕 夜

敵の大軍を前にして

ふたりの兵士

(ジュール・スカン)

ふたりの兵士何を語るか。軽いペーソスを織り込んだ戦場の一点景として生かしてある。塹壕の夜はかかる悲壮美を包含して更ける。

蒲団の上の白い肉体は
綺麗な白い液点^{びじり}だった

あ、ほんとになつかしい (モーブラン)

俳諧という名にふさわしからぬ、いわば近代的新感覚派の俳句の表現で鮮明な感覚詩。

呼起せよ、暗示せよ、三行のうち

その冷然たる顔つきを

されどその下の苦しみを、余すなく

(ウォーカー)

この詩俳諧道の真理を喝破しているのは素晴らしい。「暗示せよ」という精神は根本的に

歐米の詩と趣を異にするものだから。

寝台の足もと、鏡付の箆筒

断頭台に昇る心地

我々二人の罪深い顔が映っている

(ヤコブ)

言いすぎの嫌い、点景の道具立が過ぎる。

性描写は仏文学の粋だが俳諧では失敗作だ。

こゝもかしこも

紙だらけ

おや、うちの人が帰ってた(アルトン)

ひよんな穿ちが見えるではないか。

あの恋文が

二つに畳まれて

宮のありかを探してる

(ルナル)

私達におなじみの「にんじん」のルナル

で、これはいかにもフランス自由詩という味。

シヤボン玉の中へは

庭は這入れません

まわりをぐる／＼廻っています

これも私達には、その作品に接する事のみ

い、なんでもござれで有名な詩人ジャン・コ

クトオの作。彼の東洋趣味は有名である。こ

れは堀口大学の訳。

堆積された白い岩

この雲の登山者

気球 (ジャコブ)

これは北川冬彦氏訳。マックス・ジャコブ

は立体派の感覚で自然を解体して見せた詩人。

次に少しジャン・コクトオの二行詩に触れ、

耳

私の耳は貝のから

海の響きをなつかしむ (堀口大学氏訳)

私はより俳句的と思ひ荻原井泉水のと比較

して見ると仲々興味がある、と記している。

「おい」と淋しい人

「おい」と淋しい山

(井泉水)

沙湖抄

八木千代選

書き出しは春を大事にする手紙
喜びを分けてわたしの分がない
掌をばつと開くとみなみ風
腹式呼吸大きなことを考える
夕やけの好きな私の逆上がり
お葬式ちよつと曇っていた方が
ドアノブに手を掛けてから迷い出し
大の男に何も無かった訳でない
病院の迷路名札をしつかりと
白が白に見えて悩みふつ切れる
引出しにある女医さんのウイスキー
面取りをせねば言葉が転がらぬ
白いとも黒とも言わぬのがひとり
ふきのとう赤子はわらうことをしる
見なくてもいいものを見た虫めがね
のりしろが乾くとパンが焦げている
丁度よいリズムで回る油ぎれ
捨ててしまったらただの夢ただの夢
鉄板で踊りましょうか不況風
今直さねば誤差は大きくなるばかり

松江市 川本 畔
米子市 木村富美子
寝屋川市 森 茜
和歌山市 古久保和子
同
和歌山市 桜井 千秀
和歌山市 川上 大輪
愛媛県 中居 善信
鳥取県 新家 完司
吹田市 山本希久子
松原市 小池しげお
和歌山市 川上 富湖
砂川市 大橋 政良
あきる野市 佐藤 季穎
富田林市 藤田 泰子
和歌山市 福井 桂香
西宮市 牧洲富喜子
藤井寺市 高田美代子
富田林市 池 森子
西宮市 奥田みつ子

正確に穴に入れると書いてある
宙返りして見失う現在地
縄電車見送りまでも独りなり
それからは月へ行つたね桃太郎
そして皆みんな流れ星になつた
土壇場でルビ振つたのは神だろ
水子墓 どこへ還つて行つたのか
念のため豆腐のこどもそいでおく
ふるさとの山が巨漢に見える朝
何んの芽か分らないから大事がり
継ぎ足した尻尾がひとり歩きする
シルバーパーワー食に拘り持っている
明日できることはあしたにまかせよう
おぼろ月 敵意はすでに消えている
丸暗記してやつと咲かせたサクラ
ひとりよがりな小癩な影を干しておく
歩いてる夢を見ている石である
先端治療 望む人には試し斬り
しばらくは考えている×印
ありふれた不安 君には言えぬまま
よろこばれる日まで消し炭待つていた
百冊の本を抱いて飢えている
坊さんと並んで座る程の歳
腹見せて甘えるタマの処世術
その手には乗らぬ切符が二枚ある
影はいつでも太陽に背かない

唐津市 樋口 輝夫
和歌山市 木本 朱夏
八尾市 高橋 夕花
鳥取県 谷口 次男
島根県 松本 文子
綾部市 藤田 芳郎
倉敷市 小野 克枝
米子市 白根 ふみ
弘前市 斉藤 島
大山市 早川 盛夫
和歌山市 吉村さち子
米子市 林 瑞枝
唐津市 市丸 晴翠
吹田市 石原 靖巳
八尾市 村上ミツ子
富田林市 片岡智恵子
今治市 矢野 佳雲
大阪市 本間満津子
唐津市 久保 正剣
大宮市 新井 朋子
鳥取県 さえきやえ
羽曳野市 吉川 寿美
岡山県 小林 妻子
米子市 鷺見 正子
海南市 三宅 保州
鳥取県 岩崎みさ江

大地のように激しい雨も受けとめる
 遠い雨 過去から逆に降ってくる
 朝刊をしつかり読んでいく老婆
 青い車は私の為の葬送車
 散り方に同期の桜個性あり
 さくら咲く夢は見れるもの転ぶもの
 紙コップいつまで耐えていられるの
 ゆっくりと明日の道に塩を盛る
 靴下を重ねサイズに微調整
 修身のかけらも風は寄せつけぬ
 座標軸少しずらして耐えている
 高いとこ見たくないものあるだろう
 花屋には花で飾った嘘がある
 饒舌は寒い女の逃避かも
 風次第余白いつでも書き替える
 ぬくもりを下さい笑いたいのです
 風が吹く日は亡姉からの便り待つ
 針山は女の宝だと思う
 千体仏堂ひとりのわれにさす日ざし
 どこでもある話でしょ さくら草
 思い切つて使つてみたの流行語
 プロポーズ殺し文句は短めに
 命はらはら歯車の狂う音
 死にそうと死んだことなどないくせに
 輪の中に犬一匹も入れてやる
 私を濾過する椅子に薄日さす

貝塚市 吉道 時子
 枚方市 寺川 弘一
 唐津市 岩崎 實
 八尾市 宮崎シマ子
 唐津市 仁部 四郎
 今治市 野村 京子
 和歌山市 福本 英子
 弘前市 一戸 ツネ
 横浜市 清水 朝華
 鳥取県 乾 隆風
 出雲市 竹治 かし
 堺市 志田 千代
 箕面市 椎江 清芳
 八尾市 大内 朝子
 京都市 都倉 求芽
 尼崎市 田辺 鹿太
 米子市 青戸 田鶴
 鳥取県 土橋はるお
 弘前市 佐治千加子
 和歌山市 玉置 当代
 藤井寺市 太田扶美代
 大阪府 澤田 和重
 倉吉市 野口 節子
 横浜市 山下 省子
 米子市 足立由美子
 鳥取市 上田 宣子

パッチワーク宝探しをしてみよう
 和紙にくるんで母から届く路のとう
 ボランティア励む 幸せ分けたくて
 銀の雨わたしがラスの靴を履く
 桃の花待つてるひとの便りなし
 毬とんでつた いつまで待つ風の車
 トンネルの窓に素顔のひとり旅
 咲く程に悲しみの濃いアンネバラ
 とりあえず悩みに砂をかけておく
 速攻で糠喜びを味わおう
 七十歳にほどほどの酒煙草
 だんだんと歪になっていた面
 舌戦になると夫がいなくなる
 ピアニッシモの譜面に溜まるエネルギー
 少年に蔵は謎なぞめいていた
 七人の敵もやっぱり老いの坂
 わが家の日向を占める通い猫
 親切にしよう人にも自分にも
 言われっぱなしのお腹ふつつ煮えている
 俺のせいか申し訳ない母の皺
 税務署でしつかり者のふりをした
 美しく檜山までを舞い切ろう
 雷は怖いでも嘘怖くない
 モノクロの景色の中で夫老いる
 数珠かけて幼名を呼ぶ寒さかな
 途切れなく頂く花の燦々と

和歌山市 楠見 章子
 倉吉市 淡路ゆり子
 横浜市 菱田 満秋
 米子市 小西 雄々
 西宮市 西口いわゑ
 米子市 光井 玲子
 八尾市 高杉 千歩
 米子市 中井 ゆき
 八尾市 山本 宏
 三重県 尾崎 勤
 鳥取県 土橋 螢
 鳥取市 徳田ひろこ
 美祿市 安平次弘道
 和歌山市 榎原 公子
 鳥取市 植田 一京
 米子市 石垣 花子
 尼崎市 内田美也子
 今治市 渡邊伊津志
 和歌山市 堀畑 靖子
 唐津市 井上 勝視
 寝屋川市 岸野あやめ
 岡山県 矢内寿恵子
 鳥取県 坂田和歌子
 西宮市 門谷たず子
 熊本県 高野 宵草
 米子市 茂理 高代

もがいても手の届かないとこに行き
 供花の赤 今日が良いことあるように
 やや呆けてしあわせ色のペール被る
 この汗がやがて私の華と咲く
 ロボットが義理人情に立ち止まる
 風はオカリナやさしく老いの背筋撫で
 反撃をするには距離が近すぎる
 熱さがまだ胸に残っている煮え湯
 最後まで望みは捨てぬ四字熟語
 未知の橋渡る怖さよ嬉しさよ
 フイクシヨンの中に自分を置きかえる
 糸切れた凧がどこかで糸つなぐ
 切られても切られても枝夢へ向き
 この橋の下から河に級がつく
 折りあえぬお人がいます五月闇
 すすき野に火をつけたと思う時
 結局は昔ばなしになった女
 教科書に勝るか「五体不満足」
 二度とその掌には戻らぬシャボン玉
 淋しさに耐えて大きくなった耳
 冷えこみがきついと欲しくなる情け
 引きざわは少し早めの大安に
 花冷えへ少し言い訳考える
 黒電話まだ頑張っていてくれる
 あなたとはプラトニックの仲が良い
 神様の覚えめでたい絵馬に逢う

枚方市 森本 節子
 岡山県 山本 玉恵
 尼崎市 春城 年代
 京都市 高村吉之助
 富田林市 中井 アキ
 尼崎市 春城武庫坊
 大阪市 川久保睦子
 宇都市 平田 実男
 松原市 玉置 重人
 唐津市 山門 幸夫
 貝塚市 池田寿美子
 今治市 野村 清美
 鳥取市 石上 悦子
 川崎市 和泉あかり
 寝屋川市 籠島 恵子
 倉吉市 牧野 芳光
 鳥取県 田村きみ子
 横浜市 長島亜希子
 尼崎市 長浜 澄子
 鳥取県 上田 俊路
 高槻市 左右田泰雄
 横浜市 後藤 早智
 大和高田市 鍛原 千里
 堺市 桜沢 千世
 横浜市 川島 良子
 今治市 月原 宵明

贈られた生命を待つて桜咲く
 自分史のへアピンカーブここかしこ
 日記帳いつか誰かが開くだろ
 花吹雪心が透けるまで浴びる
 自分史を書こうとすると嘘が出る
 聞き慣れぬ音が気になる唄の中
 象の眼が好きだと孫の眼がきれい
 ほどほどの摩擦だいいじな友がある
 嬉しい日 一茶の雀寄ってくる
 若ごぼう春の元気をいただこう
 Eメールフレンドきつと美女だろう
 授かった名前それぞれ意義深い
 ビヨンビヨンと名付けて庭に来る小鳥
 寝言一つ聞く人も無く布団敷く
 捨てて来てまた持ち帰るひとり旅
 開発か保存で遺跡かぜをひく
 そんな日もあるさ厄日と諦める

川本畔さんの書き出しの手紙は相手のしあわせを我が身と同じ程
 思わねば書けない手紙です。「春を大事に」と願う心はかならず、
 受け取る方を春にします。よっぽど大事に念わねばこれほど優しい
 川柳を書き出せませんし、また手紙とはそうあるべきものと改めて
 思わせて下さいました。木村富美子さんから、喜びをいつも分けて
 頂いている一人です。ご心労も現在進行形でし、苦を一人で受け
 られています。それなのにまわりの喜ぶことにひたすらな人了。
 回りまわって大きな喜びを得る方の句なのです。森茜さんのみなみ
 風にはびつと明るくなりました。歳月を握りしめた掌には呪力がある
 はずです。花々も掛け声をかけ合って掌を開きました。

枚方市 前 たもつ
 和歌山県 坂東 和代
 和歌山県 村中 悦男
 箕面市 出口セツ子
 三田市 北野 哲男
 米子市 小塩智加恵
 八尾市 吉村 一風
 鳥取県 石谷美恵子
 京都市 松川 杜的
 羽曳野市 徳山みつこ
 札幌市 三浦 強一
 鳥取市 山本 益子
 唐津市 山門 タミ
 寝屋川市 井上すみれ
 大阪市 辻川 慶子
 鳥取市 録沢 風花
 唐津市 山口 高明

—水煙抄

秀句鑑賞

—4月号から

芳地狸村

秀句鑑賞を仰せつかったが、自由吟の秀句を選ぶのは課題吟と違って焦点がわかりにくいのでむづかしい。次の三点を焦点にして、
①真実味のある句②リズムミカルな句③韻文調の句を選び鑑賞しました。

聞き上手腹の底まで喋らせる

大橋 鐘造

相手に喋るだけ喋らしてその人柄を観察する慎重さがよみとれる軽味の句。

お互いが笑うしかない物忘れ

増田 扶美

私も同じで物を忘れることが多いですね。祝いごとなのに涙が先に出る

河津 正治

祝いと涙のコントラストを巧みにまとめた温味のある句。

母親にどちら様でと言われたら

徳庄 美智子

ドキンとするような句です。娘さんの心境がわかりますね。下五の措辞が効いています。大吉が出るまでみくじ買っている

見え透いた嘘で固める虚栄心

西尾 敬之助

空き腹に食べるいわしは鯛の味

上地 登美代

人情の機微の内側を見事についている穿ち味の効いた三句。

上役に見せたい汗がすぐ乾き

尾宮 弘治

サラリーマンの悲哀を作者がうまく生かしている。

風邪引きがいて落着かぬ習いごと

前上 英一

私も川柳と俳画の講師をしていますがお互いが健康に留意しないと習いごとがなかなか入らないでしょう。実感句。

腹立ちを包み隠している笑顔

山梨 雅子

素晴らしい笑顔の裏に他人に明かせない悩みや、怒りを抱いている女性の心理をたくみにとらえた穿ち味の句。

森口 美羽

特攻の話茶髪が聴いてくれ

尾崎 黄紅

さり気なく席をゆずった茶髪の子

榎本 舞夢

前出の二句は戦後教育の落し子と思われる茶髪の子に、こんな優しい一面があることを教えている。

今だから手首の傷もかくさない

宮野 みつ江

この意気で胸をはって生きる人生観がいい。義理チョコの仲で気軽なお付き合い

義理チョコの味はどうでしたか。他人は本命チョコと見ているかも知れませんね。

三浦 強一

はやり風邪ホーム見舞いを遠慮する

井伊 東吉

作者の気遣いとやさしさがにじみ出ている人間味を詠んだ句。

無職でも春は重なる予定表

亀井 皎月

私も講座を持っておりますので年度初めの忙しさはよくわかります。実感句。

出来すぎた話とこかに嘘があり

高山 清子

うまい話の裏には落とし穴があると言っことを巧みに詠んだ句。

飢えた日を忘れぬ母のにぎりめし

奥野 義夫

首香のむ

西出楓楽選

いさかいのさ中鳴り出す鳩時計

お陰様でところどころは元気です

重箱の隅が大好き老眼鏡

台所預かってから強くなる

体裁をつくろい道がせまくなる

右脳が動いていない花ぐもり

掃除機に家のごたごた吸い込ます

晩学のこれから登る山がある

結論は急くなせくと角砂糖

子育ての処方箋とは不気味なり

金子みすゞにすっぽりと豊かな日

愛の重さに耐えられますか紙の皿

キャベツをはがすと羞恥心が見える

幸せの尺度目線の下にある

主婦業もそろそろ錆を覗かせる

指先で結べるほどの幸でよい

真直ぐな竹に教えを乞うて来る

むらさきの風まぼろしの人連れて

ジーパンの破れを縫って叱られる

寝屋川市 堀江 光子

横浜市 三村八重子

富田林市 藤田 泰子

米子市 鷺見 正子

鳥取市 福田 登美

寝屋川市 籠島 恵子

愛媛県 黒田 茂代

徳島県 安宅美代子

岡山県 山本 玉恵

寝屋川市 森 茜

八尾市 高杉 千歩

和歌山市 川上 富湖

岸和田市 宮野みつ江

和歌山市 和田美寿子

兵庫県 北川とみ子

倉敷市 小野 克枝

米子市 木村富美子

岡山県 矢内寿恵子

和歌山県 坂東 和代

老い独り思い出探し豆御飯

平均点以上も以下もないご飯

胃袋と堪忍袋サイズ

橋こえて春を探しに行った蝶

もたれてもいいなと思うものがない

愚痴言える鏡を一つ持っている

つじつまが合わぬ話を陽に晒す

意識して真ん中歩くことにする

リストラという人斬りがやってくる

温度差があつてことばが出たがらぬ

涸れそうで涸れぬころの湖がある

花吹雪おんな同士の春ラララ

春風にわたしの裏を見てもらう

サクラサクたんす預金の出番です

山盛りの春がこぼれる白い皿

ひと春で忘れ去られた第二ボタン

シャワー全開まだ決心のつかぬまま

書きだしにいつも困っているハガキ

青い空 嘘をのみ込む深呼吸

沈丁花 腹の白さは母ゆずり

抜け道は極細の字の説明書

くしゃみから春の時計が回り出す

ほどほどの幸が私の性に合う

八方破れこれがわたしの処世術

傷ついた言葉一つと黄昏れる

へなへなと右脳くずれるあんこ餅

大阪市 津守 柳伸

和歌山市 古久保和子

吹田市 山本希久子

熊本市 永田 俊子

藤井寺市 高田美代子

大阪市 松岡千恵子

米子市 足立由美子

横浜市 近藤 道子

和歌山市 木本 朱夏

西宮市 牧淵富喜子

堺市 桜沢 千世

大阪市 辻川 慶子

西宮市 奥田みつ子

八尾市 村上ミツ子

大和高田市 鍛原 千里

尼崎市 長浜 澄子

堺市 矢倉 五月

八尾市 高橋 夕花

倉吉市 淡路ゆり子

和歌山市 福井 桂香

和歌山市 福本 英子

宝塚市 嵯峨根保子

箕面市 出口セツ子

羽曳野市 吉川 寿美

西宮市 門谷たず子

和歌山市 山根めぐみ

伴せのかけらをつなぐ一行詩
 もののほずみで高い買い物してしまふ
 人相を変える講話を聞きに行く
 菜種梅雨へ晴耕雨読としやれている
 風もないのに胸の振り子が鳴り止まぬ
 八起き目の力残したギブアップ
 生きてさえいれば回りくる春よ
 席替る自由な空気吸いたくて
 一線を引くつき合いが長く持ち
 器一つ割って妥協する夫婦
 春雨に今日のシナリオ変えられる
 月満ちて息子親父の顔になる
 身の丈に合わせて跳ねている兎
 いつまでも女はおんな雛まつり
 齒科終えて水の甘さが胸に沁む
 突然死 幸せなことも知れぬ
 喜びの日のため笑顔磨いとく
 喉ほとけ本音押さえて上下する
 花文字の畏にかかってから気づく
 酒呑めぬ女は深手負いやすし
 日曜日 雨の子報にほつとパバ
 車椅子 歩行器 杖と喜ばせ
 バラの花今日は私の為に買う
 ゴメンネと土筆の束を湯に入れる
 みんな行く道だ石ころ拾っとく
 隠してた力をみせる未亡人

出雲市 園山多賀子
 西宮市 西口いわゑ
 鳥取県 西川 和子
 大阪市 町田 達子
 今治市 村上久美子
 岡山県 大石あすなろ
 八尾市 大内 朝子
 和歌山市 桜井 千秀
 鳥取市 岸本 孝子
 岡山県 福原 悦子
 今治市 塩路よしみ
 鳥取市 坂田和歌子
 芦屋市 黒田 能子
 貝塚市 池田寿美子
 和歌山市 楠見 章子
 米子市 白根 ふみ
 川崎市 和泉あかり
 大阪市 本間満津子
 富田林市 片岡智恵子
 鳥取県 西原 艶子
 大阪市 神夏磯典子
 横浜市 山梨 雅子
 池田市 栗田 久子
 横浜市 山下 省子
 米子市 小塩智加恵
 横浜市 福田由美子

子供等の会議は介護番を決め
 スピーチを砂糖でくるむ披露宴
 桜前線わたしの春も今一度
 バイキング胃へほどほどをつい忘れ
 朝々のおしゃべり垣根低うする
 大好きと猫好きの人 気があって
 出さぬ芽に大きな声で呼びかける
 れんぎょうがチラホラ母の独りごと
 苦労話言わせてくれるロゼワイン
 卒業はしたんですがとフリータ
 声出して天声人語よむ日課
 いかなごを炊いて今年も母元氣
 携帯の一人芝居も見慣れて来

横浜市 田中 笑子
 横浜市 巖田かず枝
 米子市 林 瑞枝
 鳥取県 石谷美恵子
 鳥取県 さえきやえ
 枚方市 森本 節子
 大阪市 鈴木トヨ子
 藤井寺市 太田扶美代
 和歌山市 上地登美子
 寝屋川市 岸野あやめ
 大阪府 大森 年子
 東大阪市 田中美弥子
 横浜市 豊田 羊子

光子さんの句―鳩時計にふつと気を取られるほどだから、い
 さかいと言つてもとるに足りないものであろう。おどけた鳩時
 計に嘲笑されたような気がし、ちよびり反省をしながら、い
 さかいは終りを告げたに違いない。八重子さんの句―このプラ
 ス指向に敬意を表したい。体の悪いところは言わず、いいとこ
 ろを挙げ「お陰様」と念を押している事で、作者の明るい人柄
 が、一段と鮮明に浮き上がる。泰子さんの句―たとえどうあが
 いてみても、老眼鏡が必要になれば、老いとは口にと立つたこ
 とは明らかである。近くは見えても遠景は見えないところから、
 中高年以降偏狭になりがちなものを見方を、老眼鏡に置き替えて
 戒めたものであろう。「大好き」には逆説としての皮肉も効き、
 句作りの巧みさが光っている。正子さんの句―「強くなる」の
 意味に奥行きがある。家庭内での地位、経済、自分自身などが
 挙げられ、広くは女性の生きざまにまで思いが巡らせる。

非常食期限が切れて嬉しいね
無防備な寝姿並ぶ終電車
リステラを視野に資格をとって置く
備えてるにぎりこぶしにある敵意
子や孫が老後の備え突き崩す
九回に備え準備の大魔神
金融不況老後の備えも宙に浮き
万に一つ備え伊達巻絡めている
鶯の糞を備えた祖母の肌
シエルターのいらぬ世界にしたいもの
紙風船くれた富山の常備薬
二千年備えは堅い兵馬備
バイアグラ一人旅には連れて行き
リストラに備えて種を播いている
ホームレスなる手もあると備えせず

佳

新しい菓に張りかえる春の蜘蛛
喉元を過ぎて備えが甘くなる
災害に備えた苦のリュック空
バイアグラ備えて見たが無駄でした
テポドンへ備え大きな網を張る

人

自信持ち過ぎて二の矢が間に合わず
断層の亀裂に防備笑われる

地

テポドンが写らぬレーダー備えてる

天

軸
災害の備え気になる道路幅

いよいよ

石原靖巳選



まだ暗記出来ず順番来た祝詞
いよいよの出版が回る初舞台
いよいよの意志継いでいよいよあげる腰
証人喚問いよいよ謎が深くなる
脱サラがいよいよスタート曳く屋台
いよいよと言う何時時も雲隠れ
お布施弾みいよいよ読経熱が入り
いよいよと言うても乗らぬ天の邪鬼
いよいよは百歳にしている言葉

久仁於
清史
靖雄
喬水
圭一郎

いよいよの子離れをして二人旅
いよいよの時には腹をきめてある
初めましていよいよ古希の仲間入り
いよいよの言葉も知らぬ楽道家
いよいよとなつても策のない家計
いよいよとなつて尻込みする勇氣
いよいよの日までに涙ふいておく
待たなし初日の暮にある決意
いよいよになると父より強い母
いよいよ船出 喜怒哀楽の夫婦旅
いよいよという時表に起こされる
スパイスが効いてやる気の受験生
子等が出ていよいよ老人クラブです

隆 広
久保正剣

いよいよを幾つも越えた喜寿の山
母になる爪はまあるくきつてある
いよいよへ奇蹟を願う百度石
言い勝つていよいよ募る孤独感
開幕が明日に迫るネオパ笛
恋人を連れて来たいと切り出され
いよいよとなれば貸さない奴ばかり
いよいよになればまだらボケという手
さあ定年いよいよ軌道修正だ
潮満ちていよいよ母となるいのち
いよいよと思う時間が長すぎる
丸い背にいよいよ宿る老いの影
いよいよの時は静かに眠りたい
強情もいよいよ折れて子と同居
いよいよの老化へ今日もどっこいしよ

英子
一壺
慕情
権悟
正雄
文時
雄々
妻子
勝巳
アキ
洞庵
隆盛
勝美
倫子

いよいよとなれば開けてね覚え書き
いよいよと言うのに朝から飲んでる
いよいよの時に助けてくれますか
タイエットいよいよシャネル夏帽子
いよいよへ等身大の絵を残す

扶美代
重人
周信
時子
あすき
晴翠
タミ

弘一
朝子
雅光
潮華
不代

極楽にいよいよゆける診断書
いよいよの別れに落ちる花の首
いよいよという鉢巻きを締め直す
いよいよとなつたら膳を曲げてやる

狸村
たず子
川上大輪

初歩教室

題 — ゆっくり

吐 田 公 一

発想の転換—このことは川柳に限らず、何事においても必要不可欠なことであるが、そう簡単にゆくものではない。で、川柳の世界では第一着想は捨てよ、と言われるのがこのことで、一つの課題に対してとりあえず発想されるのはどうしてもありきたりの事象になり勝ちということ。

今回のゆっくりの題に対しても、仕舞風呂・歩く・旅を詠んだ同想句といわれるものが多かった。例示すると

ゆっくりと手足をいとう仕舞風呂
ゆっくりと疲れをいやす仕舞風呂

で、本文をよく読んでいただいで、色々な発想のあることを学んで欲しい。

添削句

○せかせかとゆっくり出来ぬ損な性 俣子

上五と中七は同義の連記

▽定退後もゆっくり出来ぬ損な性

○ゆっくりと結論待つてのおえらがた よしこ
下五が安易に走った。

▽結論をゆっくりと待つ社長室

○階段をゆっくり数えている安心 登子

階段を数えて安心とは？ 内容が不明

▽階段の手摺に頼る試歩の朝

○暇を取る偶にゆっくり骨休み 晩翠

骨休みの中にはゆっくりの意味も含まれて

いると解釈して欲しい。

▽骨休め今日はテコでも動かない

○ゆっくりどうぞと襖しめる宿 泰雄

これではありきたりの情景を詠んだだけ

▽新婚へ宿ごゆっくりと氣を利かし 美恵子

命の洗濯—ゆっくり。一寸した見付けを

▽鬼の留守今日は命の洗濯日

○ゆっくりと果報寝待つさくら咲く 政子

電報文（昔はカタカナ表現）にした方が、

受験の果報がよくわかるといふもの

▽ゆっくりと果報寝待つサクラサク

○もつゆっくりと好きなことして夢を見て 円女

同じ内容を表現を変えてみると

▽夢持ってゆっくり生きる趣味の道

○ゆっくりと出足が鈍い若夫婦 てる子

ゆっくりとと出足が鈍いとは同義語の感

▽中流で出足が鈍い若夫婦

○なるようになるさそれまで慌てない 肋骨
使い古されている言葉だが、語呂を節約するために

▽ケ・セラ・セラこの世のことは慌てない

○ちびちびと飲んでゆっくり本音出す 柳信子

聞き出そうとする方の魂胆を詠めば

▽ゆっくりと飲ませ本音を聞くつもり

○退職し鈍行旅の二人です 春江

上五の発想をもう少し生かして欲しかった。

▽鈍行でできた定年のふたり旅

○食細い子はゆっくりと噛んでいる 智加恵

説明句に近い。

▽ゆっくりと食べて丈夫な子に育ち

○ゆっくりと歩いて行こう八十路まで 寿代

情景を彷彿とさせることが肝要

▽ベスト尽しゆっくりくぐる縄のれん

○育児書は気にしていない可愛い子 和可

神経質にならないという点では理解できる

が。題意からやや外れ気味

▽のんびりと育て育児書気にしない

○偏差値をゆっくり見守る羅針盤 ひでの

下五がとってつけたよう

▽偏差値にのんびりできぬ受験の子

○ほどほどにゆっくりできるテイルム 省子

同じ内容だが小道具が少し違う。

▽百までも目指しゆっくり竹を踏む

○ゆつくりと再度の恋も雪の下 タツエ

再度の恋も雪に隠れて見えないの意?下五にやや難が感じられる。

▽ゆつくりと焼けばつくいが燃えはじめ

○ゆつくりとやれよと上司期限まえ 一典

長くなるので返信文で説明

▽ゆつくりとやれよというがせかす顔

○ゆつくりとベスト尽して靴を脱ぐ 四三郎
上五が冗長。人間(感情や動作・暮し等)が詠めていない。

▽定年でゆつくり語り合う茶の間

○蝶を得てゆつくり花の噂きく 幸枝

説明は返信文で

▽蝶々にゆつくり花の噂きく

○ゆつくりと気ままに寝起き老いの部屋 トシエ

説明は返信文で

▽定年に時間気にせぬ日が続く

○雪の朝ゆつくりバスへ心せき よし子

同じくバスを詠むなら

▽朝風呂もゆつくりできぬバスツアー

○病葉がゆつくり川を下ってる 知華子

上五を擬人法とみてもやや単純

▽ゆつくりと川の流れて逆らわす

○骨休み途中で用を思い出す サト子

説明になっている。

▽ヤボ用でゆつくりできぬ骨休め

○ゆつくりとまたいいねいに念がいる 敬之介

ゆつくりていねい念入り同義語に近い反復

▽ゆつくりと話せばわかる仲違い

○ごゆつくりもてなす嫁の片エクボ 要子

下五が句の味を潤めてしまっている。

▽ごゆつくりもてなす嫁に潜む刺

○ゆつくりと利酒ふくむ答え待つ 茂代
下五が言切ってしまつて広がりには乏しい。

▽ゆつくりと利酒ふくむ杜氏の舌

○友の家ゆつくり遊び夜になる 美寿子

内容に乏しい。

▽ポン友と昔話に日が暮れる

○ゆつくりと回り道して時かせぐ 篤子

回り道ゆつくり。時かせぐ(なんの時間かせぎか判然としない)

▽回り道した人生に花が咲き

○ゆつくりと白紙を埋めるペンを執る 郁子

白紙とは最初から書き始めること。この際

は余白とした方が句が生きているのでは

○かたむりゆつくり歩こうマイペース ミツオ

蝸牛にはゆつくり感が含まれる。

▽雨風に負けぬ蝸牛のマイペース

○老人ホーム時がゆつくり昼下り 宏子

▽ゆつくりと時が流れる老いの家

○渋滞の先にバトカー走つてる 徳三

佳句

ゆつくりと麻酔から醒めVサイン 三代子

もうそろそろゆつくり歩けと天の声 美弥子

定年の旅は鈍行風まかせ 美也子

おしゃれても下着はしと決めてある 幽雅子

故郷の風手足伸ばせばせは憂さも消え 〇八重子

里帰りゆつくり溜めるエネルギー セツ子

命ある限りゆつくり楽しもう 舞夢

寄り添ってゆつくり歩く老いの坂 民子

恢復の明日へゆつくり歩を運ぶ 純子

ゆつくりでいいよと論す親ごころ 煩惱児

ナメクジの歩く速度は変えられぬ 慕情

なるようになるさゆつくり飯を食う 〇八重子

ゆつくりと勝利の余韻かみしめる 宗明

リハビリの姑へゆつくり歩を合わせ てる代

ゆつくりと十月十日の呱呱の声 美子

ゆつくりと返す言葉に隙がない 靖雄

(最近は速口が流行だが)

家事忘れ女二人の旅の宿 方子

(これこそストレスの解消)

ラストまでゆつくりと飲む心 賢

(下五が効いている)

ダイオキシンのゆつくり病んでいく地球 幸子

(すばらしい見付け)

私の句

頂点を目指して進むカタツムリ

川柳塔創刊75周年 記念川柳大会

平成11年3月20日 ホテルアウターナ大阪 金剛

記念式典

開会のことば	川柳塔社理事長	河内天笑
あいさつ	川柳塔社主幹	橘高薫風
祝辞	(社)全日本川柳協会会長	仲川たけし氏
	葉文館出版株式会社社長	齊藤俊輔氏
おはなし	作家	織田正吉氏

川柳大会

「高」(事前投句)	川柳塔社主幹	橘高薫風	選
「蓄」	川柳塔きやらぼく	八木千代	選
「砂」	川柳塔唐津支部	久保正剣	選
「竹」	竹原川柳会	小島蘭幸	選
「喜」	時の川柳社	小松原爽介	選
「港」	ふあうすと川柳社	泉比呂史	選
「役」	番傘川柳本社	磯野いさむ	選
閉会のことば	川柳塔社副主幹	宮口笛生	

懇親宴

奇術・踊りなど アトラクション

翌日観光

大阪城梅林—法善寺横丁・道頓堀周辺の川柳句碑めぐり—
住吉大社—南港

記念式典・大会

川柳塔創刊七十五周年記念川柳大会は三月二十日、ホテルアウイーナ大阪で開かれた。折りあしく雨が降りしきる中を参会者が続々と詰めかけ、春分の前日の開催ということもあって、昨年の八五〇号記念大会をはるかに上回る四百二十五名という大盛会となった。

午前十時から開場したが、さしもの広い四階の「金剛」の間もぎっしりと埋まり、ロビーでは直原玉青画伯の色紙が展示され、川柳句集『地球の塵』（黒川紫香）、同『椿守』（八木千代）など、同人の句集の即売が行われた。また、出席者には句集『師弟』（麻生路郎・橘高薫風）、『なにわ川柳—この一句』（復刻版）と路郎の句入りタオルが記念品として贈呈された。

出句は正午に締め切られ、板尾岳人・西出楓楽副理事長の司会で午後一時から記念式典が行われた。はじめに河内天笑理事長が開会のことばで、「大会がこうして予想よりふくれ上がってきたのは、同人・誌友のみなさんの仲間意識の高まりによるものと思われ、すばらしいことである」と述べ、続いて橘高薫風主幹がプログラムに掲載された「七十五年のあゆ





仲川たけし日川協会長

み」を参照しながら『川柳雑誌』発刊以来の動きについて触れ、「私たちがうけついでいるのは柳誌だけではなく、川柳の社会化と質的向上という路郎の精神であり、これは一日もゆるがせにすることはできない」と語った。

仲川たけし全日本川柳協会会長、齊藤俊輔葉文館出版社長に祝辞をいただき、今大会に寄せられた祝電が披露された後、三月十五日に急逝された山田良行日川協理事長の冥福を祈って黙祷を捧げた。

この後、川柳に理解の深い作家の織田正吉氏による別項のようなおはなしがあり、午後二時から入選句の発表に入った。まず、薫風主幹がこの大会にちなんで事前投句「高」の入選七十五句を披露、続いて六題の披露がスムーズに行われ、宮口笛生副主幹が閉会のことばを述べた。



司会の西出楓楽さん

なお、記名は河内月子・西口いわゑ・長浜澄子さんがつとめ、月間賞は原みさを氏（鳥取県）に輝いた。

懇親宴

懇親宴は同会場で百五十五名の参加で、木本朱夏・坊農柳弘・篠原いつふみさんの進行により開かれた。はじめに波多野五楽庵川柳塔みちのく主幹の発声で乾杯した後、二十四のテーブルを囲んで和やかな祝宴に入り、再会を喜んで杯を交わす者、近況を話し合っ者それぞれに時のうつろいのを忘れて談笑する風景がみられた。

アトラクションは、川柳塔きやらほくの木村富美子さん（男装）、和服姿の澤田千春さんのコンビによる踊りに始まり、河内天笑・月子夫妻のハワイアン、川柳ねやがわの皆さん



記名係のいわゑ・澄子・月子さんと薫風主幹

の熱演などが続いたが、プロによる見事な奇術には拍手が湧き、川内呷笑さんのリードで一同そろって河内音頭を踊って幕を閉じた。

大阪市内観光

二十一日は、芽吹く木々にとっては恵みの雨だが、大阪市内観光には有難くない日となった。悪天候にもめげず、八時四十五分、昨日の盛会の興奮のさめやらぬアウィーナ大阪を、マイクロバスで一同元気に出発した。参加者は青森、神奈川、香川、佐賀、熊本、大阪から総勢十五人。

運転手さんも川柳仲間というのがいかにもうれしい。ハンドルを握りながら、マイク片手の軽妙なガイドで、時折車内を笑いの渦に巻き込む。



乾杯する波多野五楽庵氏

日曜日で祝日とあって渋滞もなくスイスイ走り、先ずは「大阪城梅林」へ到着したが、残念ながら時期がもう遅く素通り。桜門に止めてもらって三十六畳の鮎石を見る。大ききもさることながら、小豆島からこれを運んだ先人の知恵にただただ感心をする。

次にミナミの繁華街の中心「法善寺」の水掛不動にお参りして、正弁丹吾亭前、うどんの今井、相合橋交番横の句碑をめぐる。太左衛門橋の名物「大だこ」のたこやきを頬ばっていると、ほどなく「阿部野神社」へ到着。

由緒ある神社の境内は、参詣の人影もなく静寂につつまれ、路郎師、白柳師、萬葉氏、塊人氏の句碑から、「よづきてくれたなあ」と言う声が聞えるようであった。

続いて「住吉大社」へ行く。当日は大安とあってお宮参りラッシュ。晴着の赤ちゃんを



鮮やかな奇術

困んだ一団が、雨のかかるのを気にしながら写真を撮っているのをほほえましく眺める。ほどよくお腹も空いてきたので、一路南港の「WTCコスモタワー」へ。四十六階のバイキングは和洋中、飲物、デザート何でもござれ。海に向って発展を遂げている大阪を眼下に、一同「もっあかん」と言つところまで詰め込んだ。食後、展望台・買物など自由時間を楽しむ。

駆け足ではあったが、新旧、ひいては未来の大阪まで垣間見て、予定通り三時に元のアウィーナ大阪へ帰り着いた。



木村富美子さんと澤田千春さん

ご挨拶

橋高 薫風

橋高薫風でございます。

川柳塔創刊七十五周年の大会に、こんなに大勢の方がお集り下さいました。私は事前投句の三百八十八名の句の選をしながら、うれしくつうれしく胸をつまらせていました。

五・七・五の小さい文芸の力を大会毎に認識させられ、歴史の積み重ね、先覚者のご恩をしみじみ感じるのでございます。

皆様ほんとうに有難う存じます。

お話を頂く作家の織田正吉先生、葉文館出版の齊藤社長、川柳界からは日川協会会長の仲川たけし先生をはじめ、山本翠公事務局長、そして友好川柳社の主幹各位にご来賓頂き、ご選を頂く方もございまして、この上なく光栄に存じます。また出席される予定でした山田良行日川協理事長が、数日前に急逝されましたこと、心から哀悼の思いを捧げ、ご来賓のご祝辞を頂いたあと、謹んで黙祷を致したいと存じます。

麻生路郎先生が川柳雑誌社の初句会を開かれたのは大正十三年の一月十九日、そして二

月二十日に創刊号が発行になりました。お手元にお渡しした句集「師弟」にもある

行末を案じるように鶴は立ち

の句が、創立句会の先生の一句で、常に意気軒昂な先生にしてはいささか不安気な鶴の姿に、厳しい船出の重圧が感じられます。

以下、川柳塔社の沿革の大筋は「川柳塔七十五年の歩み」にある通りで、激しい時代の波風を経て、今日只今に至ったのであります。

その中でも特筆すべきことは、昭和十一年七月の路郎先生の職業川柳人宣言と、昭和十八年十二月の「雑誌奉還号」の発行、それはその翌年からの戦時の統制を見越しての休刊宣言でありました。

路郎先生死去のあと、昭和四十年十月号から「川柳塔」と改題、現在に続いているのですが、中島生々庵、西尾葉両先生と私が引き継いでいるのは、雑誌だけでなく路郎先生の精神であります。一つは川柳の社会化、川柳

愛好家を増やす努力、一つは川柳の質的向上、川柳の批判は必してあてこすりではない、川



路郎先生の胸像と共に

柳の滑稽はくすぐりでないことを作品自体で示すことであります。われわれは今や、これをゆるがせに出来ない現状にまたまた当面しております。

西尾葉先生は厳しい路郎精神に和の心を加えられました。和やかさはどの世界にも共通して必要な発展への基本事で、私たちも足並みを揃え、一人一人の力を結集しなければなりません。

新しい時代への出発に若い力をフルに発揮すること、地方との連繫をより密にして活力ある運営を目指すことに私は専心努力致したく思います。

川柳塔同人誌友各位のご理解とご協力をお願いするとともに、川柳界の多くのお仲間の



ご指導ご支援を願って止みません。
最後に路郎先生の句碑に関して、かいつま
んで報告致したく思います。

私のユーモア観

振り返ってみますと、私と川柳の出会いはい
ずい分昔のことになります。私は神戸生れの
神戸育ちで、淀川長治さん、中内功さんが先
輩におられる神戸三中(現・長田高校)時代、
体育教師が中村東角という川柳家だったのが
川柳に興味を持った最初です。東角先生の
「おっさんにされて審判買つてでる」の一句
をよく覚えています。

今日、西村梨里さんがこの会場に見えてい
ませんが、尾道に行っておられるのです。

尾道は路郎先生の故郷であり、今年市制百
周年を迎えました。五月一日には瀬戸内しま
なみ海道が四国今治市との間に開通し、さま
ざまなイベントが企画されています。尾道に
ゆかりのある文学者の顕彰も種々予定されて
います。句碑建立もその一つです。それで
路郎先生のもその中へ加えて頂けるよう昨秋
来運動を続けていて、今日第二回目の「麻生
路郎と川柳展」が新設の「おのみち文学の館」
で展示され一年間の常設となります。梨里さ
んはその開場式のテープカットに行かれたの

です。こういうアピールを続けて、路郎先生
の足跡を尾道市民に認識して頂き、句碑建立
へ漕ぎつけたく思っています。

路郎先生の理解者のご好意による斡旋で、
尾道の亀田市長は過日私たちの陳情に一時間
近く貴重な時間を割いて下さったのです。

路郎先生の一基の句碑が、久米南町という
日本一の川柳の町をつくり上げたのです。私
は句碑の力、一句が大衆を感動させる力を信
じ、先生の心を後世に伝えることを念願にし
て、この運動を進めたく思っています。これ
も各位のご支援をお願い致します。

今日はほんとうにありがとうございます。

織田正吉

川柳かくあるべしと教えられたのは麻生路
郎先生の入門書『川柳とは何か』でした。昭
和三十年に至文堂から『学生教養新書』の一
冊として、短歌・俳句・詩など芸術の分野毎
の入門書が、各部門の第一人者によって出版
されました。その一冊に路郎先生の川柳に関
する本があったのです。私はこの本によって
川柳観のものさしを得ました。最近、川柳塔

社によって復刻されたのは、たいへん結構な
ことと思っております。

この本の中で私は須崎豆秋の句に出会いま
した。「みの虫のなんぼ蜀うても壁だった」
「阿呆なこと言うてしもうて淋しけれ」など
今でも折りに触れて浮かぶのは豆秋の句です。
路郎先生はその謙虚さから御自分の句をほ
んど入れておられず、「子を死なし学校に

子の多いこと」「寝転べば畳一帖ふさぐのみ」等の名句に出会ったのは後のことになりました。その後、『川柳塔』の編集をしておられた不二田「三夫さんと何度かお会いしました。一三夫さんに「喪服まで借りてきたのに持ち直し」という句がありますが、この句にも人生に対する或る視線を感じて印象に残っております。

いろいろのいきさつから私は自分でも思ひもかけず、昨年、「虹色の包帯」という川柳句集を出版いたしました。その長い後書きを脱稿したのが正に七月七日、路郎忌でした。これも何かの御縁と感じております。

今日はいくつういだ話をといてことで雑談のようになりますが、世の中、笑いは吉本だけにあるのではなく、人間あるところには常に笑いがあると思っております。例えば、今年「風邪が流行りましたが、喫茶店でたばこを吸っている人を見ますと、風邪で鼻が詰っているのか煙が一本だけ、片方の穴からしか出ていません。本人は気づかないのですが、傍で見ていると面白いですね。また、終戦後間もなく、女性がナイロンストッキングをはきはじめた頃、貴重品だったので、破れては大変と踵に石けんを塗りつけたところが、雨に遭って踵から石けんの泡が出たそうです。

電車の中で居眠りをしている人をよく見かけますが、居眠りを観察すると面白い。傾いた体を、ときどきはと立て直します。しかし、また同じ方向へ傾くというように、傾斜の方向が決まっており、あちこちへ傾くこともありません。どんなによく寝ている人でも、自分が降りる駅に着くと、ちゃんと目を覚まして足早にドアの方へ向かいます。

神戸は都会でありながら、市中にイノシシが出ます。六甲山のバス停にいるイノシシ親子など、バスを待っているように見えます。餌を求めて山を下りてきますが、他所から来た人が神戸のような都会にイノシシが出るのを珍しがるので、「摩耶山にはオオカミが出ますよ」と言いました。私の息子がまだ幼かったころですが、観光牧場前のバス停でそう言うのです。確かに看板に「この辺りにアベックを狙うオオカミが出ます」と書いてありました。

川柳には観察眼が大切だと思います。葎乃さんの句に「電線から落ちる雫もあとやさき」というのがあります。同じように落ちる雫もよく見ると、確かに早いのと遅いのがあります。それが人生の何かを表わしているようで、奥行きのある句です。

私の川柳の大半は観察と日常体験から生ま



れたものです。私が京都西陣の織物会館へ行ったとき、通りすがりの女の方に道を尋ねたところ、その方が「私もそちらの方へ行きますから、御一緒にしましょう」と建物が見える所まで案内してくださりました。

道聞いてそのあたりまで連れになる。正吉私の句集の最初に置いたのはこの体験から生まれた句です。人生とはそういうものだと思います。今日も、こうして皆様とお会いしてひとときを過ごし、そしてまた、それぞれの道へ別れてゆくわけです。

観察によって何かを発見し、驚きを得るのが文芸、芸術だと思います。発見が、見る人

聞く人に驚きを与えるわけですが、日常生活に馴れてしまうと、感性が鈍って驚きがなくなります。

よく「ユーモア感覚とは何か」と聞かれますが、ユーモアとは駄じやれを言うことではないのです。要するに物の見方・考え方なのです。私たちの頭の中は固定観念の固まりみたいなものです。

須磨水族館の館員の方の話では、飼育している魚の餌として、安くて大量に手に入る金魚を使ったところ、残酷だという苦情の電話や投書があり、餌をどじょうに替えると苦情は来なくなつたと言います。金魚は観賞用、どじょうは食用という固定観念が、頭を支配しているんですね。

ガス冷蔵庫というものを不思議に思っている人がいます。電気でもガスでもモーターを動かすエネルギーに変わりはないのですが、



作家・織田正吉氏

ガスは水を沸かしたり、温めたりするものという固定観念が、ガスで物を冷やすというこゝとに変な感じを持たせるのです。

固定観念を持たない子供の物の見方はとても自由です。小学生におばさんが「学校のベルは授業の始めと終りに鳴るでしょう」と言ったら、その子が「学校のベルは休み時間の始めと終りに鳴る」と言いました。

お風呂に水が一杯になり溢れているのを見た子供は「お母さん大変、お風呂が足りないよ」と言ったそうです。もう一つお風呂があればこの水を受けられる。お風呂は一つというのは大人の常識に過ぎないのです。

「シャツのボタンが取れた」と普通言いますが、大小の関係にとらわれなければ「ボタンからシャツが取れた」という見方も成り立つわけです。何事にもこういう往復の視線があり得ます。

人間の親子を猿に見てもらい 鬼遊

この句は逆の視線から詠んだものです。川柳家にはこういう自由で、とらわれない視線が必要です。また、見えるものだけを見るのではなく、見えないものも見る想像力が必要です。天折した詩人金子みすゞは「大漁」という詩の中で、浜は賑わっているが、海では鰯がおとむらいをしていると詠み、見えないけれど

星は昼間も出ているとうたっています。

人間はあまりにも当たり前であることを見過してしまつたのです。ドイツ人の音楽家が初めて日本へ来たときの印象を語っています。が、まっ先に目についたのは、富士山でも新幹線でもなく、日本人が多いということだったそうです。

当たり前であり過ぎるために価値を感じなくなっているもの一つに水があります。阪神大震災を体験した私は、水の大切さを感じ知らされました。ふだん気付かない大切なものが身近にあることに気付いたので、震災体験も私には無駄ではありませんでした。

子供には日常生活や体験のすべてが発見と驚きです。子供の目、子供の話から、大人がはっとする表現が飛び出すこともしばしばです。私の子や孫の語録を拾いますと、昼の半月を見て「お月さんこわれる」、今年竹が伸びたのを見て「竹が竹の子を持ち上げている」、私の瘦せた体を見た孫は「骨が多そう」などなどです。

春雨の季節になりました。「春雨じゃ濡れて行こう」という芝居の名セリフがあります。が、それを川柳にしたものを御披露して私の話を終らせていただきます。

傘持つて傘ささぬ人春の雨

正吉

川柳大会入選作品

事前投句

高

橋 高 薫 風 選



新世紀せめて号砲高らかに
 大阪は生駒の高さから日の出
 父さんが一番高い肩車
 葱坊主それぞれ高い天を持つ
 すぐ折れる偏差値が生む高い鼻
 金のない割には高いもののお好き
 高いとは思いが減多に買えぬ品
 広辞苑に高度成長まだ残る
 ハードルをだんだん高くして生きる
 アルプスへ始めは裏の山歩き
 高齢少子抱き合うてゆく新世紀
 青空へビルだけのびている寒さ

吉道航太郎
 脇 正夫
 浅雛美智子
 吉川 寿美
 中野 健吾
 山本 翠公
 楊井 二南
 森本 益弘
 立蔵 信子
 井齋 一齋
 中山おさむ
 宮本かりん

高層のビルが漏らしている悲鳴
 高層のマンションに住み読書好き
 悪評が高いのもよい視聴率
 八起き目の波の高さを忘れない
 禄高で人物評価やめてんか
 心ならずも柩を送る高架橋
 散骨をするには丁度よい高さ
 高らかに父の十八番はマイウエー
 割勘ですこうし高い酒になり
 孤高を保つ老いの縄のれん
 高望み男に影がつきまとい
 平熱が少し高めで情熱家
 高く聳え風のみたまを聞いた塔
 信念を説いて次第に声高し
 高笑い男は過去を引き摺らぬ
 無理しない自分にあつた目の高さ
 神様をご覧になるに良い高さ
 ご高説賜る正座くずせない
 声明は庶民見下ろす位置で読み
 子の願ひ風の長さの位置にある
 連風は空の高さへ行く階段
 故里の樹の天辺にある思案
 登ったらなお高くなる父の樹よ

太田とし子
 矢倉 五月
 黒川正之助
 亀山 緑
 中川千里志
 藤解 静風
 波多野五楽庵
 岸本 孝子
 河内 月子
 伊藤 武
 阿萬 萬的
 西出 楓楽
 吉村 雅文
 堀江 光子
 園山多賀子
 大谷 篤子
 杉野 睦郎
 玉利三重子
 鶴留 百合
 中井 昭子
 安藤寿美子
 山海 友熙
 石原 靖巳

高い木を降りて少年進まねば
高僧も初恋語る時少年

高山植物ひっそり咲いて満ち足りる

プライドの高さ白から抜け出せぬ

雪国のポストの高さ春遠し

同じ目の高さになった曼珠沙華

仮面今日 高い所へ置き忘れ

尺取虫 空の高さも視る仕草

病癒え天井高く高くなり

どん底で空が幾分高くなる

志それでも高くかざしたに

夢の高さが夫にはまだわからない

齋戒沐浴 高い誇りを磨ぎすます

峰白き山あり高さ一段と

誇り高きキリマンジャロを恋うてより

万歳の手なら高々挙げるべし

天井の高さを冬がでてゆかぬ

気位の高い女も桃の花

背の高い女の脚の美しさ

そのうえにまだハイヒール履いている

夫と行く時は履かないハイヒール

プライドの高い女の帽子函

娘には理想高くと言いい切れず

木本 朱夏

田頭 良子

奥田みつ子

黒田 能子

山本希久子

小山 紀乃

天正 千梢

古久保和子

神原 文

平井美智子

北畑 金治

山本 礫

牛尾 緑良

樹本 露児

松本 文子

高田美代子

佐藤 季穎

高橋 夕花

黒川 紫香

瀬川 幸子

梶川雄次郎

田中喜代志

木村貴代子

指揮棒の高さから出る放射線

天窓の星の数々暖をとる

心臓の高さに吃水線を置く

カレンダー妻の高さがいじらしい

いのち万歳 洗濯ものを高く干す

海峡に鉄柱建てたお父さん

男とおんな水平線の高さなり

高邁な理想語って親不孝

高名な方のひっそり小さい墓

住

忘れてた高鳴る胸があることを

五センチの恐怖が車椅子にある

少年の理想は高く親貧し

菜の花の高さ揃えば逢いに行く

最高の笑顔でおりの終の駅

人

古木もう高さを競うこともない

鳥の眼に争いごとがみな見える

地

てっぺんがいちばん先に腐りだす

天

軸

君知るや明け方ペンの孤高なる

川上 富湖

山門 タミ

原 章峰

板垣 草丘

高瀬 霜石

河内 天笑

坂田和歌子

問屋啓二郎

小林すみえ

原 苑子

川上 大輪

杉澤 汀

鴨谷瑠美子

西村りつえ

八木 千代

政岡日枝子

原 みさを

蕾

八木千代選



辛抱がいいねチューリップの蕾
 蕾つけアピールしたいこぼれ種
 届かない愛は蕾のようですね
 子が母に甘え蕾のシクラメン
 山が笑うと蕾も少しずつ開く
 ひめゆりの塔で眠っている蕾
 レジスタンスの蕾一輪だけ残り
 鳥たちを養う羽目になる蕾
 愛情の手抜きでつぼみ落ちてゆく
 蕾固し咲いてしまえば生殖器
 白菜が芯に蕾を抱いている
 日一日蕾に溜まるエネルギー
 一雨に蕾が顔を見合わせた
 水道の水につぼみが拗ねている
 摘まないで真赤な花を咲かすから
 竜舌蘭の蕾は当てにせぬことに
 一斉に咲けば蕾も喧しい

前川千津子 米澤 俣子 山本 礫 川原 章久 田中 亜弥 浅雛美智子 森 茜 宮木 一夫 村上 剛治 原 みさを 栗田 久子 脇 正夫 篠原いづみ 柴田英千子 沢田 和子 森井 菁居 川上 大輪

出遅れた蕾をなぜか笑えない
 偏差値の風に乾いてきた蕾
 北向きの枝の蕾は負け嫌い
 寒椿蕾のままでもいいのです
 三人の蕾が親を脅かす
 呱呱のこえ私も母という蕾
 活けられた蕾の頑として咲かぬ
 何でもよう知ってはるお隣の蕾
 蕾にも伺いたてる気象庁
 やさしさに蕾が誤解してしまう
 毒を抱く蕾と知らぬとりかぶと
 あしたかな蝶の覗きにくる蕾
 大の字でうちの蕾は昼寝中
 散ることも覚悟の内にある蕾
 噓ひとつに蕾がゆれてふくらんだ
 しっかりと蕾のうちにする嫉
 蕾にもカサプランカの格を持ち
 どう咲くかこが蕾の正念場
 蕾いま確かな刻を抱いている
 蕾から自身の色で晴れ戦
 蕾のまま斬り込み隊へいったまま
 あいさつが出来て蕾が光り出す
 掌の中の蕾を父が手放さぬ
 蕾つくひとりが生まれ一人の死

岸本 宏章 森田 和夫 園山多賀子 高田 星子 宮崎シマ子 三宅 不朽 日野 愿 河内 天笑 湯浅 馬洗 立蔵 信子 中村 直子 井上 信子 前 たもつ 山田 止水 古川喜美子 出口セツ子 板山まみ子 小西 幹斉 塩谷 幸子 松岡千恵子 田頭 良子 鷺見 正子 福本 英子 榎山 隆盛

今はただ蓄の形をしてねむる
洗顔クリーム蓄のひらく日は近い

蓄まだ用心深くしゃべらない

教科書の裏から蓄ふくらんだ

純白の未来を抱いている蓄

天地無用つぼみが入っているのです

冬を割る梅の蓄の静かなり

椿谷の蓄と通うものがある

子守唄たくさん聞いてきた蓄

蓄だんまりゆるりゆるりとほとびるよ

住

此岸から桃の蓄をさし上げる

蓄から路線がちがう哀しさよ

蓄ひびいて燎原となる椿

かじかんだ手で庇われている蓄

大きな大きな蓄をあげる仏さま

人

死にたくて来たが桜はまだ蓄

蓄から華へ祈りを食べ尽くし

蓄から華へ祈りを食べ尽くし

天

中宮寺まさに蓄の弥勒仏

軸

古木ながらも蓄に乳を飲ませたや

福井 桂香

奥山 晴生

小林由多香

林 荒介

土田 欣之

徳山みつこ

佐藤 季穎

原 章峰

松本 文子

春城 年代

諏訪 夕香

坂田和歌子

白根 ふみ

木本 朱夏

森中恵美子

新家 完司

池 森子

池 森子

小林すみえ

砂

久保正剣選



砂浜の指からもれる春を聴く

平成不況心に砂を噛む思い

惜敗の砂と涙は生きるバネ

砂の道子に足跡は残さない

一握の砂涙を吸った跡がある

薄氷も熱砂も踏んできた卒寿

テポドンも黄砂も降って来る列島

リハビリの足首に添う砂袋

新世紀の音靖国の玉砂利に

十指からこぼれる砂よ煩惱よ

鳴き砂は還らぬ青春の挽歌かも

拉致を見た砂は行方を語らない

許さねばすぐに崩れる砂の城

鬼の面サンドバッグに張りつける

神様のジョーク鳴き砂星の砂

まさかまさかに砂袋にも役がくる

平川 幸枝

小林 妻子

高杉 千歩

藤田 泰子

浅野 房子

山本希久子

樋口 冬虹

栗田 久子

古川喜美子

神夏磯典子

井上 信子

福田 満州

奥田みつ子

榎山 隆盛

西出 楓楽

田中 亜弥

恋に砂かけると急に燃え上がる

骨だけが砂に臓器は移植され

砂の城核に守られてる平和

涙はもう出ない瞳の奥まで砂漠

砂の城蟻一匹が虚勢はる

砂文字と一緒に消えた夏の恋

卒園の砂場に残すたからもの

知事選の食いぶちとなる都市砂漠

女ひとり踊りつづける砂の上

バンカーへ入れたボールが拗ねている

水打った玉砂利凜と客を待ち

一粒の砂にも広い天がある

落日の砂の器に盛る喜劇

今もなお爆音を聞く星の砂

砂かぶり行司もたまに落ちてくる

砂を噛む思いざらつく古日記

佐用姫の思い今年も黄砂降る

昭和史の恥部に黄砂がふりつもる

指宿の首へ差別のないシャベル

砂まみれになって私も遊びたい

子の爪を切ると砂場が見えてくる

真実は噛んだ砂から知りました

風が哭く砂丘は情緒不安定

立蔵 信子

出口セツ子

岩佐ダン吉

池 森子

平田 香子

大石あすなろ

山本 半銭

榎本 吐来

山本 玉恵

神原 文

鶴田 哲郎

矢内寿恵子

一本 勇太

濱田 良知

村上 靖雄

傍島 克治

志田 千代

原 みさを

嵯峨根保子

足立由美子

江口 度

和田つづや

川上 大輪

砂を握りしめて少年立ちあがる

泣き砂が泣くと女はよく笑う

貝になりたいそう言った八月の砂

砂がでて井戸は疲れたなと思う

生きろ生きろと囁いている砂時計

罪いくつ秘めているのか砂が鳴く

磨き砂母は綺麗に皿洗う

公約を砂の器に盛って出す

禅寺の砂は箒で並ばされ

佳

ころすには少々足りぬ砂の量

青春の影を押さえた砂時計

声が尖がり出す砂まぶれの手足

風紋よ消すな少女の拉致の跡

ハンサムにあっさり砂を噛まされる

人

茫洋と砂漠に溶けて行く駱駝

進まねば凭れる物がない砂漠

地

だまし絵の中で砂上の恋をする

天

軸

腹芸も才覚もなく砂に伏す

桑原 道夫

森中恵美子

片岡智恵子

佐藤 季穎

高瀬 霜石

牛尾 緑良

福本 英子

田辺 鹿太

高島 啓子

板野 美子

仁部 四郎

林 荒介

阿部 光雄

田頭 良子

中野 健吾

西村りつえ

小林すみえ

竹

小島 蘭 幸 選



竹の子のときは良かった甘い風
 竹光で心切られたことがある
 祖父の遺訓が竹の節目に置いてある
 単細胞だから上手に竹を割る
 竹光のような夫とお汁粉屋
 竹人形腰のあたりが美しい
 朱竹画を飾る寂しい暮らし向き
 竹筒の香りが美味しい酒にする
 青竹よ息子に嫁がまだ来ない
 竹の子生活五年位は生きられる
 ししおどし別れ話はおんなながら
 竹やぶをくぐると無垢になれそうだ
 竹割ったみたいなのや空っぽや
 春風も吹雪も好きな若い竹
 竹踏み毎日百回グイエツト撈らず
 答えてはくれぬあなたと似てる竹
 木に竹を接いで新世紀に生きる

池 森子
 松本 文字
 春城 年代
 矢内寿恵子
 山崎寿々子
 小西 幹斉
 木本 朱夏
 清水 潮華
 田中 輝子
 徳山みつこ
 関口きよえ
 森井 菁居
 藤原 一志
 藤田 泰子
 河内 天笑
 立蔵 信子
 春城 武庫坊

竹のように育つか地域振興券
 竹の子よまだストレスはないでしょう
 竹馬で昔のぼくに逢いに行く
 少年に翼をくれた竹とんぼ
 言い訳はしないきりりと竹の天
 しなやかな竹になろうよ大人たち
 竹とんぼ兄はとっても偉かった
 竹藪にのらくろの顔吊っておく
 地鎮祭の竹 青青と神を待つ
 若竹の初々しきを見習おう
 竹林近道なんぞありません
 竹藪がざわめき人間を裁く
 いつまでも父は竹とんぼを捨てぬ
 竹のように花を咲かせてから死のう
 骨拾う竹の箸から零す
 少年がナイフになった竹とんぼ
 祭壇にする青竹を組んでいる
 懐の辞表竹光かもしれぬ
 地下茎はスクラム組んだ竹の天
 竹の花きりつと咲いている勇氣
 雪折れの竹の下には父の墓
 青竹をざっくり伐って亡父と会う
 癌封じの酒は多めに竹筒へ
 雨後の竹競争心はありません

森中恵美子
 井尻 民子
 波部 白洋
 武本 碧
 小山 紀乃
 山本 礫
 植田 一京
 中山おさむ
 藤解 静風
 西原 艶子
 太田扶美代
 村上 剛治
 政岡日枝子
 宮崎シマ子
 中井 昭子
 土田 欣之
 八木 千代
 三宅 保州
 林 荒介
 亀山 緑
 牛尾 緑良
 森下 愛論
 前原 正美
 榎本日の出

老人力の時代青竹でも踏んで

ししおどしあなたを呼んでいるのです

竹とんぼ昭和の風を連れてくる

竹馬が出来ぬ息子の一輪車

笹酒を飲んだ長生きできそうだ

鬼ヤンマを連れて戻った竹トロンボ

竹踏んでいのちのほかになにもなし

竹の皮に包んだ梅紫蘇よ母よ

切り口に水の匂いにする真竹

竹を揺るとグリム童話が落ちてきた

佳

情熱を少し下さい火吹き竹

竹とんぼぶんわり未来へと飛んだ

おふくろが大事に使う竹の箒

名人に吹かれて尺八になれた

竹藪で暮らす臆病な翁

人

竹にも曲があったのがあるそれが僕

地

核兵器しよせん竹光ではないか

天

黙秘権を貫く一本の竹よ

軸

竹の器に情熱というものを盛る

青木 勇三

瀬川 幸子

高瀬 霜石

坊農 柳弘

高須賀金太

山下 省子

泉 比呂志

前田 咲二

古久保和子

阿部 光雄

川上 富湖

宮本かりん

高田美代子

樋浦 桜竜

田頭 良子

新家 完司

岩佐ダン吉

梶原サナエ

喜

小松原 爽 介 選



完走の喜びテープ切れずとも

復活の喜びひこばえと伸びる

胎動へ未来のババの手を誘い

喜寿の父余命余命と言いつぎる

納得の百円となる喜捨をする

母泣かすこんな小さい恩返し

喜びを隠すおかしな父の顔

喜怒哀楽その数ほどのしわがある

コーナーに座リニコニコ喜寿ばかり

突然の帰省叱られ喜ばれ

亡母の喜ぶ嘘を言うてたことがある

悲喜愛憎詰めて都会の観覧車

恥ずかしいほど大袈裟なのし袋

役場の棚に喜怒哀楽が置いてある

思い出は悲喜こもごものクラス会

即興曲弾き終え今日はねむります

天地無用スローガンにして喜寿の坂
喜びの本音誰にも触れさせぬ

都倉 求芽

瀬川 幸子

前原 正美

田中 正坊

遠山 可住

原 みさを

秋元 てる

堀 良江

富山ルイ子

矢倉 五月

西口いわゑ

出口セツ子

平田 香子

櫻庭 順風

大石あすなる

岡本 花匠

久保 正剣
林 瑞枝

嬉しくて黙って爪を切っている
 目を閉じてきく喜びが倍になる
 生きている喜びさえも忘れかけ
 一幕の喜劇でしめる朝ごはん
 酒提げてきた喜びはほんまもん
 悲しみが底に沈んでいる喜劇
 喜びをかみしめている無の時間
 無一物 喜ぶことは多くある
 観客の居ない喜劇をくり返す
 くだらない喜劇だったな自分史は
 喜んで死ぬともっともらしく言う
 喜びは向けた背中に語らせる
 喜びを小出しに花の種を蒔く
 孫が来る靴が散らばる喜のかたち
 歯を抜いてみせる取って置ききの喜劇
 喜びの死角でユダと手を結ぶ
 歓喜天とパントマイムで通じあう
 喜んでいのか鬼の目に涙
 留守勝ちの私で妻を喜ばす
 喜ばぬ老父のオムツ替えている
 喜びは小さくてよし豆を煮る
 幕下ろす時は喜劇になっていた
 肩叩き合って喜ぶ手話の果て
 噛みしめて喜びとなる父の櫛

前田 咲二
 太田扶美代
 鴨谷瑠美子
 森田 和夫
 玉利三重子
 宮園射月芳
 灰原 泰子
 小島 蘭幸
 岡 あきら
 岩井 三窓
 吉道航太郎
 栗田 久子
 御園 孝子
 岡 良三
 川上 富湖
 田辺 鹿太
 森中恵美子
 神夏磯典子
 山本希久子
 川端 六点
 西出 楓楽
 谷口 義
 榎本 吐来
 亀岡 哲子

喜びのかげの涙が美しい
 寂しくて喜劇のような日を過ごす
 喜びの絶頂にいてこわくなる
 正直で喜ぶ顔が隠せない
 喜んで出席と書く恋敵
 よろこびの蓋を独りで開ける酒
 形状記憶のように右頬からゆるむ
 喜びも見せず軍手を脱ぐ男
 三食がおいしいことも喜ぼう
 喜びも悲しみも皆過去形に

佳

喜びは鱗一枚落ちる音
 喜怒哀楽そのときどきに花を買う
 喜びの昨日は跳べた水たまり
 ロボットに喜怒哀楽を教えるな
 鳩尾に喜劇役者の涙壺

人

喜怒哀楽紡ぐおだまき果てしなく

地

長持唄きいたか天国の妻よ

天

喜怒哀楽 所詮ひとりの飯の嵩

軸

無一物だが血縁に囲まれて

奥田みつ子
 植田 一京
 児玉 蛙
 岸本 孝子
 吉道 時子
 土田 欣之
 板野 美子
 大森 一甲
 高田美代子
 浅野 房子
 池 森子
 嵯峨根保子
 中井 昭子
 寺川 弘一
 西村りつえ
 坂上 高栄
 中林 酔虎
 梶原サナエ

港

泉 比呂史 選



寅さんがやって来そうな港町

このわたし捨てた男を待つ港

街にとられた子を今日も待つ港の灯

じつくりと港と先を話し合う

消印に港が匂う娘の便り

気にかかる港をひとつ持っている

慰謝料をかもめも聞いている港

どの港にも請求書待っている

妻の港へまっすぐ帰れない男

どの胸も母の港を抱きしめる

霧が深くて明日の港がよく見えぬ

出て行つたきりへ港の灯が消えず

すり切れた絆の浮いている港

傷ついた船をやさしく待つ母港

ポケットの海図がいつも呼ぶ港

ドラの音と約束ばかりする港

ポトルシップが出港合図待っている

高瀬 霜石

川島 諷云児

吉村 一風

足立由美子

大石あすなろ

立藏 信子

中野 健吾

河内 天笑

山本希久子

小山 紀乃

早崎 和子

遠山 可住

田辺 鹿太

中村 直子

牧瀬富喜子

西村りつえ

小林 周信

赤い靴はいた少女を待つ港

港を出ると狂う男の羅針盤

足の長い男がひとりいた港

故里の港たつぷり寝溜めする

雨の港下手な台詞が濡れてくる

夕映えの港で再起かんがえる

流水の港は春の準備する

還らない人いつまでも待つ港

トレンチコートの男が似合う港町

夜光虫 港は別れくり返す

きな臭い匂いを嫌い抜く港

真っ直ぐに帰る港のある顔だ

騙されて港の女老いてゆく

軍服と別れた風に逢う港

沈む日を海の底まで抱く港

港の灯 逢いたい人をだぶらせる

母のいるところが港だと思ふ

手を振った港忘れるはずがない

とうさんに会える港の絵を描いた

名ばかりの港でうけた恩がある

平和っていいな港の万国旗

合鍵を持たぬ男の港町

乾杯のグラスが捨ててある港

放心のわたしを濡らす港の灯

河合 茂雄

川上 大輪

小島 蘭幸

吉道 時子

古川 洋子

植田 一京

菱田 満秋

恒松 叮紅

吉川 寿美

関口きよえ

波部 白洋

細川 稚代

井齋 一齋

貞森 南花

松下比ろ志

吉村 雅文

西出 楓楽

原 章峰

稲葉 冬葉

田中喜代志

鷺見 正子

楠 昭子

瀬川 幸子

森 茜

つぎはぎの恋をしていた港町
寄港した町に指切り置いてくる

見送った港テープも淋しそう

子が帰る港はいつも空けてある

沖をめざすものを港は止められぬ

乗りついで母の港に辿り着く

港から一番電車に乗る魚

いつ来ても母の匂いがある港

誰も知らない港を父はもっている

不真面目な男を待っている港

傷口を拭きに帰ってきた港

跡継ぎはきつと戻って来る港

おふくろと書いてたら泣けてくる港

百ワット点けて娘を待つ港

うそつきの女はいない港町

両手振る人が小さくなる港

わっと泣くために港へ帰らねば

兄嫁に親を頼んである港

母の港の錨は錆びることがない

平松かずみ
児玉 蛙

前川千津子

住谷 石舟

八木 千代

前 たもつ

古久保和子

一階八斗 醜

山本 礫

高杉 鬼遊

榎本 信治

森井 菁居

灰原 泰子

川上 富湖

谷口 義

椛元 世津

日野 愿

小池しげお

役

磯野 いさむ 選



一九九九年そろそろ役を降りようか

聞き役に徹し切れずに荒れる海

十指みな役わりがありこの世かな

胸のばらよりも美人の役どころ

役者だな記憶にないと言いのがれ

好きだからドンキホーテの役演ず

献体に役立つ本を読んでいる

しまなみ海道 静かに役を終える船

おどけ役 寡黙の人の裏の顔

脳死者を主役にドラマ始まりぬ

役どころ弁え二列目を選ぶ

脇役に徹してブルーリボン賞

夕鶴に命を賭けてきた役者

役満で盛り上ったとか午前様

新境地開拓 女優の汚れ役

勝負あり同期の友が重役へ

松本 文子

前原 正美

徳山みつこ

森中恵美子

住谷 石舟

小野句多留

小池しげお

岡 良三

米田 恭昌

山本希久子

平田 香子

御園 孝子

土田 欣之

古今堂 蕉子

藤村 亜成

長谷川 呂万

遊ぶのも芸のこやしと言う役者
 すごい役者だひとり芝居の一時間
 邪魔だとは言えず相談役と呼ぶ
 どんでん返しがあつたある日の斬られ役
 テトラポットただそれだけの役だった
 反論を持たぬわたしへ役がくる
 リサイクル僕もまだまだ役に立つ
 自分史に兵役のこと語れない
 役目から裏口だけは閉めておく
 後継ぎの役職も来て通夜の席
 役者だな九回裏の大見せ場
 ミスキャストだったと思う視聴率
 賞味期限切れるの待つて役が来る
 沓が鳴る役 松明が古都の闇
 カーテンコールが止まらないはまり役
 おんぼろだが役に立つならドナーカード
 老練を納得させる吉良の役
 男役にひと目惚れしてツカ通い
 役柄をわきまえて御辞儀しています
 未来凶の指揮者はやはり父の役
 松明を振る役僧も燃えている
 ふとこで草履温める役どころ
 無礼者 一喝だけの役である
 名優に当たり役あり頼被り

井伊 東吉
 中林 酔虎
 藤原 一志
 青木 公輔
 糀谷 終一
 神原 文
 海老池 洋
 日野 愿
 舟木与根一
 垂井千寿子
 片岡智恵子
 大村美千子
 酒井 一壺
 川原 章久
 一階八斗醜
 楠 昭子
 池永 正匍
 堀江くに子
 立蔵 信子
 亀岡 哲子
 山本 半銭
 角野 仁清
 板野 美子
 西村りつえ

役付きになってまさかのリストラに
 悪役に徹した吉良の白いまげ
 やんちゃくれの役なら私にも出来る
 たつた一度の老け役に賭け齒まで抜き
 吊橋を静かに渡る男役
 生涯現役 春の明るい靴をはく
 小津安の世界に笠の役どころ
 男役こなした母の太い眉
 どの星も何かの役があるはずだ
 父役もした母が逝く雪の日に

住

酒を断つ小さな役を果たすまで
 聞き役は不得手私はナルシスト
 主役にはなりたくないという写楽
 主役にはなれぬパセリに自負がある
 広辞苑四版役目終え静か

人

朱の鳥居 鹿には鹿の役があり

地

モナリザの代役位なら出来る

天

大阪弁の役は何時でも地でいける

軸

リスク多く投資相談役つらし

田中 節子
 川見 絹子
 沢田 和子
 田頭 良子
 牧浦 完次
 原 みさを
 中田たつお
 高瀬 霜石
 新家 完司
 関口きよえ
 田中喜代志
 和田つづや
 前田 咲二
 鍛原 千里
 西出 楓楽
 三宅 不朽
 灰原 泰子
 楠見 章子

大会に参加して (到着順)

堂々の横綱相撲

京都 奥山 晴生

川柳塔創刊75周年記念川柳大会、ご盛会で
おめでとうございました。

駅前の案内から受付、会場の設営まで何の
手落ちもなく、エレベーターのボタンを押す
係まで配置されたのには恐れ入りました。ス
タッフの層の厚さを見せられた思いです。

大会プログラムに川柳塔社75年のあゆみを
付記されたのは、川柳塔社の歴史と共に、川
柳界の時の流れまで知る事が出来、いい企画
でした。

織田正吉氏のおはなしを楽しく聴かせても
らいました。暖房が効き過ぎて少し眠くなり
ました。

入選句発表はトップ級選者の披露を楽しみ、
多くの佳句を耳に留めました。これは耳福と

言うものであります。

第一部の司会者はベテランの岳人、楓楽の
両氏。第二部は若い柳弘、朱夏の両氏が司会
と配役の妙も見せて頂きました。月子さんの
踊りは何時見ても美しく、きゃらばくのお二
人さんのコミカル、上手な奇術、吠笑氏の河
内音頭と宴会の花形、芸達者が揃っているの
も羨しい限りです。

川柳大会は川柳塔社の、堂々たる横綱相撲
に圧倒された一日でありました。

(都大路川柳社)

地方でも大会を

和歌山 牛尾 緑良

記念川柳大会の会場は全国からの出席者で
たちまち満席になりました。それは川柳塔社
の活力を見るようでした。しかし会員全体に
すればほんの一部の方々でしかありません。

路郎先生の御指導をいただいた、生々庵先
生に、栞先生に教わったというお話を聞くに
つけ、最近の大会は大阪に集中し過ぎてい
るのではないかと思います。活発に大会をする
柳社もありますが、本社の先生方のご指導に
接したいと思いつても機会を得られない会
員も多いと聞いています。県または地方単位
に川柳塔社の支部を置いて、年に一度でも大
会なり勉強会を開いて直接ご指導をいただ
くといった計画は無いものでしょうか。それが
会員の増加と向上につながると考えます。

国会も地方分散の時代です。本社の大会は
「川柳塔まつり」一本にしぼって、余力を地
方の土台づくりにまわしてもらえないもので
しょうか。大会の感動を分かち合うためにも
次世代に「あの先生のご指導をいただいた」
と語り継ぐためにもご一考をお願いします。

大会の運営には多大な労力が必要です。今
回も本社の皆様を中心に滞りなく進行しまし
た。私は準備、運営、締めくくりの何にも協
力出来ませんでした。いつか私共の近くで
開催される日が来れば、川柳塔社の礎石のひ
とつとして協力を惜しまないつもりです。

日頃お会い出来ない方々との交流も出来て、
春間近の寒さでしたが暖かい思いを抱いて帰
路につきました。

川柳塔万歳

鳥取 土橋 螢

一九九九年三月五日満七十歳の柳歴十五年余命幾許、明日がわからないのちを川柳塔の光に照らされて今日を生かされている。三月二十日朝七時鹿野町役場前で新家完司さんの車に便乗させていただき、川柳塔創刊75周年記念大会へ一路大阪へ走る。十一時に会場ホテルアウイーナ大版着、早速受付で句箋をもらい投句して空席を探す。満員に近いので前の方にあつた席を確保、三〇〇人ぐらいかなと予想していたが受付で聞くと四〇〇人越したと、驚いて嬉しくなる。「さすがわが川柳塔だな」と満足する。

師と仰ぐ薫風先生のお顔色もよいし、天笑理事長ご夫妻にも対面「お世話さまです」とひと言挨拶をする。リボンをつけた役の方々はとても忙しそだがみんな笑顔の歓迎ぶり「やっぱり来てよかつた」と感謝する。大会はリーダースhipよくスムーズに運営され、鳥取勢の呼名連発で嬉しいことばかり。懇親宴も和気藹藹に進行され、私も浮かれて十一

月十四日の鹿野みか月20周年大会の選者に主幹の薫風先生と番傘の森中恵美子先生をお願いしてしまつた。酒と女に弱いと言いなから、わたし如き者のお願いを受諾していただいたことが涙が出るほど嬉しかった。これも川柳塔のお蔭と感銘した。たくさんの先輩と柳友に守られていまの私がある、鹿野みか月がある。

二〇〇二年(平成十四年)国民文化祭とりも、川柳塔の輝く志を同じくする者、東西南北相寄り助けてほしいと思います。「後に続くことを信ずる」ということばを思い出しながら川柳塔万歳を唱える。ありがとうございます。

75周年の歴史を

感じて

米子 白根 ふみ

初めての本社大会に出席してその規模の大きさに圧倒されました。75周年大会、本当にお目出度うございました。

会場へ入ると木社の先生方がお迎え下さり急に温かいものを身近に感じ、遅れ気味に到着した焦りが一度に消え、また前日からのき



大阪市内観光(住吉大社)

やらばく一行が待ち受けて下さり、無事合流できて一息つきました。

我がきやらばくの八木千代さんが選者なので、是非と思つて参加させて頂きました。

周囲は群雄割拠とも思える方々でむんむんとする中、いたたた「川柳塔社75年の歩み」を見ますと、大先輩の方々の気魄と並々ならぬ苦心で今日に至っている歴史が窺え、礼讃せざるを得ませんでした。と同時に今では全国ネットワークとも言える、地域への滲透の深さにまたまた敬意を表しました。

選者の先生も存じている方々で、息を凝ら

して聴き入っていました。四百余枚（計八百数十句）の選句の披露は嘩かしのことであったらうと察しました。

閉会後帰りを急ぎながら皆様に挨拶をして一行を待っていましたところ、偶然、薫風先生にお会いでき、石垣花子さんに優しい言葉をかけて下さり、これで有終の美となりました。川柳万歳！この気持を地域へ繋いでゆきたいものと思っております。

終りに、この一大イベントをお世話下さいましたスタッフの皆様、本当に有難うございました。

改めて75周年の重みを噛みしめながら、柳塔の発展を心よりお祈りいたします。

よくもまあ!!

唐津 山門 幸夫

桜の便りしきりの三月二十日、体調芳しからぬ儘、足腰不自由の老妻の手を曳き、空港では車椅子の扶けを借りて欠かしたことの無い各種の大会に参加、橋高主幹はじめ笑顔笑顔の柳友の渦に巻かれて握り合う手の暖かさ及びと感激は至上であった。時代遅れの幼稚

な作句は何時も全没ではあるが、凄絶痛恨の若い時代と現世相を重ねて終章を脱兎の如く走らうと念願して居る今日この頃である。

主幹ご労作の句集二冊「よくもまあ!!」と感動しきり、「川柳を食べ生きてる」のお言葉が痛い胸を打つ。至宝更に自重自愛川柳の真髓を叩き込んで欲しい。翌日、故栗先生のご令嬢薫子様に八尾まで車を走らせて頂き、仏前に念願の合掌が叶ったことが幸せてあった。

機会は度々あったが、美与子未亡人様の健康上ご遠慮申し上げて居た次第である。会いたい会いたいと繁くお便り頂いて居たので橋高主幹ご案内以来久しぶりの訪問であった。平成四年十月十七日秋田―弘前間の車中のご夫妻との出会い以来、師弟姉妹のもつた



河内天笑・月子夫妻

ない交際が続いた。

ご立派な庭苑に向いた窓際の机には端溪の硯と大小の沢山の筆がその儘残されており笑顔の写真に「よう来やはった」と語りかけて頂いて、ふとこみ上げるものがあつた。美与子夫人と老妻はずっと手を握り合せて涙々；不変の愛と互いの健康を誓って数時間の楽しい訪問であつた。

出席できたことに

感謝

弘前 櫻庭 順風

主幹波多野五楽庵「川柳塔みちのく」の一行が大坂入りした途端に、ダン吉氏・哲郎氏から歓迎の洗礼を。お世話様でした。

大会式典では、作家織田正吉氏のおはなしを次のように拝聴しました。

学生時代路郎著の書籍でその謙虚な人柄にふれて益々川柳に関心を持つようになった。吉本だけに笑いはあるのではない。人間のある所には笑いがある。日常生活に馴染んで感性を失いがちであるから、観点を替えて驚きを得る、感動を得るように。それが文芸であり芸術であると思う。

煙草の煙の出し方、車中の居眠り、神戸市で猪・まむし・オオカミが出る。観る金魚が餌に、授業のベルは休みのベル、水が溢れたのは浴槽の不足、ボタンからシャツがとれた、動物園の猿から視る、大漁は魚の弔い、壊れた月、来日外人の第一印象は日本人の多いこと、神戸罹災で普段忘れていた水の大切を識った、次の句など具体的な例を挙げて、道きいてそのあたりまで連れになる

傘もって傘ささぬ人春の雨

入選句発表は主幹の「高」ほか七題、誌上でお目にかかったような先輩の方々の披露、呼名、秀句にときめく一瞬でした。

川柳塔の同人の縁と深い絆を再認識して、大会に出席できたこと感謝しています。参加者四二五名の大会運営を円滑に捌いて戴いたスタッフの皆様は厚く御礼申し上げます。

五七五の不思議な

魅力

出雲 小玉 満江

去年に続いて今年も意義ある大会に参加出来る大きな喜びとしております。今年の参加者は四二五名。今や川柳ブームと言われ



川柳ねやがわのコーラス

るのもおして知るべしであると思います。

薫風先生のごあいさつ。祝辞がありまして、作家の織田正吉先生のお話を聞くことが出来ました。猪が子連れてバスを待っているお話、外国の人から見て日本には日本人が多い。水族館のお魚の餌のお話等、面白おかしく会場は楽しい笑いに包まれました。忘れていたものに気づき、感性を磨くようにとおっしゃいました。私達の年になると、とかく老人力が入り込んで参ります。

そして子供の発想は面白く、子供と会話し

ヒントを貰う等々、なる程と思いました。

いよいよ入選句の披露となりましたが、八百五十句の中から六十句とはきびしい。緊張の中に発表が始まりました。諸先生の披露は立派だと思いました。秀句はより秀句になると思えました。そして特徴ある呼名に、会場はどよめきの声が上がりました。あれも、これも勉強の足りない事をかみしめました。

予定は大幅にずれて五時三十分より懇親会となりました。やさしい大阪弁に包まれて、ごちそうを頂きを重ねました。見事なマジックショウ、カラオケ、踊り、そして最後は川内叭笑さんの美声で、河内音頭の踊りの輪が出来ました。皆心一つになって、輪になってエンヤコラサードッコイショ。五七五の不思議な魅力に取りつかれてしまいました。お世話下さいましたスタッフの皆様ありがとうございました。

大満足の観光

熊本 永田 俊子

川柳塔創刊七十五周年記念川柳大会に出席させて頂きましたが、春とは名のみ冷たい

小雨が降る中にも拘らず、広い会場を埋めつくすほどの御出席に圧倒されました。

記念式典においての諸先生方の意義ある御講話に深い感動をおぼえ、田辺聖子女史の御本に描かれています、その礎を築かれました諸先生方の御骨折りに思いを馳せ、今日の輝かしい大会を天上から御覧になって御満悦のことと拝察いたしました。

また諸先生方の入選句発表の明朗なお声にお応えしての力強い作句者のお声にはげまされる思いで、今更のように自分の無力を感じましたが、大変教えられることが多くこの大会に参加してよかったと思えました。

そのあと六時頃からの懇親宴会において、和気藹々たる雰囲気にも包まれての色々な芸も大変たのしく、お名前だけ存じ上げてお逢いしたいと思っていた方から、お声をかけて頂いたりして本当にうれしく思いました。

翌日は観光バスで広範囲にわたり御案内頂き、法善寺横町や道頓堀、住吉大社など回り沢山の句碑にも接し、御説明役の方の名調子で大満足の観光でしたが、鬼遊先生や楓葉先生がわざわざ御同行して下さって色々お気遣い頂きましたこと、何よりうれしく大会に出席してこそその川柳につながる御縁をありがたき思い、皆様方の暖かいお気持を胸に抱いて

帰途に着きました。

大会運営への御骨折りに、最後になりましたが本当にありがとうございました。

幸せで一杯

横 浜 後 藤 早 智

大阪の柳友の笑み受け止める

四百人大会の余波二次会へ

芸達者居て早速の唄踊り

味も良し食い道楽の名に恥じず

懇親会河内音頭で締め括り

再会を約し難波の地を離れ

遠く横浜の地であおば川柳会の輪に連つて

ほぼ四年が経ちました。一年に一度程、薫風先生にお目に掛かる機会はありませんでしたが、初めて川柳塔本社大会（句会も含めて）への参加が叶いました。若輩の私が同人の推薦を戴いて早くも一年、暗中模索の毎日ですが、今日こうしてこの地に集うことが出来て幸せで一杯でございます。大会の規模の大きさに驚きながら、初対面の皆様のお心の広さ温かさに触れて、嬉しく楽しい、そして思い出深い

旅となりました。

ありがとうございました。

御芳志御礼（敬称略・順不同）

時の川柳社 都大路川柳社 番傘北斗会
奈良番傘 城北川柳会 川柳塔まつえ吟社
川柳塔きやらぼく 川柳塔みちのく 翠洋会
竹原川柳会 川柳塔唐津支部 いずも川柳会
川柳塔おとり 京都塔の会 ローズ川柳会
弓削川柳社 川柳塔鹿野みか月 川柳塔なら
吹田川柳会 せつつ川柳万画会 美研アート
西宮北口川柳会
仲川たけし 泉比呂史 齊藤俊輔 平山繁夫
磯野いさむ 奥山晴生 岩井三窓 大坂形水
小松原爽介 小西幹斉 濱野奇童 佐藤一粒
藤本静港子 菊沢スミ 月原宵明 森下愛論
森中恵美子 小島蘭幸 塩谷幸子 佐藤季穎
西尾美与子 板野美子 西出楓葉 松本文子
中田たつお 山本 磔 原 章峰 木本朱夏
箱本紅法師 土橋 螢 中原颯人 岩切康子
小林トメ子 永田俊子 榊原秀子 井上照子
本間満津子 稲葉冬葉 茨木 修 長浜澄子
石倉芙佐子 池内かおり 瀬戸まさよ
出口セツ子 西口いわる 山本希久子
神夏磯典子 加川はく文 奥田みつ子
多田多香

創刊75周年記念川柳大会参加者

総数 四五五名・敬称略・順不同
当日欠席の事前投句者を含む

〔青森〕 一戸ツネ	岡本花匠	櫻庭順風	大内朝子	大谷篤子	大塚節子	太田扶美代	田中正坊	田中節子	玉置重人	柴田英千子
諏訪夕香	諏訪柳々	高瀬霜石	奥田良子	岡 良三	岡本久峰	岡本吉太郎	谷口 義	辻 葉	辻川慶子	柴本ばっは
波多野五楽庵		福土慕情	籠島恵子	梶本哲平	片岡湖風	柿花紀美女	土田欣之	妻谷重三	津守市子	関口きよえ
〔東京〕 佐藤孝穎			加藤 基	角野仁清	金井文秋	梶川雄次郎	津守柳伸	鶴田哲郎	寺井東雲	瀬戸まさよ
〔神奈川県〕 菊地政勝	後藤早智	小野句多留	金崎峰子	亀山 緑	唐住 実	片岡智恵子	寺井柳童	寺川弘一	寺田甚一	高須賀金太
清水潮華	菱田満秋	山下省子	河内天笑	河内月子	川内叭笑	神夏磯典子	堂免路子	友碓雅子	内藤光枝	高田美代子
〔愛知〕 佐藤一粒			川端一步	川端六六	川原章久	鴨谷瑠美子	中井アキ	中澤伽羅	中野健吾	田辺正三郎
〔岐阜〕 鶴留百合	板山まみ子		川見絹子	神原 文	木下眞作	川上あき子	奈良 司	西出楓楽	西村梨里	綱木けい子
〔三重〕 青木勇三			北畑金治	北村賢子	橋高薫風	川久保睦子	波部白洋	浜口年人	濱田良知	出口セツ子
〔京都〕 井上信子	稲葉冬葉	高島啓子	吉川寿美	吉川 涉	楠 昭子	川島颯云児	早崎和子	林佐太郎	原さよ子	間屋啓二郎
奥山晴生	山海友照	田中笑風	栗田久子	桑原道夫	児玉 蛙	神原まさと	原 苑子	板東倫子	日野 愿	徳山みつこ
中林酔虎	山本 礫	井上智恵子	糀谷終一	小糸昭子	小西幹齊	岸野あやめ	樋口冬虹	平井幸枝	備後辰郎	富山ルイ子
〔大阪〕 阿部光雄	阿萬萬的	安藤寿美子	小林周信	近藤豊子	後藤正一	北岡波留吉	福田満州	藤井正雄	藤田泰子	友田茶の子
浅沼正雄	浅野房子	井伊東吉	齊藤俊輔	酒井一壺	坂上高栄	熊代美智子	藤村亜成	藤村メ女	藤本一道	中川千里志
井齋一齋	井尻民子	伊藤 武	坂本晴美	里 小路	沢田和子	源田八千代	堀 良江	堀江光子	芳地裡村	中田たつお
一本勇太	井上次郎	井上照子	塩谷幸子	塩満 敏	志田千代	小池しげお	本田智彦	前たもつ	前田咲二	中山おさむ
井上直次	池 森子	石原靖巳	清水絹子	清水利武	杉澤 汀	古今堂蕉子	前田登子	前原正美	増田光男	西田柳宏子
石森利昭	板尾岳人	板野美子	瀬川幸子	傍島克治	瀧北博史	小林すみえ	榎本路児	町田達子	松永会美	西村りつえ
岩井三窓	上田 仁	内海幸生	田頭良子	高杉鬼遊	高杉千歩	小林トメ子	松葉君江	水谷正子	宮田肋骨	野村美代子
江口 度	海老池洋	榎本信治	高田星子	高橋一枝	高橋夕花	澤村猪太郎	宮西弥生	三浦 憩	三好聖水	長谷川春蘭
榎本吐来	榎本舞夢	尾形奏子	竹谷弘子	立蔵信子	田中螢柳	篠原いつふみ	三好専平	棕山祥風	村上剛治	長谷川呂万

村上靖雄 榎山隆盛 森 茜 羽森千恵子

森下愛論 森本益弘 矢倉五月 平井美智子

矢野 梓 楊井二南 安永 春 平松かすみ

山本蛙城 山本半鏡 山本翠公 福元みのる

湯浅馬洗 吉川晋吾 吉村雅文 古川喜美子

吉道時子 吉村一風 米澤淑子 堀江としを

脇 正夫 和氣慶一 六村晃一 堀江くに子

松岡千恵子 松本あや子 真野美代子

宮崎シマ子 宮園射月芳 宮野みつ江

宮本かりん 宮本欣史子 村上ミツ子

森中恵美子 八十田洞庵 山崎寿々子

山川日出子 山本希久子 山本扶佐子

吉田わたる 吉道航太郎 和田つづや

〔兵庫〕青木公輔 秋元てる 浅雛美智子

朝倉尚子 泉比呂史 泉 佳恵 池田恵美子

井上松煙 氏林洋敏 大森一甲 一階八斗醜

小熊江美 織田正吉 亀岡哲子 岩倉キク子

刈田泰司 北野哲男 北村紅絵 延寿庵野鶴

黒川紫香 黒田能子 小林一夫 奥田みつ子

小山紀乃 梶元世津 住谷石舟 門谷たず子

田辺鹿太 遠山可住 中井昭子 梶原サナエ

長浜澄子 西内朋月 長谷川淳 木村貴代子

林はつ絵 春城年代 吐田公一 小松原爽介

萩原典呼 平田香子 御影 静 嵯峨根保子

柳川その 山崎君子 山本義子 竹内満寿藏

和田光代 田中喜代志 西口いわゑ

箱木紅法師 春城武庫坊 前川千津子

牧洲富喜子 的場十四郎 松下比ろ志

〔奈良〕石田常念 鍛原千里 居谷真理子

河合茂雄 杉野睦朗 添野 恵 大村美千子

天正千梢 中村直子 西村 茂 黒川正之進

樋浦桜竜 福田秋雄 藤原一志 杉野まつ子

古川洋子 坊農柳弘 牧浦完次 玉利三重子

松田巨牛 御園孝子 宮口笛生 中原比呂志

森田和夫 吉田太一 米田恭昌 山口 卓

〔和歌山〕池永正葡 牛尾緑良 岩本美智子

榎原公子 川上大輪 川上富湖 垂井千寿子

木村初子 木本朱夏 楠見章子 野村太茂津

桜井千秀 武本 碧 田中輝子 古久保和子

田中みね 玉井豊太 玉置当代 山口三千子

中後清史 福井桂香 福本英子 細川稚代

堀端三男 三宅保州

〔鳥取〕青戸田鶴 石垣花子 足立由美子

植田一京 岸本宏章 岸本孝子 木村富美子

小西雄々 近藤佳子 澤田千春 小林由多香

白根ふみ 新家完司 鷺見正子 坂田和歌子

田中亜弥 土橋 螢 西原艶子 橋本多哥由

野坂なみ 林 荒介 林 瑞枝 政岡日枝子

原みさを 福田登美 光井玲子 宮木一夫

八木千代

〔鳥根〕尼れいじ 岡あきら 久谷まこと

小玉満江 恒松素子 恒松町紅 園山多賀子

原 章峰 松本文子 森 茂美 舟木与根一

吉岡きみえ 板垣草丘

〔岡山〕今井奎子 小林妻子 寺尾百合子

貞森南花 灰原泰子 濱野奇童 土居ひでの

平山三鶴 山田止水 山本玉恵 矢内寿恵子

大石あすなろ 福原悦子

〔広島〕小島蘭幸 藤解静風 時広一路

三宅不朽 森井善居

〔香川〕池内かおり

〔愛媛〕仲川たけし 月原宵明

〔高知〕赤川菊野

〔佐賀〕久保正剣 仁部四郎 山門幸夫

山門タミ

〔熊本〕岩切康子 永田俊子

祝電拝受(敬称略・順不同)

NHK学園大木俊秀 「上方芸能」木津川計

前田安彦 東野大八 戸井田慶太 都大路川

柳社 中川一 石原伯峯 大神由紀子 鶴か

ご川柳社社員一同 佐藤加津郎 川柳塔おっ

ばご吟社 岡村康裕 月原宵明 越智一水

石倉美佐子 柏井日出子

ネパールの 旅を終えて

藤田 泰子

「ナマステ」の声で私達の旅は始まった。

一月三十日から二月四日まで「ヒマラヤと世界遺産を訪ねるネパール六日、ヒマラヤハイキング」の謳い文句に魅せられての旅であった。

この足で歩けるかしら、もし歩けなくてもヒマラヤの空気を吸って来るだけでもいいか。生来楽天的性格の私だが、ときめきと不安が入り混じる。旅をするとき先入観をもたず、自分の目で見て帰ってから「ああ、そうなのか、そっだったのか」と楽しむのが好きで、今回もそんな調子で旅立った。

まず、ネパールの首都カトマンズ空港に降り立った時「タイムマシンに乗って来たのでは」と、錯覚してしまった。何年か前の日本がそこにあったのだ。

三輪タクシー、中国から輸入したというトロリーバス、天井まで人を乗せ入口には人が

しがみついたまま走っているバス、物乞いの子供たち、信号のない交差点、排気ガスと土埃。その中を私達を乗せた「おんぼろベンツ」のマイクロバスは、まるで軽業師さながら通り抜けて行くのである。

ホテルで眉間に紅い黒子を描いてもらってカトマンズ市内の観光。ダルバール広場は、見事な装飾が施された宮殿や寺院が立ち並ぶ。その中、アンモナイトの化石、手作りのアクセサリー、仏像などを手に持って、日本語で「買う、買う」と言って商人が身辺から離れない。根負けをして買ってまた寄ってくる。物乞いをしている子供と、家の孫達と顔が重なるが心を鬼にして歩く。

経済大国日本、そして私、少し奢り高ぶっていたのではないかしら。知らず知らずのうちには高いところから人々を見下ろしていた事に気が付き反省させられた初日であった。

カトマンズからポカラへ、バスで六時間の道すがら約が交通事故で死んでいるのを見た。また、道路に沿って流れている河の辺でテント生活をしながら宝石を拾っている多くの家族、洗濯しているおばあさんも見えた。

どの顔も優しさに満ち、きれいな大きい瞳でお互いに「ナマステ」。見つめ合うだけでたくさん話をしたような気分になるのだった。

ドライブインでの昼食は、バラバラのご飯に豆のスープ、鳥肉の煮物、小松菜を独特のスパイスで調理したカレー。食後のチャイはお代わりをしたくなるほど風味豊かでおいしいものであった。

ポカラのホテルからノータラのハイキングコースまではバスで四十分。はりきってバスを降りた私は、ヒマラヤ山脈を目の当りにしたせいか、本当に空気が薄いのか、息苦しさを感じ、少しの間立ち竦んでいた。アンナブルナにきているんだという実感が蘇って来るまでに、少し時間がかかった。

「そっだったんだ。今、この大自然に抱かれているのだ」

胸いっぱいヒマラヤの空気を吸い込んだ。そして、一步一步大切に歩いた。涙がこぼれしみじみ来て良かったと思つた。楓葉さん、義子さん、誘ってくださってありがとう。

帰国までの待ち時間、マウンテンフライトでヒマラヤを空から眺める予定だった。しかし、空港で二時間余りも待ったあげく、霧が深くてキャンセルになり、心を残したままネパールを去る事になってしまった。

大阪空港には夢の続きのような粉雪が舞っていた。

霧晴れるまでは待てない待ち時間 泰子

『椿 守』

八木 千代 著

木 本 朱 夏

高橋 治の小説「短夜」に「黄泉の銀花」といふ椿が登場する。島根県の黄泉坂という場所の林で発見された藪椿とも、佗助とも見える椿らしい。

黄泉の銀花とはおだやかならぬ名前前であるが、小説の表現を借りるならば「花はさして深い紅ではなく、その赤みの底にどことなく紫に近いものを感じさせる沈みきつた静寂がある。それが潔としたものを湛えているように見える」と記されている。

八木千代先生の白い表紙の『椿守』を読み終えたとき、私の胸にはこの世のものならぬ黄泉の椿が咲いていた。

桃の木の向うのひと世ふた世かな
夜明けまで山の向こうに行つてくる
わたくしの枕に三日月の匂い

天の川よりゆらゆらともどるなり
夜と朝のはざまの数秒間の湖

漂うは水の世界と今際にも
前世からうけて私の星狂い

これらの句に私は輪廻と転生の思想を感じる。境界をひよいと跨いで千代先生は、彼の世の言葉を吐き出して作品に詠まれているような気がする。

まだ言えないが蜚の宿はつきとめた

椿くわえて春を銜えて歩きたし

わたくしの中を通つて咲く椿

黙つて眠つてそのうち糸を吐くつもり

咲けば散ることをひたすら書いている

椿を媒体として彼の世と此の世を往き来しながら、先生は月の光で齋戒沐浴をされる。

そして激しく想念を吐き尽くされる。

今はたましいの時間で月の下

月の子を産むかもしれないぬ水たまり

ひそやかになまじけを放つ月の弦

潮騒を連れてこの世の月が出る

消毒の時間だ月を浴びに出る

何時のことであつたか美保の関のちいさな港で、千代先生と浜辺の歌を歌つたことがある。

別れの時間が迫つていて先生は、いやいやをするように嗚咽をかみ殺しながら、浜辺の歌を歌われた。

先生は一期一会を此の世の有縁を誠に大切にされる。巫女が袴りつづけたあとのように

蜚が糸を吐き尽くしたように、先生は人の出会うのあとさきに、激しい虚脱感におそわれたいらっしゃるのではないかと思う。

有縁の真ん中に椿が咲いてくれる

書きすぎぬように大事なものに書く

話し相手の眉を曇らせまいと思つ

河口まで月を送つて引き返した

あと何度逢えよう心尽くして逢う

金築雨学さんは跋で、千代先生の作品から

「まじれもなく女」を感じると書かれています。

しかし私は先生の作品は女性を超越していると思つ。それは仏が女でも男でもないように、また日常を超えたところに千代先生の

思いや、袴りの深さが漂っているように見えるのは、私の気のせいであろうか。

椿 私かも男かも仏かも

朝までを壺の椿はどう過ぐす

椿の忌 いとしい人よ死ぬでない

椿の象徴するものは何であろうか。色彩から情熱。散り際は潔さ。また忍耐であり嗚咽であり覚悟であろうか。

先生は全身全霊の力で「椿守」を現世に産み落されることにより、柳人としての覚悟の程を、私達に示されたのではないのでしょうか。

椿守 死なぬかぎりは椿守

飯の名をもつ一世代だけ使いたし

をせぬ城

毎月25日締切・30句以内厳守

編集部

ローズ川柳会

山崎

君子報

萌える野にピンクの素足あればゆめ
 それで結構そばで咲きたいかすみ草
 去年まで萌えた彼方にイエイエ家
 声に出して自分を賞めてみる少し
 絵手紙を書いて楽しい便り来る
 読み書きの出来る幸せ忘れてる
 追伸に感極まったペンの染み
 晴れのちくもりまとめて書いてる日記
 石仏のはほは笑みささう草萌える
 命がけて書いた恋文赤茶ける
 草に寝て空一ぱいに夢を書く
 朝のコーヒーいつか見とれるはたん雪
 六法に身すぎ世すぎは書いてない
 日だまりへ早雑草の芽が萌える
 昔唄ハミングしても独りなり

川柳若葉の会

宮崎シマ子報

また春が来たのに蝶は何故舞わぬ
 もつ少し遊びたかった田実子さん

あずき
 慶子

哲子
 トミエ
 貴代子
 澄子
 いわゑ
 武庫坊
 年代
 はつ絵
 君子
 義子
 笑女
 雅子

面影は温顔ばかり春の雲
 鳥唄うときに何故近く友よ
 お花見の約束もなく逝き急ぎ
 その才で閻魔をけむりにまいてくれ
 田実子のたは楽しみのたであつた
 田実子さん幸せたんとありがとう

川柳塔おととり

原みさを報

三食が弾み浄土は先の先
 三度目の正直愛の平手打ち
 わが家の三強女ばかりなり
 今朝もまた三里の灸をすえて出る
 三脚がみんな知つてる親の愛
 三界に家がないので我慢する
 お隣の境に花の木を植える
 境界線むこうもこっち見つめてる
 独立を境に出来ぬ母の愛
 有刺鉄線そんな境界ありました
 境界のない空だから美しい
 境界が均等法でほかされる
 親子でも金の境目つけておく
 ある境地こえて来ました夫婦愛
 太平洋広がる境が見つからず
 越境の箱揺るも気が引ける
 この川が境界線で隣村
 年末と年始の境鐘一つ
 オベ終り生死の境まださめぬ
 さっぱりとしたつきあいで長続き
 朝シヤワー昨夜の悔いを消して出る

喜美子
 香住
 能子
 弘直
 シマ子
 欣史子
 風花
 艶子
 義弘
 伝住
 邦昭
 道子
 野草
 由多香
 登美
 佳子
 孝子
 宏章
 寛
 千秋
 小生
 彰雄
 富貴子
 崇
 敬之介
 ゆきの
 舎人

ピカソの絵さっぱりしない瞳で見つめ
 ストレスを湯舟に流しさっぱりと
 殻を脱ぎさっぱりとした空気がう
 過ぎし日の思い出つづる日記帳
 悪夢去りいつしか落ちた目の鱗
 十年の恋がやぶれて去っていき
 兄弟でも心に境引いている
 境界の杭が行つたり来たりする

八尾市民川柳会

宮崎シマ子報

兄嫁の誇りで土を守る意地
 情熱が枯れたら土と戯れる
 土だんご作る子供がよく笑う
 衰えの隙間を埋めている香り
 香り失せた女に熱い血が残る
 香を焚きもののけになり逢いにゆく
 何事もなかったように香るバラ
 沈丁花の香りへシヤツを干すとする
 人柄がやさしく香る語り口
 やけくそで強い香水ふって行く
 これからの私を決める吹き溜まり
 ほら吹きで終らなかつたお国入り
 春一番吹き飛ばされた椅子ひとつ
 ふけは飛ばよな私に頼られる
 向い風吹くほどフアイト炎えくる
 ほんのりと男を溶かす風が吹く
 夜桜の冥熱燭が欲しくなる
 ひとつずつ夢が開いてゆくさくら
 桜見のルスをあずかりワンカップ

雄々
 庸二
 以和万津
 紀子
 黙光
 仁子
 清子
 みさを
 弥生
 扶美代
 千里
 欣之
 夕花
 和歌子
 春蘭
 度
 宏
 信博
 年人
 勤
 たもつ
 ますみ
 一風
 東雲
 とみを
 朝子
 哲夫

ありがたいことに今年も桜愛でられる
幼い日七つ釘に見たさくら
へつたいを尊敬してゐる火吹き竹
吹く風が変り男を試される
コーヒッカップくるくる老いのツーショット
カチンカチン嬉しい顔が逢うコップ
紙コップ軽い思想の風にのる
マジシャンのコップのXYZ
ため息がコップに溜まる職さがし
講演のコップに自己陶醉の水
愛を飲み干す記念日のコップ

翠洋会

児玉

書きかけの手紙に濡れている未練
大切な事死んでから思い出し
楽しくて寄り道ばかりしています
楽しみはサイフの紐もゆるみ勝ち
下手な手紙書くよりボタン押す
精一ばい大切に鳴く蟬わかる
ひき出して子には子押しの宝物
大切にしていやと形見押しつける
引きずられ引きずって行く千歳アメ
弔辞書く筆が重たい春のうつ
古日記想い出あって捨てかねる
大切な土をいとしむ父の鉢
種を蒔く明日を楽しくするために
大切な話へ正座させる父
春彼岸母の遺した一行詩
大切な金が浮気をして困る

三男 剛治 弘一 春洋 とし子 隆盛 英一 祥一 賢子 森子 蛙報 澄子 舞夢 伽羅 日の出 東雲 照子 恭昌 恭子 宣司 久峰 真砂 志華子 楓楽 周信 絹子 靖巳

楽しさは自分でドラマ組立てる
大切な価値観違つた世代の差
先生が卒業させたがっている
山積み書類にペンタコが痛い
大切なタレは暖簾のいのちです
大切なひとです元は他人です
大切に育てた花に虫がつき
賞味期限過ぎ大切な夫と妻
団子だんご楽しい歌に出世して
月並みに旅して食べてよくしゃべる
はぐくんだ愛卒業で遠距離に
四捨五入大事な人がもれており
親子です切っても切れぬこの絆
大切な人を彼岸に忘れられ

川柳塔わかやま吟社

牛尾

緑良報

苦勞した人柄までは真似られず
花の真似出来たら抱いてくれますか
猿真似が出来ぬ男のかたい椅子
親の真似してたら親に叱られた
真似してもオウム自分を語れない
誠実に私を真似る影法師
御先祖の真似して山の木を守る
父の癖も真似て後継ぎらしい業
どう真似てみても鷹にはなれぬ鳶
真似事で食事を済ます老夫婦
落とす蓋真似ても母の味が出ず
力んでも所詮地球の塵でいる
塵になる前に一考して捨てる

千梢 正雄 春義 英王子 石舟 会美 喜美子 千枝子 さと美 叡子 蛙 綾子 鬼遊 柳宏子 富湖 鉄治 紀久子 裕美 めぐみ 稚代 千寿子 大輪 紫香 紀美女 さち子 英子

勝負なら肩書なしでしませんが
風を切る肩に空しい影がある
肩の荷も夢も分けあう夫婦坂
能面で芯までひびく肩叩き
両肩の炎だれにも盗ませぬ
栄転へ肩で風切る奴唄
ハツタの肩書きいてある名刺
職歴に短気を悔いた跡がある
終の日の短い台詞決めてある
短い急所を衝いたアドバイス
亡き父母と短い会話癖となる
白昼夢短い春を巻き戻す
梯子車の短いビルに許可おける
等身大の鏡短足笑つてる
幸せな日の短さをたたみこむ

佳句地十選 (4月号から)

岩本笑子

いつの世も強い女の本線針
うさぎほど跳べぬが先ずは跳んでみる
合掌の一分間は無のころ
ジャンケンポンで一歩が踏み出せる
淋しげはないかと裸木を仰ぐ
一度だけ笑顔の見たい仁王像
矢を放つ最早信じるばかりはない
キリトリ線少し活気があり過ぎる
海が晴れるやっぱり振り出しに戻ろう
美しい汗より勝るものはない

保州 佐代子 三枝子 公子 寿子 武春 萬的 和重 射月芳 正博 百合子 高夫 豊太 三男 富美子 子 豊太郎 柳童 能子 秋雄 四三郎 射月芳 瑠美子 一枝 重人

春は短い化粧直しも念入りに
今が旬はなの命は短いぞ

豊中もくせい川柳会 田中 正坊報

輝子 克子

哺乳瓶 休暇のババの手際よき

露天風呂 女神が湯気の中に立つ

花に水行けば女神が微笑んだ

奥山に行けば女神に逢えそつな

春の雨 女神の涙にしておこつ

延長戦 女神がやっと腹決める

我が上を勝利の女神素通りす

いつの間に女神が鬼女になったのか

ハードルを越えるところは水溜まり

やりがいのあるハードルに燃えている

お化粧をすればハードル越せそつだ

物あふれ乏しくなった思いやり

乏しさが家族の絆強くする

あてもなく風に委せる乏しさを

乏しいが心豊かに生きていく

タツタンの修法 今年は足早に

年だんな読んだしりから抜けている

雑兵にオアシスがある駅の裏

わがいのち迎えに来たか喜寿の風邪

棚一つ吊るぎりぎりの釘の数

低金利 霞だけでは生きられぬ

紅梅が咲いてくれたか誕生日

はびきの市民川柳会

安芸田泰子報

知香子

女

きく子

和歌子

庸佑

吉太郎

周信

悟郎

落児

英子

石舟

紫香

正坊

助骨

柳宏子

重人

博史

喜代志

享子

しげお

ルーキーの肩には重い前評判
古雛の一重臉に母徳ぶ

街に住み茄子や胡瓜の旬忘れ

義理チョコを忘れずくれる味方あり

家計簿をこわごわのぞく妻の留守

初節句笑顔が揃うひナ祭り

アと部屋を貸し切りにするおひなさま

アマゾンの森が地球を支えている

親馬鹿が土曜の午後を待ち焦がれ

仲直りしたライバルの手の温み

ここで手を貸せば伸びない子の巣立ち

千手観音どの手も母に似たような

手の込んだ策に自分が縛られる

酸欠の街温い手にめぐり合う

懸命に生きて半端な脳をもつ

洗脳で義理も人情もホイと捨て

洗脳に一億燃えた苦い過去

脳死判定神の許しのメスを執る

ぐうたらな脳には毒が効くらしい

不協和音が脳をかすめにきて困る

ついてくる影がぐんぐん先に行く

ぐんぐんと伸びたかるうに鉢の松

余命ぐんぐん安心していいですか

ふるりの訛りもとけるターミナル

ターミナル羊の群れが街に出る

淡い恋踏ん切りつけるターミナル

私だけゆっくり朝のターミナル

坊さんと医者が待つてるターミナル

ターミナル百鬼夜行の恋進む

りつえ 美喜

四三郎

昭平

俊男

末一

辰

専平

吐来

志洋

たけし

昭子

晋

庸佑

敦子

昇

絢子

ダン吉

久美子

美代子

扶美代

泰子

みつこ

桂子

洞庵

満寿蔵

一壺

かつみ

岩美川柳会

石谷美恵子報

沖合が明るくなった船出そつ

見通しが明るい内に足洗う

明るくてドラマにならぬ影法師

魂が浮いております脳死論

喪の家に照明だけが明る過ぎ

正夢になって魂信じ込む

やさしいね何か魂胆ありそつだ

適当に呆けて明るく今日も生き

魂の抜けたタルマで起きれない

梨づくり味も花粉の筆が決め

一本杉の花粉にいつも攻められる

花粉よりダイオキシシンが恐ろしい

酒の味妻に教えたのは誤算

ほどほどの相手に気持ほぐれだす

お日様に合わせて笑う鬼瓦

魂は蓮一面の野で遊ぶ

握手して味方と読んでいる誤算

ほどほどのあたりに夢は置いてある

ほどほどに今日を忘れて米を研ぐ

人生を誤算だらけで通り抜け

誤算した縁を繕いながら生き

川柳ささやま

酒井 靖子報

生きざまが刻み込まれた深い皺

森深く別のわたしを置いて来る

残り福足の軽さがけつまずき

伸び伸びと嫁を育てて姑平和

蟹郎 単車 大漁 忠良 公乃 芳江 節子 裕子 静生 孝男

一夫 季芳 圭一郎 睦子 睦子 睦子

一京 一瑤 公子 美恵子

純子 恵美 美智子 多美子

年忘れおだてられ買う春帽子

末野

これからは伸びる草との四苦八苦

かほる

残り火を抱いて乳房が老いてゆく

八重子

伸びのびと出来る我が家の四畳半

素水

欲ひとつ捨てるとベンがよよく伸びる

とみ子

石投げた手にしみついている疼き

つや子

風邪らしい電話で見舞言っておく

すず子

思い出が残る手紙の筆の跡

かつ子

処方箋の援助もあって伸びる日々

富美

千の手へ万を望んで積み残す

芳郎

負け犬へ乗り気をつれて来た賀状

ヒサ子

スカートに残るウエスト五十八

泰子

背のびして春から夏へ伸びざかり

美沙子

健康器具乗り気になされて積んである

房江

セールスへ乗り気になった腰の冷え

可住

つんつんと自我の芽伸びる反抗期

靖子

はまゆう川柳会

中後 清史報

催促が出来ず長居をして帰る

恵美子

散歩する時間を犬が覚えてる

豊太

矢のような催促に泣く肩代わり

美佐子

催促が絆断ち切る狭にも

利ぼん

盃に嘘を浮かべることもある

生米子

大盃で風流男 月を酌む

雄造

三三九度それから長い長い道

佳子

嘸きのつもりだろうが耳ざわり

さだ代

嘸きは波紋の如く輪を広げ

華水

ささやかなうなじほのかに春の風

修也

嘸きへうっかかり乗った身の不運

すみれ

雲隠れ今嘸いていた二人
照れながら嘸くようにプロポーズ
思い出を甘い言葉で嘸かれ
善と悪嘸きおれをなやませる
嘸いて諭吉恐わす夜の蝶
答弁の耳へ嘸く助け舟

太一
ひまわり
平和
国彰
てる坊
清史

この個性いやだが先祖からのもの
お下がりを貰うて赤いシャツに慣れ
CTに写す過去去と消してある
軽くなる筈もないのにヨッコイショ
ドラマ見て母も老いたか貰い泣き
いろいろな人間がいる鍵が要る
残された人生丸くまるく生き
師の芸へ視線を注ぐ舞扇

孝雄
快風
幸泉
幸
功
圭風
菊野
テルミ

川柳塔みちのく

小寺

焼きりんご津軽の嫁の匂いする
独走の男出番を間違える
戦国の世を舐め尽くす世去れ節
盆踊りよされ踊りでしめくくり
産院を出る父親の顔で出る
切り札を出せば味方も血を流す
大都会駅の出口を探す蟻

花峯報

過疎の春母が手を振る無人駅
始発駅今日のドラマの幕が開く
旧姓で肩叩かれた里の駅
風の駅たった一人の風来坊
無人駅ひとり淋しいローヒール
和服きた女が駅までお出迎え
路のとう酒が旨いと上機嫌
葱坊主ぐんぐん伸びる上機嫌
不機嫌が遅く返ってきたこだま
年重ね夫の機嫌取りにくい
丸五つ機嫌よい兎が見せ付ける
まだ言わぬ先に機嫌が背を向ける
春うらら花ハナはなの落し穴
野地蔵もわたしも眠い春かすみ

和江
三郎
京子
松風
朱坊

勝ち抜かん闘志ざらざら汗になる
子の夢へ生かすチャンスの二万円
茶髪では足りず金粉ふりかける
よされ節聴いてりんごの実が熟れる
傷心の影をいたぶる照り返し
起き上がる明日がおぼろな溜息よ
逆転のチャンスを狙う札の束
野心家の一人が冬の絵を抜ける
開発で御殿が並ぶ過疎の村
告白のチャンスに冷めているコーヒー

銀波
慕情
龍人
順風
隼人
柳々
北歩
てる

川柳塔まつえ吟社

恒松

注湖
茂美
多賀子
米子
邦代
螢
アキエ
きみ子
早苗
静江
友子

拳骨で貰った愛は痛かった
モノリザの笑みを人妻から貰う

花匠
愁女
ツネ
黙人
花峯
一花
五楽庵
敏人
力誠

川柳高知

川竹

松風報

千鳥

佳風

千鳥

松風報

千鳥

千鳥

佳風

千鳥

松風報

千鳥

人生の春はあなたと逢つてから
やつと得た柔師範も古希の春
彼岸までなかなか出さぬ春の顔
春一番まだつきまとう老いの欲

哲雄
煩惱児
ひふみ

指切りの指をかすめた春の風
指切りの指が重くて眠れない
指切りをじつと見ていた道祖神

秀子
みえ
桂子

挑んでいた頃は指切り忘れてた
図に乗って指切りをしたコップ酒

静恵
知恵子
義良

ぼんやりと優しい嘘に笑む病床
ぼんやりと聞いてた付けの袋小路

太泡
義良
芳枝

ぼんやりとキヤベツを刻む妻をみる
ぼんやりとしてたらバスが待つちやつた

登志子
幸子
与根一

ぼんやりと浄土が見える歳になる
川柳塔ふくべ

たけし
幸子
与根一

母の愛神通力で子に伝う
二兎を追う夢を捨てない私です

春恵
信子
單車

兎とびきつとブームを巻き起こす
折る事何から頼もか手もみする

一枝
多哥由

カレンターめくり明日を考える
わかあゆ川柳会

橋本多哥由報

足からのメッセージにて元気です
銀行はパブル弾けてまた儲け

恵美子
好栄
ちよえ

何時からか足も頑固になつてきた
いつまでも過去を慕いて桜散る

鈴江

銀行へ貯金する気が湧いてこぬ
やせたなア長年支えた足を撫で

はるみ
かつ子
聖子

焦ればあせるほど解けぬもつれ糸
この足があるからこの坂登ります

博利
清泉
白汀

銀行の帳尻合わぬ年の暮れ
銀行の隣に住んで金がない

杜的報

京都塔の会

松川

杜的報

三月の風邪によく効く玉子酒
薬害訴訟他人事でない薬つけ

友照
求芽
三求

薬とも毒とも酒もさじ加減
くすりのような言葉をくれる人だつた

磯
英一
飛鳥

招き猫置いて脱サラ開店日
社を辞めるように踏み絵が置いてある

典子
紫香
葉子

置き薬 気の毒なほど減つてない
床の間に置くと落ちて着く武者人形

波留吉
メ女
ルイ子

身を置いたところで幸せ紡いでる
終点に欠伸を一つ置いてくる

ただし
庸佑
芳子

魔女の着る黒であなたを騙したい
恩を着たまま恩返し出来さする

睦子
柳宏子
冬葉

精いばい着せて成人式へ出す
着くずれを直す鏡が見当らず

吉之助
正坊
宏子

着任の挨拶にもう渾名つき
着任を付ければ私負けていた

立板に水 着任のこ挨拶
うまいこと着色された噂とぶ

着飾つてみても淋しさかわらない
嫌なこと聞きそなつたふりをする

尼崎いくしま川柳会 春城 年代報

嘘を重ねて人間をそこなう
出来そこないの子ですと父は嬉しそう

欣之
福子
百合子

ボタンひとつ掛けそなつた嫁姑
瓢箪のできそないが面白い

杜的
美穂
水客

鬼でもいい時々こちら向いて欲し
だんだんと欲が減つてくる不安

梅咲いて隣へものが言い易し
かに食へる間の沈黙をたのしめり

脳細胞のすき間にひそんでいる新語
街角の童話手を負す車椅子

歌子
武庫坊
一

寝た孫に未だ読んでいる童話本
図書館の童話に浸り小半日

一箇
年代
義芳

生きている童話の中の少年期
モデルハウスで明るい童話できあがる

夢の助
節子
千恵

バスコンに月の童話は入り切れず
夜は童話の国となり冷たい足

富美子
正子
千恵

血縁のまつりか 池を濁らせて
心字池で煩惱消える寺の庭

富美子
正子
千恵

雨上がりに砂場の池に児らが寄る
水中に何か秘めてる森の池

富美子
正子
千恵

脱皮してすんすん天を指す竹
池の鯉大きく跳ねて春を告ぐ

久子
ヒサコ
弘治

ずんずんと余生縮める卒寿の灯
ずんずんと若さも去りて八十路坂

弘治
十四郎
水客

公害の町やつと揃つて謝罪した
謝罪してストレス消えた食すむ
感謝に徹し神の悪口も言わぬ
勝手ながら本日休み娘が嫁ぐ

騒がしい中でも平気で寝てござる
騒がしい風だ噂をのせてるな
寤告知周囲の方が騒がしく
騒がしくやがてひっそり事故現場

春日和猫の逢引き騒がしい
今に見て居れと騒ぎの外にいる
地球儀の裏が何かと騒がしい
武者人形出馬ためらう春の雪

迷うこといっぱいあつた頃が花
離あられ孫もそろそろ適齡期
水切りをした花のよう娘が帰る
一皿が多いと気づく誕生日

壮年期やつと辿つた古希の坂
何食べる大根なますしらすあえ
子沢山自慢する子が一人ほし
明治生れ有難うさえ言わず逝き

卑怯にも弱者を狙うはやり風邪
嫁がせた娘の部屋の寒さかな
若い同士雲にを歌う建国日
犬の散歩温い布団に後ろ髪

薄謝でも論吉がたんと永田町
円満の秘訣は尻に敷かれてる
抹茶になると茶受けも彩を変えて来る

トミエ
哲嗣
信子
哲子
柳宏子
みつ子
松煙
絹子
江美
春蘭
正坊
涼子
千代
鹿太
颯云児

預言者がピエロになるか世紀末
イレギュラーの球に泣く人笑う人

川柳大阪
坊農
柳弘報

見あきない景色ときみのその笑顔
新交通白一色でマヒになり
鮮やかに寸暇をぬって逢いに行く
托鉢にワラジ素足の寒い里

鮮やかに決める裏には何かある
離婚して鮮やかになるのは女
窓拭いて景色眺める冬の宿
北風とどんなお話寒椿

姿より心に惚れたはずだった
大子言おびえもなく日々生きる
鮮やかなスーツが似合う六〇歳
この景色持つて我が家へ帰りたい

ふる里は同じ景色と国訛り
指切りの秘め事遠い過去を恋い
幕開けはひと味違うトラの意気
玉砂利も世界遺産のうちかいな

幸祈るふる里の山たのんます
名人のこもる部屋から寒が消え
鮮やかに性転換の市民権
水ぬるむ冬を脱ぎだす春景色

寒気流越えた二人は共白髪
外は雪熱燭一本たのんます
寒行を見ている方が震える
鮮やかな青空割つた飛行機雲

虹汀
高明
幸夫
晴翠
夕ミ
輝夫
弘
勝視
久仁於
實
あき

四郎
正剣
柳弘報
高圭
すがお
楽子
信醉
多香
河南子
かよこ
末坊
照月
美花
咲笑
青道
洛醉
本蔭棒
川童
一風
希久志
比呂志
朝子
柳昌
まつお
鉄心
敏

実験をまたくり返す寒の朝
鮮やかな墨色忍の一字なり
吹雪いてはいるが春へと続く道
鮮やかに動く匠の手は無口
百万ドル復興神戸に見る夜景

大原川柳社
矢内寿恵子報

桁外れの数字が動く社会面
桁外れの値が物語る絵の世界
桁外れの運が舞いこむ兎小屋
割り切れぬ思い断ち切る赤ワイン

割れ止めになる錠が産んである
くす玉が割れて確かに得た勝利
割れた皿言いたい事もあつた
肚割つて話せば分る父である

桁外れ言う逃げ道があけてある
桁外れの不況に耐えている財布
ひび割れた茶碗に深い哀がわく
腹割つて話せば見えぬものが見え

仲間割れする感情が走りすぎ
倦怠期らしい隣で皿が割れ
結論が割ればかりで進まない
殻割つて命芽生えた子の門出

ひび割れた茶碗昔を物語る
ひび割れて修復さかぬ夫婦独楽
大空へ桁の外れた孫の夢
腹立てて割つた皿にも残る悔い
割れた仲酒に手助けしてもらう
桁外れ寄附台帳の裏ばなし

丹吉
一步
金太
重人
柳弘
みづえ
さちこ
玉恵
辰江
妻江
南花
あや子
地佳平
悦子
はじ芽
喜美子
こふゆ
美佐子
みさえ
たづ子
昭子
巴子
敏子
はるみ
静子
絹子
和子

川柳塔唐津支部 松涛庵正剣報

足して二で割れば程よい夫婦かも
割れ鍋の蓋に確かな妻の位置

ほたる川柳同好会 井上

直次報

あすなろ
寿恵子

ほめ言葉聞きつつ斬に変わる孫
ほめるタネ探すに困る披露宴
ボヤ見付け怪我の功名ほめられる
ほめられぬ退屈人生無事がよい
寂しいのか此の頃人をよくほめる
ほめあげて真っ直ぐ育てと注ぐ愛
良妻ぶって夫ほめたりおこつたり
僕も時計も少し時代が遅れてる
時計などいらぬと思えど腕淋し
若者の時計に合わせ息切れる
僕のより二秒遅れている時報
信じたい重なる針の合うように
若かつた日課に竜頭巻いた頃
吉報へ今日の時計は遅れ気味
女性よりも女を見せる女形
女先 男後行く老夫婦
女房にいつてらっしやい定年後
菩薩にも夜叉にもなれる女です
写経する女の爪の赤すぎる
もう転ぶことはないけど女坂
耐え抜いた女を抱く火と炎
来世も女がよいと女言ひ
飽食の娘は乏しい糊口うそと言つ
二次会で乏しい財布気にかかり
乏しいが身銭をきって見栄をはり

ただし
正三郎
正安
肋骨
喜美子
セツ子
和歌子
蜜 柳
吉太郎
直次
祥風
よしろう
勝

柳童
竹二
馬洗
まみ子
久子
保子
敵子
千里志
見清
善守
博史
桂子
桂子
勝

尼崎尾浜川柳会

田辺 鹿太報

梅の香にむせび野点の席に居る
ハンカチは辛い別れを知っている
神戸からくぎ煮が届く浅い春
人々の心なごます京の四季
幸せを語る炬燵の夫婦箸
かえり船博多で別れそれつきり
ハヒフへホ実いこなせて黄昏れる
四季忘れりストラに泣く昨日今日
ピツタリの仇名に出会い笑えない
枯れ葉から紫の花春を告げ
ライバルの含み笑いが気にかかる
四季なくてハウスで熟すブチトマト
勝訴でも素直に笑えないしこり
四季移り八十回を身に受ける
四季折折の彩がある里が好き
四季折々咲く花たのし無限大
逢うてすぐ時計気にするのは止めて

竹原川柳会

時広 一路報

お化粧はできないけれども二十歳知史
つらい時大きな声で歌うたう
師の声がする鼻が鳴いている
この干潟なくさないでと鳥が鳴く
鳩のよう飛びたく空の旅に出る
靴音へ小鳥全身毳にする
咲き誇る椿と仲がよい目白
人間の都合で鴉憎んでる

江美
すみ
鹿太
モトコ
百合子
龜与子
幸子
哲嗣
イサミ
まさ
勇次郎
満寿蔵
正治
いとお
夢之助
柳宏子
十四郎

力
蝸牛
栄恵
正宏
節生
蘭幸
高千枝
史子

都市砂漠カラスは森に帰りたい
鶏の鳥になりたい無精卵
愚痴をきく海はあくまで青く澄み
本物の青になるまで待つ緑
青々と今年も植える千枚田
青春恋し春を待つ花を待つ
少年を奮いたたせる海の青
寒行の友の太鼓に手を合わす
よく動く私の指の有難さ
好きだとは言えずこの指にくらしい
指先が炎えて仏を彫る刹那
自我理めて生きている女の太い指
指切りの指は逃げてはいけません
かゆい痛い指はいつでもお母さん
どの指も朝の光によく動く

サークル檸檬

小林 一夫報

春の陽射しがまぶしく映る病みあがり
射ぬかんとする標的がまぶし過ぎ
天才と同じ姿で昼寝する
師の言葉 怠け心にまぶしかり
破つても胸に字のない日記帳
情報過多まぶしい脳死者の霊
乗り換えた駅で抱いた深くなる
木瓜の花エンピツ抱いて五十年
バークマンの帽子まぶしいだけでない
スランプに友の笑顔が眩し過ぎ
ブランドニックスラブ君はまぶしい存在だ
おんなが歩いてくるくずれた魚のように

美佐雄
不朽
笹舟
静風
房子
夏喜
菁居
喜久恵
八重美
規代
一枝
喜美子
笑子
千年枝
一路
智恵子
あすき
喜美子
みつ子
雅子
希久子
靖巳
正坊
澄子
澄子
房子
薫

やさしい言葉いっぱい溜めて春を待つ
春浅し脳死をきざみつつけられる
通草とる少年すでに変声し

三幸川柳教室

保州報

修羅越えた男の顔にある自信
正義感だけは誰にも負けはせぬ
空気のよくな妻の自信に包まれる
わたくしの負けねと一歩退く自信
自信などないが後ろは振り向かぬ
打ち勝った自信貫禄つれてくる
行間の伏せ字が解けてゆく自信
なせばなる亀の歩みに似た自信
弾丸の下くぐった自信揺るがない
下積みの汗に自信の力瘤
自信湧く運命線が伸びてるぞ
雑草の暑さ寒さに勝つ自信
道化役影が自信に満ちている
青空へ飛翔信じて世相風
椰子の実の流れた海は青かった
満ち足りて青い地球を狂わせる
今にして思えば青い机上論
一言の重みを知って青ざめる
親離れ恋に目覚めた青い毬
年ごとに手入れ老後の青写真
戦争を知らぬ少女の青い爪
青雲の志を抱くやせ蛙
葱刻む青い炎を燃やしつづ
青竹の節目節目でした背伸び

楓 楽
い わ 夫

保州 鉄治
正一 章子
秀男 百合子
三千子 町子
伸二 初子
当代 嘉平
和子 登美代
忍 さち子
公子 敏子
みね 和代
朱夏 めぐみ
起世子 千秀

二十一世紀へ虹を描きたす青写真
朱に染まぬ青い林檎を持て余す
青いりんご食べて大人になりました
青いのでちやほやされているのかも
わさびの青利かしておこう来世紀
自信ない答弁声がかすれ出す

東大阪市川柳同好会

森下 愛論報

我慢しろととても銀行さん気楽
合掌のマナー心も清く澄み
ガラス越し早く抱きたいうちの孫
内緒ごとなんにもなくて凡夫婦
隠してもばらしてもみみた内緒事
たわいない幼女の内緒あかねのね
内緒話の二人へ池の鯉跳ねる
隠居部屋の話あれでも内緒かな
母さんはいつもくどいと娘が笑う
胸を打つ話はダイヤより光る
たまに打つ釘は根性悪だった
少ないが急所はずさぬ父の釘
王将を固める銀を打っておこ
大樹に耳昔の話途切れない
おじいちゃんの樹は賑やかな枝を持つ
誘われて奥へ奥へと樹海みち
ふるさとの樹は裏切らぬ四季の風
泣き虫の正面に立つ父の樹よ

孝子 碧
桂香 正圃
美子 豊太郎

ダン吉 雅文
賢子 朝子
頂留子 文秋
萬的 弘直
美弥子 みどり
信治 太郎
東雲 シマ子
和代 湖風
愛論

老いてゆく記録はとどめないように
二人して住むに手頃な兎小屋
飢えたのも遠い記憶の白いめし
喝采をあびるピエロを描いてる
記念品俺が死んだら屑だろう
フィルムに収めて帰る旅日記
自画像にある泣き黒子消しておく
人生のまだまだ続く漂流記
おっとりとしても目玉はよく動く
従軍記血の気の多い事もある
兎の耳噂をすぐにキヤツチする
三行記事取材の足が泣いている
雪山を描いてこたわり捨ててみる
さよならをちよつと美化している日記
留守の間に一寸覗いた子の日記
孫多く年玉年金悲鳴あげ
玉手箱イミテーションが多過ぎる
言うことはないが金欠玉にきず
捨て石になつて輝く玉もある

螢 一枝
雄人 多哥由
天人 也惠
天雀 葉士人
あづま 良雄
雅女 健一
ひろこ 静生
華子 黙光
孝男 宣子

城北川柳会

神夏磯典子報

ガン手術癒えし日の朝海光る
兄中心些細な事も耳に入れ
母の声のどもこわれるほど叱る
患者より指名してくる処方箋
鼻筋のとった方が日本一
丁寧に医者の子の聴診器
ドクターに家の内輪をさらけ出す
聞き役の耳が時どき謀反する

義江 春蘭
トヨ子 政子
あい子 志華子
あやめ 高栄

うぶみ川柳会

上田 宣子報

記念樹を切る増築を詫びながら
正和

親切な医者に心で手を合わせ
 ピアスにて女に年のないおしやれ
 ハンサムな兄と妹歩かさない
 お医者さんに不義理でます万歩計
 嘘を言う天使が一人のどにいる
 右で聞き左へ抜ける妻の愚痴
 ハンサムの医者ならハイと脱ぐ支度
 抱き合えばのどのつかえがすつと消え
 子沢山母の見立ては医者以上
 喝采の鼻はあしたの風知らず
 身の上の診断もする村の医者
 保険医の信念離島の灯を守る
 人面魚よりハンサムと自惚れる
 のどのいい奴だが独占するマイク
 ハンサムへお化粧室が混んでいる
 正直なので本音がすぐに出る
 ハンサムに生まれ赤ちゃんらしくない
 ハンサムな夫に少うし疲れます
 噂ほどでてる訳でない男
 與謝野晶子がハンサムというルシヤナ仏
 ポンコツ車駆使無医材が忙しい
 国のカン救う名医が見当らず

川柳塔みぞくち

小西 雄々報

順三 一三 満津子 千歩 睦子 はじめ とし子 史風 千里 朝子 白峰 英子 文秋 しげお 諷云児 英工子 小路 鬼遊 萬的 柳宏子 公一

若人は姿気にして厚着せぬ
 言い訳をしても厚着を繰り返す
 厚着した心の狭き風笑う
 肩のこるほどの厚着で風邪をひき
 春一番吹けば厚着は慌てだす
 厚着にはさらば春陽へ初デート
 スタイルを気にし厚着にふみきれず

高槻川柳サークル卯の花 川島諷云児報

お茶の味微妙にかえたお湯加減
 お目出度い日のお茶桜の花開く
 茶を送り絆をつなぐ母ひとり
 我慢していても涙が先に出る
 我慢していた一発が出てしまい
 毒舌に堅く握っている拳
 我慢して妻にアホかいと言われ
 有名店に誘うなげなしの財布
 プライドは細い踵のハイヒール
 プライドで金縁眼鏡外せない
 プライドがあるのを首を洗つとく
 プライドと違う背伸びをしてるだけ
 愛冷えて高速道路つづる
 冷却期間おけばどうにかなるだろう
 そむかれて雨を聞く夜の背が冷える
 リストラの風首筋が冷えてくる
 足の中からじわじわ冷える屋台酒
 底冷えの嵯峨野を巡る人力車
 もつれ糸解けないままに夜の冷え
 しみじみに年に向き合う寒の冷え

信敬 智恵子 正光 康女 和代 豊枝 雄々 波留吉 萬的 スミニ 白溪子 紫香 澄子 晴美 節子 あやめ 満寿蔵 重人 礫 武庫坊 ルイ子 吉之助 石舟 泰雄 秀夫

屋台客途絶え雨から雪となる
 梅が咲くそろそろ御布施出す頃だ
 経終るそろそろ御布施出す頃だ
 呆けたらしそろそろ引退考える
 交番が出来ても巡回行く留守
 年金の浮輪に乗って行く余生
 色街の利休の音が春知らず
 オブラート猿は真顔で剥いている
 缶ごと硬貨はにせと知らなんだ
 埋めてある火種をおこす春の風

岸和田川柳会 長谷川呂万報

老練な技を生かしたシェフの味
 寄り道をした雑字に生かされる
 単身赴任生かして男料理する
 賞味期限ぎりぎり生かす主婦の知恵
 娘が捨てたファッション生かす若づくり
 まだ若い八十路を生かす恋が有る
 銀の髪生かすきれいな彩を着る
 方言をうまく生かしたコメディアン
 社長にはほどほど勝たす閉幕自慢
 腕前でわたはほどを美女に写してね
 同好の腕前競う菊花展
 腕の差を一手の負けて知らされる
 出張のしるし駅弁買って行く
 駅弁のうまさでわかる土地の色
 銀河鉄道駅弁買って乗りたいな
 車窓から駅弁を買って旅したい
 あちこちの駅弁消える淋しさよ

光穂 光穂 よ志子 柳宏子 治三郎 靖巳 一笛 砂輝守 慶太 諷云児 盛之 松風 蛙城 弘子 呂万 一齋 すみえ 辰村 狸郎 路子 さよ子 ダン吉 信博 昭二 洞庵 鱒二 鹿太郎

駅弁が好きで出張引き受ける
 発車ベル幹事買ひ込む鱈の鮭
 駅弁は蓋の飯から食べ始め
 追い打ちの傷が背にないのが自慢

裸一貫もつ追ひ打ちの氣も失せる
 反省の氣持が何もう書いてない
 日の本のますらお消えて茶髪の世界
 臓器提供カード書いてた息子の死
 バツチリと決めてがっかり待ちぼうけ
 泥棒もがっかりとする大不況

川柳塔おっぱこ吟社

木村あきら報

白い飯月火水木金土
 味噌汁の煮えて話題は亡母のこと
 騙された振りをするのも情けです
 それ以上言うなと夫の目が語る
 老人の髯を攻める消費税
 休んでは居れぬローンが追ってくる
 手に持った財布をさがす老いの坂
 雪の中一際映える寒椿
 どん底の噂乗り越え来た夫婦
 馬鹿噂弁解などはしたくない
 坊さんも子の進学を神頼み
 大げさに書いた噂で売る雑誌
 但し書きが付く私の余命表
 あの話私も聞いたと自慢顔
 宝クジ噂の主が日に替り
 新妻も我が家好みの味覚え
 テレビ見て温泉旅行雪化粧

東吉 甚一 洋 白光子 東雲 敏光 みつ江 苑子 基
 ひかり 貞月 はつ恵 よしみ あきら マツエ まさる 文仙 かおり 吟笑 治延 輝夫 坊太郎 放任 抱楽 寿々女 千カエ

味自慢母の手料理この一品

川柳岩出

小倉アサ報

活気ある言葉の方へ流される
 皆笑う私も笑う渦の中
 婆ちゃんが好きよと言ってくれたチョコ
 エプロンで女の城が活気立つ
 義理チョコに迷い本命また逃がす
 活気ある日々の暮らしをくれる夢
 恥じらいをチョコに託した恋心
 産声に父のフアイトが活気つき
 義理チョコに安心出来る妻の愛
 義理チョコも本命もなく老い一人
 チョコレート皆に好かれ旅をする
 キヤーカーと子供にかえるコースター
 神仏みんなの願いどう聞くの
 七癖があつて夫婦で包み合う
 気紛れなチョコに値踏みをされる椅子

南大阪川柳会

吉川寿美報

農園へ主張は曲げぬ無農薬
 田園をほだして歩いて日の匂い
 貸農園野菜の種類欲ばつて
 貸農園漸くなれた土いじり
 濃厚な日もありました枯れました
 濃厚な化粧で隠す鬼の面
 濃厚な味を好んで病んでいる
 濃厚な時間フルマラソン走る
 盛り場の素顔覗きにくるカラス

なみ子 精男 悦男 春子 保子 良一 たねえ 正直 愛子 哲雄 正義 英子 幸子 重徳 和子 アサ 庸佑 半蔵門 道子 久峰 叡子 東雲 千梢 ダン吉 信治

濃厚な話しこえぬふりをする
 濃厚な化粧で魚ねぎつてる
 油絵のえのぐ重ねて影光り
 濃厚な緑の中で箸をとる
 火吹視くと亡母が近くなる
 子供部屋覗けば未来地図が見え
 コンバクト覗いて嘘を組立てる
 耳よりなニュース覗いて来た兎
 まっ白い地図に望みが迸る
 愛されて外に望みはないと言つ
 長生きを望む割には不養生
 新年の望みはいつもでんこ盛り
 杖なしでしっかり歩く日を望む
 生命より先ず健康を望むなり
 わたしがいないと何にも出来ぬ人だから
 知らぬ間におのろけを聴くインタビュー
 割烹着よこして洗つてのろけてる
 万華鏡覗くと夢を見てるよう
 家計簿を覗くと妻の吐息する
 才能がキラリ覗いている絵筆
 大望を抱いてた父の背が円い

川柳クラブわたの花

吉村一風報

戒さんたんとお金をもつけはる
 食べてチョコだから毎日がんばれる
 ためるのが趣味のお金が貯まらない
 お年玉歳に合わせる孫の数
 ちゃっかりと孫年玉のはしごする
 二十世紀泣いて笑つて生きました

ひさ乃 蛙 勝美 清成 柳伸 憲太郎 幸子 シメ子 重人 文秋 章久 哲郎 久子 清水 寿美 直子 ばっは 太郎 三男 澄子 慶一 宏 治 剛 治 道子 君江 春子

一生の暮は笑うておろしたい
 つらいことあつてうれしい日の笑顔
 天国と地獄をゆききすおカネ
 臘梅の匂いかわし寒の入り
 風の音思う人生一度きり
 国債で急場しるいであと誰が
 初夢は宝の海で溺れたい
 お年玉夫に内緒と娘がくれる
 踏み台にされても父は笑つてる
 お金とは無縁の風がよくあがる
 お札読む顔に無心の美しさ
 やりくりのお札きらくにとんで行く
 お金とは善に悪にも左右され
 幸不幸きめるお金の使いよう
 梅だより連れもて来いと故郷の母
 幾つでも婚約指輪もらう夢
 少しだけお金残して旅終る
 子が揃い里の組はずんでる
 組がチャンスをおくれた立ち直り
 水面下くぐつた金はさびている
 父さんの元氣のもと娘の笑い
 ひきだしに一杯ためているお金

堺川柳会

河内

月子報

一風 幸枝 隆盛 寿代 信司 友甫 逸子 美智子 朝子 一道 ますみ トシエ まさと いつふみ 春江 知佐子 美代子 民子 明 八寿子 鬼遊

日の出 アキ 舞夢 りつえ 半銭

串刺しのだんごは春をひとりじめ
 身代わりの五臓に神が問う命
 菜の花に遅れはとれぬ惣坊主
 みつもないごたごた続く都知事選
 お祝いは現金がいたいのし袋
 遺産わけ兄はやっぱり欲にたけ
 身に憶え御座いませんと問詰める
 三人目考えてみる串タンゴ
 両の手で受けてこぼれた分は欲
 水溜まり誤解がとけて飛び越える
 遅れずに走れと影が追つてくる
 月見だんご月より先に食べている
 だんご鼻お金仰山溜めてはる
 結末はどろ船だった欲の皮
 生きる欲支えてくれた人と居る
 捨て切れぬ欲が迷いを深くする
 見たようにゴシップ流す鳥がいる
 禁猟区人科の欲は恐ろしい
 道草は誤算アイスが溶けている
 見られたらごまかしかぬ友に逢い
 欲一つ捨てると見える風の彩
 遅れぬよ新聞きつちり読んでいる
 大好きな人に盗んでほしかった
 欲が出てハードル少し高くする
 しぐれ来て話なかばのいなか道

親ばかりで大きな夢を子に託す
 千代大海こき出す船よ綱かけて

かわはら川柳会

俊路報

美子 健吾 泰子 みつこ 美代子 春蘭 つづや 八千代 昭子 鐘造 かりん 冬虹 春 洞庵 勇太 伽羅 扶美代 小雪 磯子 梓 紀美女 千代 五月 哲平

悦子

宇宙まで大きな夢をふくらませ
 大震災元気をあげたボランティア
 大きいと言われる形より心
 親切も大き過ぎると迷惑だ
 大木を支えプライド持つ根っ子
 梅の香の一輪匂う庭のすみ
 梅林を抜けて見上げる空の青
 梅干しも夫もともに塩次第
 老梅よもう一度咲け杖を貸す
 次に会う約束はせず悔ひらく

横浜あおば川柳会

菱田

満秋報

内申に響くよい子のふりをする
 億測で噂の種がばら播かれ
 鳴り響く名声ひとり歩きする
 往診の大きな鞆場所をとり
 悔しさに握り拳が泣いていく
 柄が取れていても扱いやすい鍋
 手の内をみんな読まれていた握手
 ずる休み派手に咳き込む電話口
 道具だけ揃えてあとは知らぬ顔
 みどり児のにぎる力に夢醒れる
 派手好みカードローンに殺さねる
 握られた手が温かいボランティア
 老い加減はかり動かぬやじろべえ
 遊び球で打者のねらいを推し測る
 派手婚が別れる時期を遅らせる
 金離れよすぎて先が案じられ
 三浪と決り家計簿火の車

登生 余史子 秀聰 泰良 正子 ふじ子 俊路 良子 和可 純子 サト子 絹子 かず枝 あかり 街湖 省子 八重子 達也 道子 旬多留 嘉信 亜希子 笑子 広和

何かあるニコニコ顔でやって来る
 派手か地味ほどよい人にまだ逢えず
 顔立ちの派手が女の氣に入らず
 フライパンで料理出来る腕
 リストラが家計で料理酒を止め
 少年の拳 口惜しきバネにする
 褒められた余韻か耳がこそばゆい
 仲直り出来る歩幅で喧嘩する
 一枚は派手目を入れる旅カバン
 吊り皮に朝のケンカを置いて行く
 紅白に派手な衣裳で期待され

川柳藤井寺

高田美代子報

再会の愛が芽をふくクラス会
 庭の隅動くものあり芽の鼓動
 老木を月のしずくが芽吹かせる
 いずれ芽が親はまてない夢を持ち
 入学の芽がスキップで通り過ぎ
 大都会 玉虫色の芽が競う
 伸びる芽に試練挫折という踏絵
 礼服を着るともしもの顔になる
 イエスノームもしもの時言えてたら
 習つとくもしもの備え護身術
 ひよつとした本命チョコかでかい箱
 中2の子の靴さぐつているもしも
 正直に言えばあのと許せたか
 医療ミスもしも私であったなら
 まっ白な紙にもしもの夢を描く
 仲良くしようもしも明日かも知れん

ふみ 徳三 充子 早智 朝華 瀧秋 かつ子 十三子 のぶ子 滋

志洋 春蘭 葉 昌子 瑠美子 終一 大八 悦子 史郎 六郎 六點 シマ子 芙沙 花梢 絹歌 桂子

くちびるがもしもを喋りそうになる
 もしもなんていけない事を考える
 気まぐれなあなたでいつも疲れます
 気まぐれな真面目も同じ私です
 きまぐれな小指が起こすつむじ風
 キュービッドの矢が気まぐれな目を射る
 気まぐれに誘った美女の強い酒
 気まぐれな蟻を待ってる落し穴
 気まぐれには遠く真人間の指
 気まぐれな男を待って石になる
 老婆と隠れた味を探す春
 うつとしいけれど血圧降下剤
 義理チョコの包みを妻に伏せておく

倉吉川柳会

松本よしえ報

合格の絵馬に神様手が足りぬ
 合格が一直線に畑を越え
 裏門を叩いて入り合格す
 芽の出ない内から種を頼まれる
 合格が狭い心を広くする
 水温む小川小魚すいすい
 水温む村中の春かき集め
 悪知恵とニキビ一緒に芽を出した
 めるま湯にひたり大学六年生
 彼岸きて春の小川の水温む
 遅く出た芽こそ大事にしてやろう
 花の芽が二十四時間眠らない
 雑草も芽を出す頃は愛らしい

美代子 扶美代 昭子 婦美枝 和樹 かつみ 正一 鐘造 美子 アキ 映三子 恒雄 宗一 末一 菊枝 康志 多哥由 かつみ 秋人 小生 雄々 喬水 玲坊 ちよ子 よしえ 智子 一夫

むつごろう干潟にタマゴ懐妊す
 温もりを伝える一句にキスマーク
 温くなり行く先ざきで忘れ物
 万物は芽吹くわたしは花粉症
 裏口で合格キッパ買って来る
 耐えて来春の日ざして芽をさます
 オリジナル嫁の料理に太鼓判
 家事育児こなして男合格す
 春うらら登校拒否も水ぬるむ
 温もりは笑いの中になうまってる
 人の世も芽が出るまでに暇がいる
 合格を確かめてから大股に
 まだ内緒ふたりの仲も温み出す
 試験管中でパイオが新芽生む
 温暖化変なところの水温む
 彼女ならきつと合格父母の目に
 三人の子に三人の芽があった

川柳塔打吹

米田 幸子報

自在鉤はずして温い掘こたつ
 麻雀に負けて炬燵を抱いて寝る
 こたつには眠りを誘う魔法あり
 こたつにはふとる磁石があるみたい
 借金取りがこたつに入り帰らない
 風邪の神今日もこたつの守りさせる
 婆ちゃんの貯金ささくあるらしい
 ささくさく和金融界が崩れだし
 ささくさくの音も小銭じゃわびしいな
 ささくさくと金のなる木はないかしら

和歌子 十三男 紀美子 玲子 節子 久子 康子 和枝 ゆり子 賀寿恵 民枝 天雀 陸子 悠子 次男 喜美子 螢 睦子 陸二 セツ子 玲泉 一夫 玲子 喬水 博丈 松盛 楨元

みそぎして玉砂利踏んで大前に
ざくざくとお金が湧けば苦勞せぬ
決心の歩幅ざくざく雪を踏む

妻という名の因縁がつきまとう
因縁と片付けられぬ深い愛
八方美人これも因縁を言う

因縁を語れば長い夜も更ける
春は曙清少納言才長ける
曙になって星屑そつと消え

曙に父さんゴルフ出掛ける
ねね様が落城の曙に笑む
曙の夢にあなたがあいにくる

躍いた子に母の声木霊する
曙に両手をあげてホーホケキョ
銀河鉄道曙までに着くだろう

曙と姉妹なのか夕暮
対岸はいつも曙さしている

富柳会

池

森子報

保護色で女黙って風を聞く
浅はかなハートころ寒椿
北風に負けてはいない脚線美

一面に花びら敷いた車間距離
ロボットのりモコン妻が握つてる
母となり浅い眠りにたえる愛

雷を落とす親爺が空の上
浅漬けの茄子むらさきは母の彩
炎抱くポインセチアのごとき君

石花菜
かつみ

節子
季芳

勝見
多哥由

孝恵
芳光

善江
和歌子

一京
順子

富枝
雄々

よしえ
幸子

紅紫朗
夕水

昭水
和子
三和子
東雲
信子
半蔵門

釘を打つ人間の音風の音
追われた鬼が開き直って食べた豆
ロボットに徹しきれない意地つぱり

本心を見せてロボット握手する
子には子孫には孫の旗じるし
晴れ姿じつと鏡に焼きつける

春は今身に添う風も土の香も
ピーポーがひとときわ多い雪の朝
愛の錯覚でのひらのくほみ

浅はかな女が生き生きてみえる
豆絞りの祭りが太鼓の音を呼ぶ
ご寄贈の心が温い駅座蒲団

消去キー握りロボット嘲笑う
バーゲンの魅力に負ける途中下車
愛してた時は許せたチヨコレート

漆黒の暗が汚れを消してゆく
もう泣かぬ女になって春障子
春はまだ浅くて笑わない根雪

姑の季節に冬が長すぎる
浅みどりやがて檜と想いたし
ロボットになろうと決めたイヤリング

川柳クラブわたの花

吉村 一風報

ひらがなの便り何度も読み返す
言い訳はしないただた筆不精
従妹よりバレンタインのエアメール

楽しんだつけが重たくのしばかり
高僧の経ありがたし布施痛し
石段の母をささえて梅日和

勇太
義清

たかし
文子

幹夫
尽呂久

春蘭
昭子

美代子
扶美代

治恵
勇

秋雄
登子

アキ
勝子

晴美
欣之

花梢
ひろこ
森子
剛治
ミツ子
道江
君子
春子
一風

冬の灯をふやし優しくなる便り
子の便りその裏のうら読んでやる
梅開く心もひらく空の冴え

身勝手な願ひばかりの春の絵馬
孫からの便り欲しくて手紙書く
風來坊たこの糸切れどうしてる

バーゲンに金の舞い散る師走風
字を覚え毎日手紙書いてくる
仲直りできるチャンスのある便り

事件よりさきにマスコミ嗅ぎまわる
赴任地へ妻のフアックス温かい
祈願して孫の合格便り待つ

旅便りおいしい顔が見えるよう
風呂上がりコップ一杯南無阿弥陀
組の鯉になるほど度胸ない

流水と桜便りのニュースみる
みそ汁の香りで目ざめ平和な日
組がチャンスくれた立ち直り

組のへこみでわかる世帯歴
拝啓のあとが続かず電話する
追伸に孫はまだかと梅便り

慰霊祭年に一度の花便り

幸枝
隆盛

寿代
信子

友甫
逸子

美智子
朝道

一
ますみ

トシエ
まさと

いつふみ
春江

知佐子
美代子

民子
明

八寿子
宏
鬼遊

おきそい

句会に参加することは、作句意欲や人
との交流などいろいろ得ることが多いと
思います。本社句会は同人・誌友を問わ
ず、大勢の御出席をお待ちしています。

『川柳からつ』
200号 記念句会

と き 6月6日(日) 12時半開場
ところ 唐津シティホテル
(JR唐津駅南口)
兼 題 「雲」「許す」「敵」「記念」
「やっばり」雑詠(各題2句)
会 費 1000円(当日)
出句締切 午後1時半
閉 会 午後4時半
連絡先 仁部四郎(☎0955-73-2262)
〒847-0082
唐津市和多田天満町1-2-13

◎6月6日宿泊希望の方は5月20日までに仁部に御連絡ください。

『川柳あしなみ』
500号 記念川柳大会

事前応募の部

課題と選者(各題2句・未発表作品)
「百」大江秋月選 「記」古川奮水選
「念」中塚礎石選

応募料 1000円(定額小為替)
応募方法 原稿用紙または便箋に句とともに郵便番号・住所・氏名と雅号(ふりがな)年齢・電話番号、大会当日の出欠と懇親宴の参加を明記すること。

応募締切 6月12日(土) 当日消印有効
応募先 〒672-8057

姫路市飾磨区恵美酒119-10古川奮水方
あしなみ500号記念川柳大会係宛

発表大会の部

と き 7月11日(日) 午前11時開場
ところ NTT姫路しらさぎ会館
姫路駅南口から徒歩10分

開会 午後1時 出句締切 正午
お話 「元祿繚乱うら話」菅原美文氏

課題と選者(各題2句・未発表作品・欠席投句拝辞)
「愛」中井昭子選 「塩」従野健一選
「縄」土田欣之選 「峰」中尾飛鳥選
「五」川島颯云児選

参加費 1000円
懇親会 大会終了後・会費2000円

京都塔の会
新緑吟行句会

と き 5月27日(木)
集 合 11時・地下鉄「北大路」南改札前
行 程 バス「特37号」11時18分乗車～
上賀茂神社前下車～上賀茂神社
～社家・西村家～京料理さくら
井(昼食、句会場)☎075-781-2570

兼 題 撮る・昏・たっぷり(各題3句)
席 題 当日雑感
会 費 5500円(当日)

申込・投句 5月20日までに都倉求芽宛
〒600-8428京都市下京区諏訪町
通松原下る弁財天町

◎参考 上賀茂神社～社殿国宝 世界文化遺産登録、葵祭・競馬で有名。
西村家別邸～ただ一つ公開の昔の面影を残す神官屋敷

しまなみ海道開通記念
汐風社創立50周年記念

第45回 愛媛川柳研究大会

と き 5月9日(日) 午前10時開場
ところ 今治市総合福祉センター
第1部事前投句(締切終了)

「返事」 本庄 快哉選
「覗く」 定本 広文選
「糸」 橘高 薫風選
「指切り」 月原 宵明選

第2部当日投句(各題2句・11時締切)
「足る」 井原みつ子選
「壁」 高木 不朽選
「鈍い」 塩見 草映選
「噂」 兵頭まもる選
「渦」 仲川たけし選

参加費 1500円(事前投句者は無料)
連絡先 〒794-0058今治市蒼社町1-5-51
しまなみ海道川柳大会準備委員会
越智青園

募集要項

「お城川柳」コンテスト'99

募集期間：平成11年5月1日～6月25日

テーマ

城

城について、あなたが心に描いているさまざまな情景を十七音字（定型）で詠んで下さい。

- ・犬山以外の地名を用いた作品は失格になります。
- ・応募作品は未発表に限りです。
- ・二重投句はご遠慮下さい。過去に発表された句に類似した作品は入賞を取り消される場合があります。

応募資格 どなたでも応募できます。

応募期間 平成11年5月1日～6月25日
(当日消印有効)

応募方法 ハガキに2句連記。
(一人2枚、4句まで)

応募費用 無料です。

応募はがき例

お城川柳コンテスト	お城川柳 ①	住所 〒	名刺・雅号（ふりがな）
	応募川柳 ②		電話番号（ ）

審査員

- 難波利三（直木賞作家）
 岩井三窓（社）全日本川柳協会幹事・香傘川柳本社参与
 橘高薫風（前NHK川柳選者・川柳塔社主幹）
 竹本瓢太郎（NHK川柳選者・きやり吟社主幹）
 佐藤一粒（犬山市市民展文芸選者・鶴かこ川柳社主幹）

賞

最優秀賞、優秀賞、審査員奨励賞など。
入賞作品には表彰状および副賞が贈られます。

発表

本人に直接通知いたします。また、入賞作品は葉文館出版（株）より単行本として出版され、各地の書店で販売されます。
(掲載句は選外佳作を含め500句以上の予定)

その他

応募作品は返却しません。入賞作品を含む応募作品の一切の権利は主催者に帰属します。

応募先

〒484-8501
 愛知県犬山市大字犬山字東畑36
 犬山市教育委員会・生涯学習課
 お城川柳コンテスト係 行

お問合せ先 同上 ☎ 0568-61-1800 (内線307)

入賞者表彰式
川柳大会

「お城川柳」コンテスト'99 と き 平成11年10月10日(日)
午後12時30分より
入賞者表彰式&川柳大会 と ころ 犬山市国際観光センター

入場無料

- ◆川柳大会への投句はすべて事前投句です。(欠席投句拝辞)
- ◆一題2句連記で、便箋に3題まとめて郵送して下さい。
作所・氏名・電話番号を明記して下さい。(事務局にて清記します)
- ◆投句締切は9月10日当日消印有効(賞あり)です。
- ◆題「響く」「実る」「佳境」選者は前段審査員が担当します。
- ◆投句宛先は上記と同じです。

本社 四月句会

四月七日(水)午後五時半

アウイーナ大坂

満開の桜が朝夕の冷えに震えているような七日、四月句会は百三名の出席により定刻開催された。大盛会となった去る三月二十日の川柳塔七十五周年大会を喜び合い、労をねぎらう言葉があちこちで聞かれる。

はじめに他界された同人森川まさお・水田民平両氏の冥福を祈り黙祷を捧げた。

お話は、和歌山県那賀郡消防本部勤務の三宅保州氏、仕事柄「地震のはなし」と題しプリントを配り、素人にもわかるよう解説される。「地震はなぜ起こるか」「地震への備え」「地震が起こったら」と大きく三項目に分けての説明である。

地震国日本に住む我々は、まさに活断層の上で暮していると言える。地震には内陸型(活断層)と海洋型とある。内陸型の地震の周期は千年から万年単位であり、海洋型は数百年から二百年の周期である。日本列島は海洋型地震が起こりやすい位置にあると言ふ。

地震の子知は大変難しい。地球上の百年は地質学上の何秒単位にすぎぬからである。徒らにおそれることはないが、知識を持つているに越したことはない地震である。淡路島には野島断層の一部が原形保存され、展示されている。

しめくりに、阪神・淡路大震災を詠んだ川柳が50句掲げられた。

月間賞は安藤寿美子さん(豊中市)に輝く。
(司会―朝子) (記名―いわゑ・澄子)
(受付―寿美・英王子)

席題「重」

川上大輪選

手を重ね祈り重ねて見る夕陽
気の重い話になって煙草消す
重々お詫びしますと後で舌を出し
許容量超える重さよビコグラム
失うたものの重さよ風が哭く
役職を離れて目下無重力
新聞より重いチラシが配られる
ドナーカードと重い約束してしまふ
盃を重ねて妻の愚痴かわす
母おんな妻と重ねて太い指
先代の額が見下ろす社長の背
緑の下重み忘れていませんか
漬物石が重くなったと老母が言ふ
重心の低さで勝負する男
重箱の隅に溜っていた噂

みつ子 千里 紫香 保秋 保美 鹿太 千代 希久子 吐来 洞庵 英子 保州 三男 鹿太 朱夏

自由だと錯覚してた無重力
お団子がまた重なった仏様
きそう気はないが体重勝っている
最近のわたしは二重人格者
孫抱けてお米十キロ抱けませぬ
軽い気でした指切りが重くなる
親切もだんだん重くなってくる
一重八重桜とおどるワンカップ
父のカレンダーの所どころに二重丸
約束が重たくなった花の頃
譲られた椅子が私に重すぎる
重鎮にまつられうまく使われる
關志だけあってからだの重いこと
無重力その後めだかも元気で
気軽うにふんふん聞けばプロポーズ
桜満開腰の重たい人という
佳

善人のふりも重荷になってくる
春には春の重さで生きる影法師
讚美歌に重ねた罪をはいでゆく
重荷にもならず出世もしてくれず
一日の重さ軽さも妻しだい

人

ビビビと来て愛の重心狂い出す
過去を消すように自画像重ね塗り
天

泰子 扶美代 瑠美子 義 伽羅 三男 女 かつみ たもつ 扶美代 夕花 雅文 瑠美子 重人 天笑 恵子 まつお 森子 弥生 つづや 蒲絹子 澄子 萬的 ダン吉

虹消えた後の言葉が重くなる

兼題「会う」 神夏磯 典子選

初めて会いにめがねきれいに拭いて行く
 ライバルに会えば心に張りができ
 逢えた日に重いコートを脱ぐつもり
 今年またたんばに会う線路わき
 会うたびに男の嘘が鼻につく
 流れ星再会出来るのはいつか
 負け犬の哀しみに会う日記帳
 花の下に約束があるかるい靴
 出会うたらびつくり箱をあけてやる
 単身赴任週に一度の天の川
 新しい出会いがあった日の美酒よ
 会うたびに母の温もり知るみやげ
 花の下会えば許せるほどの罪
 羅漢さんのひずみと出会う京の辻
 あの人に会うのがこわい好きだから
 会わない方がよかつたなあと
 幻と出会う桜の樹の下で
 えらいとこで町内のおしゃべりに会う
 神様のいたずらですか再会は
 お洒落して桜と競うことにする
 出会いから心ひかれるひとだった
 もう一度出会うチャンスを持つ夕日
 会者定離 明日はほろほろ散るさくら
 母の背が会う度毎に丸くなる
 恋なかばあふれるものを足して会う

満津子 照子 アキ 瑠美子 鹿太 房子 睦子 川綱子 柳弘 保州 狸村 みつ子 美代子 泰子 まつお あやめ 月子 正坊 千里 周信 勇太

核と会い狂ってきたのだと思う
 会う前に腹ごしらえをしておこう
 会う前にまあるくなっているところ
 あの人に会うため私生きてます
 頂上の風に会いたく山登る
 会うたびに言葉をくれる好きな人
 新しい自分に会おう花の道
 青春の夢沢山の人と会う
 指切りの温味を抱いて会いに行く
 佳

ダン吉 大輪 恵子 満寿蔵 武庫坊 一歩 千里 弥生 度 美代子 たもつ 愛論 萬的 たもつ 扶美代 かすみ 愛論 萬的 たもつ 美代子

ジョーカーを秘書に引かせて身を守る
 ジョーカーをつかんだらしい目の動き
 ポロポロになったトランプ父が持つ
 勝てるまで泣きやまぬ子と七並べ
 意地悪を少し覚える七並べ
 一生をポーカーフェイスで来た男
 手にあまるトランプがまず捨てられる
 ババ抜きをする ばあちゃんも仲間入り
 ジョーカーが笑顔でいつも手に残る
 四面楚歌今日を占うカードきる
 ジョーカーの裏に無気味な穴がある
 ライバルと神経衰弱ゲームなど
 ジョーカー一枚ひそかに春のポケットに
 ジョーカーを持っていきますと言っている目
 白魚の指からジョーカー抜いてやり
 トランプを何度繰っても鬼が出る
 ポーカーフェイスもう手の内は読まれている
 ジョーカーをポケットに集め病んでいる
 配られたカードでどつと出るつかれ
 トランプ遊び負けず嫌いな人と知る
 七ならべ誰かがいけずいます
 ジョーカーが出て行ったらし頼めるむ
 ハートのエースが堅い男の骨を抜く
 ババ抜きと七並べなら付き合える
 トランプを並べ苦境に落ちている
 トランプ古い一人遊びが上手くなる
 ポーカーのうまい男の細い指
 子が高く出してる札をひいてやる
 なす術もなくジョーカーを握りしめ

正雄 隆盛 美代子 哲夫 典子 伽羅 瑠美子 鬼遊 武庫坊 萬的 洞庵 保州 美代子 石舟 愛論 大輪 たりん 満寿蔵 千代 鬼遊 澄子 まつお しげお 希久子 雅文 賢子 森子

兼題「トランプ」 岩佐 ダン吉 選

この齢に会って知ること満ちること
 天 軸
 幸せに会うまでの橋長い橋
 会うだけで心休まる友がいる
 度
 ポケットのジョーカー出番こないまま
 どう切ってみてもトランプ吉と出る
 トランプのハートが持っていた妬心
 トランプと言えばババぬきしか知らん

アキ 充子 たず子 倫子

アキ 充子 たず子 倫子

アキ 充子 たず子 倫子

ジョーカーもやっぱり孤独なんだろう

住

ジョーカーを妻が時々ちらつかす

来る来ない来るを信じて切るカード

ジョーカーがいつも私を裏返す

かけひきのうまい男の七ならべ

トランプにするほどカード持っている

人

ジョーカーが帰つてこないさくら散る

地

切り札に核より鳩を出して欲し

天

介護保険トランプゲームかも知れぬ

軸

色あせたジョーカーいつも抱いている

兼題「鏡」

宮崎シマ子選

しみじみと鏡とお喋りする鏡

心鏡に映るほとけはまだおぼろ

袖の下鏡は決して受け取らぬ

等身大の鏡に喜劇繰り返す

胃カメラの鏡いでこころ覗かれた

昔の顔忘れましと言ふ鏡

鏡から美人がひとりと言ひ出した

本当の齢は鏡の中に置く

戦いがすんだら見ないコンパクト

来る来ない鏡に映した日の迷い

肚の底うつる鏡を持っている

真剣に眉をかいている鏡

大輪

いわゑ

隆盛

天笑

朝子

楓楽

朱夏

保子

義子

保子

アキ

剛治

正三

保子

保子

伽羅

月子

雅文

保子

弥生

天笑

利武

うぬぼれ鏡が好きな熟女でお喋りで
真似上手な鏡で私を苦しめる

お祝儀にもう酔つてはる鏡割り
鏡には映らぬ過去が恐ろしい

実験の朝は怒つてける鏡
母さんが鬼のお化けになる鏡

とても冷やか邪心見抜いている鏡
もつすでにクレオパトラになる鏡

人生にシナリオはなし万華鏡
鏡台を捨てる決断まだつかぬ

たれよりも素顔をしっている鏡
泣いてきた涙を知っている鏡

お化粧に鏡はいらぬおばあちゃん
悪役を貫きとおす鏡拭く

向う傷父を鏡にして育つ
母と娘は合わせ鏡の中に居る

賞味期限なんて無いよと言ふ鏡
美人とは言うてくれない我が鏡

わたくしの鏡美人をまだ知らぬ
どの顔も本当の私三面鏡

キラキラと亡母がこぼれる万華鏡
姿見をのぞいてみたい大仏さん

時々は無駄だ無駄だと言ふ鏡
正直な鏡に腹を立てている

佳

ブライドを持って鏡に励まされ
春の鏡が少しおしゃれをしると言ふ

実直な鏡は私を驕らせず
言い勝った私をなじる水鏡

動揺を静めてくれたコンパクト

人

試着室奮発しなという鏡

地

五分粥が鏡み気を起こさせる

天

素顔で良いと鏡夫のよさに言い

軸

美しい私の過去を知る鏡

兼題「茶」

川島諷云児選

愚痴つづく義姉に黙つたままのお茶

おいお茶を許してくれる妻である

左右から支えてくれた大茶盛

お茶漬けてたつた一人の誕生日

詫びに行きお茶の一つもです戻る

お茶汲みはしないエリート女子社員

力にはなれぬがせめて熱いお茶

むつかしい話もお茶で座が和む

忙中閑 主婦には主婦のティータイム

粗茶ですとホントにまずいお茶が出る

二番煎じのジョークでお茶が冷えてくる

お茶にする植木屋さんと花談義

入れ替えたお茶でつづきの話する

礼服を脱いで二人のうまいお茶

缶で飲むお茶は情緒にかけている

お茶よりも酒が良いのに決つてる

お団子とお茶でお昼をすましとく

出瀬らしのお茶に答えが浮いている

澄子

洋

楓楽

文

朱夏

保子

アキ

剛治

冬葉

倫子

周信

正坊

寿美

みつ子

まつお

泰子

寿美子

紫香

一度

義

月子

朱夏

茶柱が欲しいと思つてティーバック
お茶づけのタクアン春の音になる
ビール呑む妻の隣でウーロン茶

新茶頂きあとはたらふく愚痴を聞き
花冷えと静かに語る古都のお茶
険悪な空へお茶を入れ替える

生きのびる喜怒哀楽へお茶は友
結構なお話を聞く茶の心
もともとは茶のみ友達だった女

お茶漬けに大和魂生き返る
佗び寂の茶道にもある裏表
茶一服こじれた話解けてくる

宴会を冷静に見るウーロン茶
一杯のお茶で逢うたり訣れたり
佳

うすい茶を飲んで面接待たされる
下戸だからお茶のせいたくしています
午後の紅茶私のこころふくらます

レモンテイ甘い秘密を聞いている
まだお茶を誘うてくれる人がいる
人

家元の掟が茶筌からこぼれ
地

熟年の味覚に遠いウーロン茶
天

慰めていただきながらさめたお茶
軸

お茶漬けがうまい私も日本人
天

大輪

朱夏

希久子

武庫坊

弥生

千里

朝子

扶美代

洋

久美子

千秀

千子

金太

鹿太

兼題「遍路」 橋高薫風選

お遍路のニュース流れて春ですね
三本の橋が遍路を近づける
車買つたしお遍路さんになりましょか

膝さすりながら遍路にあこがれる
一円貨じつくり貯めて遍路杖
十万歩計で遍路の日に備え

国なまりにぎやかに行く花遍路
たんぼの春はやさしい花遍路
遍路道一息入れる花の寺

亡き母の化身か蝶と行く遍路
たましいの渴き癒して花遍路
菜の花の海を童画にする遍路

浮名流した昔はむかし遍路笠
鈍色のこころを匿す遍路笠
お遍路へささやいている古木の芽

透き通る青さの中へ行く遍路
菜の花に巡礼の白よく似合う
遍路宿似た境遇で連れになり

嫁の手を借りて遍路の有難し
遍路道島はやさしい人ばかり
外人の遍路と出合う道険し

同行二人なのに携帯もって出る
宿に帰ればカラオケになる遍路
ワンカップ遊山気分遍路笠

車からぞろぞろ降りてくる遍路
同行二人水子地藏に歩を止める
お遍路のひとり母さんらしき顔

同行二人息子にかかる事はない
遍路去り境内元の静けさに
湯の宿にお遍路さんの御一行

道中は年話して遍路
連休を八回連ね結願寺
佳

お遍路へ四国の山は高からず
花へんろ凄美人が一人いる
お遍路で老人力を溜めてくる

打ち終えて遍路再婚決意する
遍路とはこの世の旅をいうものか
人

同行二人波の音聞く遍路笠
地

父の空母の海見る遍路笠
天

定返の遍路戦跡巡礼す
軸

遍路笠脱いで鯛焼きを食べる
(清記一希久子)

しげお

金太

葉太

とし子

天笑

しげお

義

靖巳

シマ子

あやめ

萬的

満津子

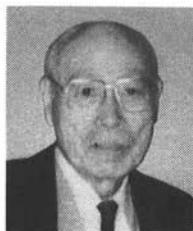
寿美子

満津子

募集原稿

エッセー・柳論・紀行文・読後感など御意見・御感想を一四〇〇字。この一句一心に残る句など、一句(作者名)と二〇〇字程度の文章。ひとこと一本誌に対する建設的な御意見を、雑感などを三〇〇字。

◎なお、採否は編集部にて御一任ください。



水田民平さんを偲ぶ

春城 武庫坊

水田民平さんは老後の生活を楽しまために芦屋市の句会で川柳を始められ、平成四年に橋高薫風先生御指導の高島屋ローズカレッジ西宮教室に出席、いつもおだやかな笑顔を浮かべて作句の道を励んでおられました。

平成七年の阪神大震災で教室の閉鎖、そのあと教室のメンバーでローズ川柳会が発足されました、被害に遭われた民平さんはご自由な仮設住宅の生活にも拘らず熱心に出席されておりました。天性のおおらかな気持の持ち主で仮設生活の出来事を楽しげに語られた様子が今も目に浮びます。

解体の決まりお日様照り過ぎる
気心の知れて仮設を抜けられぬ
居酒屋の一杯仏の顔になる
向い風負けぬ被災地赤トンボ
落ち葉散る仮設住み慣れ老い樂し
難民にならぬ行政待つ仮設
仮設にも鬼が来るらし豆の音

梅雨に入りしめる仮設は虹を待つ
仮設にも生きて寛ぐ冬陽差す

どの句にも不便な仮設住まいを苦にせず明るく生き抜かれた日々がよくわかります。

平成九年に住居を新築御子息の御一家と一緒に住まれるようになりました。

重い腰孫の笑顔が上げにくる

振りかぶる孫の刀にこけてやる

ばあちゃんとそろそろ代わる孫の守り

ご家庭でのよいおじいちゃんぶりを拝見。

同居して漸く慣れて皿洗う

にもほほ笑ましいお暮らしが偲ばれます。

平成十年一月薫風先生等のご推挙により同人になられ、これからもっとがんばらんとと喜んでおられたのにそのあと体調をくずされて七月からは投句になりました。自由吟の

麻酔漬け痛みは飛んで雲の中
の投句を見て皆が心配し、会長の秋元でるさんが連絡されたところ前立腺炎の疑いで検査

入院されているとのこと一同ご回復を祈っております。それから毎月投句が続けられ、今年一月二十六日初句会の自由吟に

お正月せめて歯刷牙変えてみる

最高点の句が民平さんとわかり心機一転好い方に向かっておられるのではないかと、私が一月三十日ご自宅へ互選の最高点をご報告かたがた、お見舞いに上がりましたところ、奥様より前立腺癌で痛みが取れず今はお会い出来ないといひ驚きました。

奥様のお話では川柳をやっていたよかったです。と言つては、句が出来る私の代筆で投句していましたが、民平さんの川柳への熱意に感服いたしました。

その後の二月句会には投句がなく気にしておりましたところ三月三日の訃報に接し、あの日お目にかからず帰ったことが残念でした。三月四日の御通夜には薫風先生がお忙しい中、お参りして頂き民平さんも喜んでおられたことと思います。民平さんの死の直前までの作句には感動いたしました。極楽の句会で素晴らしい句を作ってください。

浄信院光道民法居士
心からご冥福をお祈り致します。

春待たず君は柳道走り抜け

武庫坊

柳界展望

大阪川柳の会

とき 6月2日(水) 17時開場 ところ サンケイビル本館3階322号室 題と選者 脱ぐ・戸井田慶太△ふわり・板野美子△欲・高杉鬼遊△命(いのち)・磯野いさむ 各題2句 席題なし 会費 800円 18時締切 各題秀句に産経新聞社賞

新同人紹介

長谷川 淳
— 薫風・まさよ・隆盛推薦 —

吉本川柳

第4回「旅」の没句評句会は6月4日(金)に変更。
(投句締切日) (句会開催日)
第5回「芝居」 7月10日(土) 7月23日(金)
第6回「女」 9月10日(金) 9月24日(金)

▽出版 版△

編「川柳カタカナ語辞典」

★3月6日、奈良番傘川柳会は片岡つとむ追悼川柳会を法隆寺の中官寺嶋和殿で開催。百五十九名出席。本社同人の秀句は次のとおり。達筆に生きたつとむの墨の色 宮口 笛生

★4月6日、出雲むらくも創刊50周年記念大会はサンチェリバーホールで58名の参加を得て開催。本社同人の入賞は次のとおり。

ほんとうの笑いは腹にためてある 宮園射月芳
よく笑う海を探しに行つてくる 原 章峰
桜咲く地球の明日を信じよう 西出 楓楽
いい出合いする日へ笑顔ためておく 金村 青湖
そば枕母の童話がまだ続く 伊藤 寿美
人間を続けて犬と住んでいゝる。 原 章峰
これからを考えている五十肩 宮園射月芳

★川柳塔みちのくは5月1日、波多野五楽庵主幹古稀記念句会を弘前市米山荘で開催する。
★NHK学園発行「川柳春秋」53号のこの人に聞く、欄に遠山可任参与の「川柳の基本は笑いにあり」と題する記事を10ページにわたって掲載。また、八木千代参与の「わたしの柳号由来」も同じく掲載。

▽人事往來△

★4月6日、黒川紫香相談役・西出楓楽副理事長は同人数名と出雲むらくも創刊50周年記念大会に選者として出席。

報 計

(社)全日本川柳協会理事長・山田良行氏(北国川柳社主幹・金沢市)は3月15日、脑梗塞のため急逝。76歳。葬儀は3月17日、金沢市のセレモニー会館兼六にて行われ、多数の柳人が参列。

■ 橘高薫風監修・田中正坊

ため死去、88歳。

■ 八木千代参与は川柳句集「椿守」を発売。四六判上製本・160ページ・序文 橘高薫風・跋文金築雨学・頒価2500円。葉文館出版

■ 月原宵明相談役は川柳句集「しまなみ」を発売。四六判上製本・252ページ 序文仲川たけし・橘高薫風 黒川紫香。頒価2000円 葉文館出版

▼ 計 報 ▲

■ 上田柳影氏(元同人・大阪市)は2月20日、病気の

句会名	日時と題	会場と投句先
川柳塔 みちのく	1日(土)午後4時から 告白・唸る・女女しい	弘前市桶屋町4-7 居酒屋とんぼ二階「川柳道場」 〒036-8202 弘前市元大工町50-5 波多野五楽庵
川柳塔 わかやま	9日(日)午後1時から 幻・注目・訪ねる・「会釈」	近鉄カルチャーセンター 2F JR和歌山駅前 〒641-0012 和歌山市紀三井寺111-2 牛尾緑良
川柳 ねやがわ	23日(日) 正午から 修理・ムード・橋・自由吟	寝屋川市立総合センター 4F 京阪寝屋川市駅からバス総合センター前 〒572-0063 寝屋川市春日町9-9 高田博泉
川柳 ふうもん社	23日(日)午後1時から まだまだ・グラグラ・顔	JR鳥取駅構内 シャミネホール 〒680-0033 鳥取市二階町3-102-2 植田一京
高槻川柳 サークル 卵の花	20日(木) 正午から 午後・メリット・真ん中 ・よろめく・自由吟	高槻現代劇場306号室 阪急高槻駅徒歩7分 〒569-1142 高槻市宮田町3-8-8 川島颯云児
西宮北口 川柳会	10日(月)午後1時から 天井・変わる・ 嫌(いや)・自由吟	西宮市立中央公民館 阪急西宮北口駅南出口徒歩5分 〒662-0841 西宮市両度町2-19-515 山本義子
はびきの 市民会 川柳会	23日(日)午後1時から アイドル・自由・ ちやほや・「公認」	羽曳野市立陵南の森公民館 近鉄高鷲駅北東歩10分 〒583-0882 羽曳野市高鷲8-31-11 塩満 敏
東大阪市 川柳 同好会	22日(土)午後6時から パン・迷う・味方・時計	東大阪市立社会教育センター2F 近鉄布施駅北長堂小学校隣 〒578-0925 東大阪市稲葉3-3-21 片岡湖風
富柳会	1日(土)午後1時から 挑戦・もしも・自由吟	富田林市立中央公民館 近鉄富田林駅南出口徒歩3分 〒584-0043 富田林市南大伴町4-1-10 池 森子
ほたる 川柳 同好会	11日(火)午後1時から 辞書・叩く・パレード	豊中市立蛭池公民館 阪急・モノレール蛭池駅西へ150米 〒560-0033 豊中市蛭池中町 3-10-28 井上直次
岬川柳会	16日(日)午後1時半から 互選「めがね」・ スピーチ・気くばり	岬町淡輪公民館 〒599-0301 大阪府泉南郡岬町淡輪3592 八十田洞庵
南大阪 川柳会	26日(水)午後6時から 平穏・併用・別居・変異	玉造老人憩いの家 JR環状線玉造駅西徒歩3分 〒543-0012 大阪市天王寺区空堀町15-18 寺井東雲
もくせい 川柳会	17日(月)午後1時から 童話・盛る・ゆっくり・自由吟	豊中市立中央公民館 阪急曽根駅南東歩5分 〒561-0826 豊中市島江町1-3-5-801 田中正坊
八尾市民 川柳会	11日(火)午後6時から 風・噛む・藤・ストレス	八尾市文化会館4F 近鉄八尾駅東へすぐ 〒581-0845 八尾市上之島町北1-15 宮崎シマ子

★日時・会場などが変更になる場合は、高須賀金太(0724-43-4889)へご連絡ください。

5 月各地句会案内

(50音順)

句会名	日時と題	会場と投句先
尼崎 いくしま	7日(金)午後1時から 国・育つ・雑詠(A・B)	サンシビック尼崎3F 阪神尼崎駅南西徒歩5分 〒661-0035 尼崎市武庫之荘5-25-17 春城年代
尼崎 尾浜 川柳会	11日(火)午後1時から 一生・イメージ・自由吟	尼崎市尾浜公民館 阪急武庫之荘南口から 市バス④番尾浜2丁目下車 〒661-0976 尼崎市潮江5-2-47 田辺鹿太
岸和田 川柳会	15日(土)午後1時半から 占う・襟足・生い立ち・会話	市立福祉総合センター2F 南海線岸和田駅東歩3分 〒596-0827 岸和田市上松町610-85 芳地狸村
京都 塔の会	27日(木)午前11時集合 撮る・昏・たっぷり	春の吟行句会 本文P140参照 〒600-8428 京都市下京区弁財天町328 都倉求芽
くろぼこ 川柳会	16日(日)午後1時から 原・結ぶ・のびのび・節	逢坂公民館 〒689-0343 鳥取県気高郡気高町飯里84-4 鈴木公弘
堺川柳会	13日(木)午後1時から みどり(折句)・ 城(共選)・求める	堺市総合福祉会館 南海高野線堺東駅市役所西入る 〒593-8305 堺市堀上緑町2-16-3 河内天笑
川柳会 梨花	15日(土)午後1時から 印・部屋・すぐ・雑詠	鳥取勤労者総合福祉センター 1F会議室 (鳥取駅南) 〒680-0044 鳥取市御弓町40-3宮木方 坂田和歌子
川柳クラブ わたの花	28日(金)午前10時から 蛭・括る・ナイフ	八尾市生涯学習センター 〒581-0866 八尾市東山本新町9-3-16 吉村一風
川柳塔 打吹	15日(土)午後1時から まちまち・囃・臆面	倉吉市上灘町上灘公民館 〒682-0805 倉吉市南昭和町21 野口節子
川柳塔 唐津支部	2日(日)午後1時半から 乾杯・スプーン・泳ぐ・雑詠	唐津市栄町公民館 〒847-0082 唐津市和多田天満町1-2-13 仁部四郎
川柳塔 なら	6日(木)午後2時から 商い・国・くどい	船橋フロムワン(船橋商店街内) 近鉄奈良駅西・JR奈良駅北歩10分 〒636-0144 奈良県生駒郡斑鳩町稲葉西2-4-23 中原比呂志
川柳塔 ふくべ	22日(土)午後1時から 手柄・詩・くつろぐ・「古参」	福部村中央公民館2F研修室 〒689-0115 鳥取県若美郡福部村細川16-3 村上信子
川柳塔 まつえ	8日(土)午後1時半から 油断・見栄・騙す	松江市雑賀町 雑賀公民館 〒690-0859 松江市国屋町381 竹内すみこ
川柳塔 みぞくち	24日(月)午後7時半から 住所・読む	溝口五区集会所 〒689-4201 鳥取県日野郡溝口町溝口757-3 小西雄々

カタカナ語川柳

閑人閑話

田中正坊

平成二年(一九九〇)から同七年まで六年間にわたって、ほぼ隔月に「川柳こぼれ話」と題するエッセイを書きつづけたが、編集の仕事をやめたこともあり、休載して今日に至った。三年間のブランクがあるので、この際タイトルも「閑人閑話」と改め、川柳以外のテーマも加えて、気の向くまま、筆の向くままに書くこととしたい。

今回、橘高薫風監修・田中正坊編「川柳カタカナ語辞典」を葉文館出版から刊行したので、その紹介も兼ねて「カタカナ語川柳」について書きたいが、実はこのテーマは平成二年三月号の「川柳と外来語」でふれている。カタカナ語にはずっと以前から関心を持っていたが、たまたま全日本川柳協会がガイドブックを企画、その一項目としてカタカナ語川柳があり、私が執筆を依頼された。

そこで、『川柳塔誌寿古希記念句集』をは

じめ番傘・ふあつすとの同人句集や各種の合句集、個人の句集、各柳誌にあたった。当初は、百語ぐらいを例示するつもりであったが、調べるほどに語数が増えて六百四十二語となり、例句も約千六百句となったので、これを一冊にまとめることとした。

川柳におけるカタカナ語の増加は、新聞・雑誌の文章をはじめとして、一般的な日本語の中に増えたことが原因で、このような傾向を一部には日本語を乱すものとして嘆く論者もいるが、これは良い・悪い、あるいは好ましい・好ましくない、ということを越えた必然的な流れであり、それが文芸の世界にも浸透してきたのは当然であろう。

川柳と同じく短詩型文芸である俳句では、かなり古くから注目されており、すでに大野雑草子編『俳句外来語辞典』があるが、カタカナ語の中には、季語に採用されているものさえある。よく知られている句に、

摩天楼より新緑がバセリほど 鷹羽 狩行
の中のカタカナ語」と題して朝日新聞に執筆しているが、最近、短歌の中にカタカナ語を使うことが多くなり、今夏、長崎で開かれる『心の花』全国大会は、カタカナ語短歌をテーマとすることに決まったとしている。

話はカタカナ語川柳に戻るが、それが多用されはじめたのは、戦後の昭和三十年以降で先人の句に、

見渡すとユダの心をみんな持ち 路郎
コスモスも遂に日本のものとなり 水府
スナップにあかの他人の女居る 紋太
がある。同時代の柳人にもカタカナ語をよく使う人とそうでない人があるが、中尾藻介・橘高薫風・岩井三窓の各氏の句を紹介する。

セレモニー終り小使室にいる 藻介
手榴弾かつて握りし手にレモン 薫風
焼酎でシャンソソうたう悪いかね 三窓
その他の例句については、この本を参照してほしいが、最近では自由吟の中で詠まれるとともに、句会における兼題としてカタカナ語が出題されることが多くなり、例えば川柳サークル卯の花では、四題のうち一題をカタカナ語としている。

終わりに指摘しておきたいのは、カタカナ語の正しい意味を知らずに使ったり、表記を誤っている場合、新奇をてらってカタカナ語を乱用したり、あやしげな和製カタカナ語を得たと使っているケースが少なくないことである。カタカナ語の知識と用法を身につけ、ボキヤブラリーを豊かにして、いい句を詠みこなすようにしてほしい。

編集後記

★川柳塔創刊七十五周年記念川柳大会もみなさまの御協力で盛会のうちに無事終わることが出来まして、心から感謝申し上げます。

★その大会の様子を限られた誌面に精一杯特集しましたが果たして、みなさんにお伝え出来ただろうか。

★織田正吉氏のお話には、川柳家には観察眼と自由でとらわれない視線、見えないものを見る想像力が必要とあった。川柳家に限らず社会人としても大切なことだと思ふ。それによって、人間関係にもゆとりが出来るのではなからうか。

★先日、娘の家の引越しの手伝いに上京した。その帰りの新幹線でのこと。アメリカ人らしい一家と乗り合わせた。十二、三歳ぐらい

の少女を頭に女・男・男と五人の子供連れの夫妻の末の坊やはまだ六ヶ月ぐらいの乳児。私は本を読みながら、時々、見るともなく覗いていたのだが…。

★夜九時すぎのこととして、下の坊や二人は眠っていたが、真ん中の七、八歳ぐらいの坊やが一人活発に動いていた。と言っても別に騒ぐでもなく、ゴミを捨てに行ったり、パパとママとトランプをしたり、とてもお行儀がいい。上の少女二人は本を読んでいたが、その中に二人肩を寄せ合って寝てしまった。

★観察眼を働かせたら、名目(？)をものに出来たかでも知れないが、近頃の日本では珍しくなった子だくさんの家族の様子に、何となく温かい雰囲気を楽しませてもらっているうちに大阪に着いていた。

(み)

ひとこと

こぼんちゃん

淀川で

産湯つかったこぼんちゃん

西宮北口川柳会の席題「川」で秀句に選ばれた私の句である。句

報の翌月号「西北の風」で、正本

水客先生から「こぼんちゃん」が利

いている」という評を頂いた。

さて、このこぼんちゃんだが船

場・島の内を中心とする旧大阪市

内では、男の子を上の方から兄

ん・中ぼん・小ぼんと呼んだ。それから下は名を冠して、○ぼん・

□ぼんと言うが、兄弟構成が分

らなければ、小さい子はみな「こ

ぼん」と呼ばれていた。

私の本名は「正三」。したがっ

て子どもの時から「しょうぼん

または「こぼん」と呼びならされ

た。だから柳号「正坊」は、「し

ようぼん」と呼んで頂きたい。

田中 正坊

☆今年の初め、私は引越し

をした。築四十年に近い我が

家が老朽化し、地震の折

の亀裂も少しずつ広がり、

その上昨年台風により瓦

が損傷したのを機に建て替

えて、息子一家と同居する

ことになったからである。

四十年間の暮しの澁のよう

に溜ったがらくたを、胸の

痛くなるような罪悪感の中

で捨て去り、最低限必要な

荷物と今、仮住まいをして

☆家の建て替えというのは

近隣への遠慮もあり、種々

神経を遣う大仕事であった。

また家庭内部でも、ふだ

んは意見の衝突のなかつた

夫婦が、折り合えぬ面をみ

せることも多くあった。

☆これでよかったのかなあ

と言う思いが、つきまとっ

たまに春が来て、やがて

初夏、どんどん工事は進行

して、今は完成を待つばかり

りとなってしまった。(希)

暑中見舞広告募集

本誌七月号に掲載する暑中見舞広告を募集いたします。同人・誌友ならびに各川柳会(句会)の誌上名刺交換の場として、積極的にご利用をお願いする次第です。広告のスペースと掲載料は、左記のとおりですので、お申込みのほど、よろしくお願い申し上げます。

★個人 一口 二〇〇〇円

(氏名・住所・電話番号など掲載)

★団体 次の四種といたします。

- ① 1/3頁 六〇〇〇円
- ② 半頁 九〇〇〇円
- ③ 2/3頁 一二〇〇〇円
- ④ 一頁 一八〇〇〇円

原稿締切 5月25日

〒545-0005 大阪市阿倍野区三明町二-1-16

ウエムラ第2ビル202号室

川柳塔社



【イメージ・キーワード】
“Value for Human”
バリュー・フォー・ヒューマン

ミッシェル・アルクール



オーエスケーの
紳士服

株式会社 **オーエスケー**

〒540-0024 大阪市中央区南新町1-4-7
(06) 6941-9631

川柳塔・水煙抄投句用紙

種目「

」 発表（7月号）

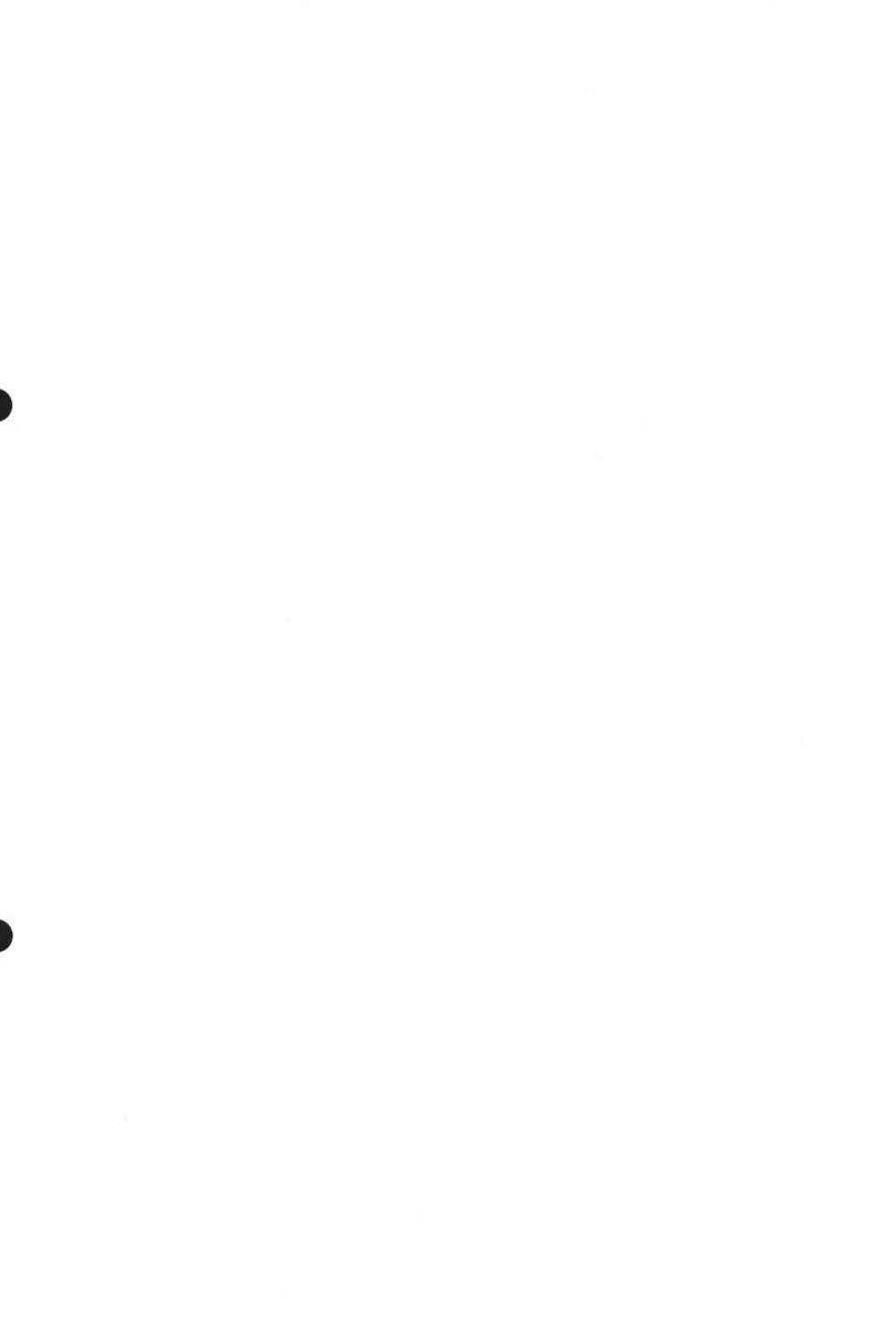
地名

雅号

きりとりせん

◎ 8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

同人・誌友 マルで囲んでください。



作品募集

7月号発表(5月15日締切)

川柳塔(8句)	橋高薫風選
水煙抄(8句)	河内天笑選
渺湖抄(3句)	八木千代選
茴香の花(3句)	西出楓楽選
「乾杯」	酒井一壺選
「スプーン」	植田一京選
「泳ぐ」	前 たもつ選

初歩教室「ときどき」(3句) 吐田公一担当

8月号

課題吟「雲」「許す」「敵」「姿」
初歩教室「姿」

葉忌 本社5月句会

とき 5月7日(金) 午後5時半
ところ アウィーナ大阪 4階
天王寺区石ヶ辻町19-12 電06・6772・1441
地下鉄谷町9丁目徒歩8分・近鉄上本町徒歩3分

兼題 「扇」「子」「門」「谷」「たず子」
「酔う」「前」「たもつ」
「恋」「宮」「西」「弥」「生」
「座る」「板」「尾」「岳」「人」
「妻」「橋」「高」「薫」「風」

席題 1題 当日発表(各題2句以内)
会費 500円 投句料 400円

本社6月句会 7日(月)予定

兼題 「すんなり」「虹」「怒り」「口」「運」

夜市川柳募集

第12回「祝」 橋高薫風選
ハガキに3句 5月末締切
投句先 〒593-8305 堺市堀上緑町2-16-3
河内天笑方 堺川柳会

「川柳塔」への投句について

- (1)川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄へは誌友(誌代半年分以上前納の定期購読者)に限り、本誌最終ページの投句用紙を使用してください。
 - (2)渺湖抄・茴香の花欄・一路集(課題吟)および初歩教室への投句は、同人・誌友に限り、川柳塔柳箋を使用してください。ただし茴香の花欄は女性だけ。
 - (3)各欄への投句は、必ず氏名と住所(県・市名)を明記してください。
 - (4)各欄への投句数および投句締切期日の厳守をお願いします。
- 川柳塔本社事務所へのご連絡は、土・日曜、祝日を除く平日の10時から16時までにご利用いたします。

定価 六百元(送料92円)

半年分 四千元(送料共)

一年分 七千九百元(同)

平成十一年五月一日発行

編集兼 橋高薫

発行人 美研アート

印刷所 美研アート

発行所 川柳塔社

電話(06)545-0005

振替 〇〇九八〇一五二三三六八番

〒545-0005

大阪市阿倍野区三好町二一〇一六

ウエムラ第2ビル202号室

第14回 国民文化祭・ぎふ99

応募受付期間 4月1日(木)～6月30日(水) (消印有効)
 事前投句 (各題2句・未発表作品に限る)

「真ん中」 大森 風来子 選
 「人 情」 橋 高 薫 風 選
 「踊 り」 佐 藤 良 子 選
 「移 る」 辻 野 谷 龍 城 選
 「城」 吉 岡 龍 城 選

応募料 1000円

応募方法 所定の応募用紙を使用のこと

応募先 〒501-4297 郡上郡八幡町島谷228

第14回国民文化祭八幡町実行委員会
 事務局「文芸祭」川柳係

発表川柳大会 10月24日(日)10時半～15時半

(電話 0575-167-1122)

当日投句 「紅葉」「歴史」「包む」(各題2句)

選者 上岡喜久子 近藤季男 細川聖夜

賞(予定) 文部大臣奨励賞 他多数

問い合わせ先及び募集要項請求先

〒500-8570 岐阜市藪田南2-1-1
 第14回国民文化祭岐阜県実行委員会

事務局「文芸祭」川柳係

(電話 058-1272-1111 内線3634)

主催者 文化庁・岐阜県・(社)全日本川柳協会・他

第23回 全日本川柳秋田大会

とき 6月13日(日) 午前10時開場
 ところ サンプルラル大潟
 (秋田県南秋田郡大潟村北1-3)

宿題 第1部(事前投句5月10日締切)

「待 つ」 井 原 みつ子 選
 「再 会」 植 木 利 衛 選
 「習 う」 竹 森 雀 舎 選

◎3.5×18cmの句箋1枚に1句宛宛入、各

題2句、無記名、封筒に住所・氏名を

明記、投句料1000円(定額小為替

・現金書留)を同封して左記へ郵送

投句先 〒530-0041 大阪府北区天神橋2丁目北1-11
 ステップイン南森町702号

宿題 第2部(当日出句・午前11時半締切)
 (社)全日本川柳協会全大会係宛

「写 真」 佐 藤 美 文 選
 「深 い」 青 木 晴 嵐 選

「茶 碗」 田 中 八 州 志 選

「招 待」 波 多 野 五 楽 庵 選

◎各題2句・各部各題とも未発表作
 仲川たけし・磯野いさむ・橋高

第2次選者 薫風・吉岡龍城・大野風柳・今

川乱魚

会費 3000円(昼食・記念品共)

観光 6月12日(土)・3200円

前夜祭 同日午後6時・8000円

◎宿泊・観光・前夜祭の申込は5月10日まで

申込先 〒018-1722 秋田県南秋田郡五城目町鶴の木34

全日本川柳秋田大会事務局

(社)秋田中央観光社 五城目営業所